
TSUWAMONO ~ 第一部 ~ 友との絆・互いの思い

武竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TSUWAMONO ～第一部～ 友との絆・互いの思い

【Nコード】

N6357A

【作者名】

武竜

【あらすじ】

惑星ルフィスを舞台に様々な思いを胸に秘めた戦士たちの生き様を記した物語。第一部ではミラム大陸に位置するアルフォード王国とディーベルク王国の戦争の中で生きる一人の剣士、【ケン・シュナイダー】を中心に特殊戦略部隊の戦いを記している。彼は生き残ることができるのか！？

プロローグ

「彼は友人だった…… かけがえのない友だった…… そして同じ屋根の下で暮らした兄弟だった…… 彼との絆は決して崩れるものではないと信じていた… そう信じていたかったんだ……………」

ここはルフィス。地球とは違う異界の星。

そこには人と同じ姿の生き物が文明を築き、繁栄を極めていた。その他にも神獣や魔獣といった神秘的な生き物も生息している。

この物語は惑星ルフィスにある大陸、ミラムに築かれている王国、アルフォードに住む、一人の青年の物語である。

——とある城内にて——

今、一人の風格ある顔つきの勲章を胸につけ、肩には縦筋が四本入り、星が三つ入った軍服に身を包んだ人物が急ぎ足で場内の廊下を歩いていた。

その表情はえらく厳しい顔をしている。

男は衛兵が守る大きな扉の前で足を止めると、一呼吸置いて、名乗りを上げた。

「ノリス・ヒッターッ！　ただいま参りましたッ！！」

決してばかでかいとは言えないがその芯から響く声で一瞬、衛兵がビクついた。

「ヒッターか、入るが良い」

「はッ！」

扉の向こうにいろと思われる人物からの許しを得て、ヒッターは静かに扉をくぐった。

部屋の天井は非常に高く、ガラス張りで円形の形をしている。天井からは心地よい光が差し込み、部屋一面を明るく照らしている。部屋の奥の床は段上になっており、その頂点には玉座があり、一人の男が座っている。

玉座に座っているところを見ると恐らく国王なのだろう。その姿には威厳が感じられ、見る者を圧倒する。しかし、その顔は決して厳しくなく、むしろ優しく親しみのある顔だ。

ヒッターは段上の前までやってくると地面に膝を付き面を下げた。

「ヒッターよ、そう畏まらずとも良い。面を上げよ」

「はッ！」

王が言っても直畏まるヒッター、これはもはや性分なのであろう。面を上げたヒッターの目に映ったのは、どこことなく寂しい表情をした王の姿であった。

その表情に内心僅からながらも驚いていたが、表情には出さず口

を開いた。

「アルフォード王よ、私にどのような用があったのでありますか？」

「……………」

ヒッターの言葉に、王は先ほどと変わらぬ表情で彼のまっすぐな目をじっと見つめていた。

両者の間に沈黙が流れる。

しばらく続いた沈黙であったがアルフォード国王はやっとの思いでその重い口は開いた。

「ヒッターよ、デীবベルクからの宣戦布告が出されて早半年近くになる。普通で考えればたったそれほどの僅かな時間しか経っておらぬ。だが、たったその半年近くの間で多くの大切な国の宝といえる兵士や民がその命を散らせて逝った」

「……………」

ヒッターは無言のまま王の言葉に耳を傾ける。

「ワシは、もうこれ以上の犠牲が増えることだけは避けたい。そのためにも力を貸してはくれまいか？」

「無論です。私如きの腕でよければ、幾らでも力を振るいましょう。全ては、国の平和のために……………」

一問一答の如く即答したヒッターの言葉に、王は力強く頷いた。二人の間には上下の事柄では無く親友のように絶対的に互いを信

頼している証であると言える。

「しいてはヒッターよ、そなたに『特戦』を率いてもらいたい」

「『特戦』…ですか？」

「さよう、腕の立つものを集めてあらゆる任務に対応し生き延びることできるという考案を基に、私が独自に設立しようと思っている部隊だ。部隊の名は特殊戦略部隊、通称、特戦。その特戦をヒッター、お主にその部隊の司令官を勤めて欲しいと思っているのだ。【戦場の稲妻】として名を馳せたそなたにならできると思った。やつてはくれまいか？」

「喜んでお引き受けいたしましょう」

「やってくれるか、礼を言うぞヒッター」

「お褒めの言葉もつたいなく存じます」

アルフォード王からの感謝の言葉。

普通ならば謙遜するとこだがヒッターはアルフォード王との付き合いが長いためこういったものだど理解している。

それは、やはり絶対的な信頼関係で結ばれた者達だからこそである。

「既に何名かは私のほうで選抜しておる。ヒッターよ頼むぞ」

「承知いたしました」

「うむ、では第六控え室に待たせておる。行ってまいれ。それと、

その後のメンバーの選抜は全てお前に任せる」

「はッ！」

最後にヒッターは一礼をしてその場を去った。

「頼むぞ、ヒッターよ……………」

それを見送った王はどこか寂しげにポツリと呟いた。

——第六控え室——

王が独自に設立した特戦。

そのメンバーであると思われる隊員四名がすでにこの控え室で待機していた。

男が三人に女が一人、男の方にはどう見ても十代と思われる者ま
でいる。

「極秘の任務と言っているが軍は我々にどんな任務を言い渡すつもりなのかな？」

優しそうな青年が怪訝そうに周りに尋ねる。

それに反応して三人は青年の方に視線を注いだ。

その質問に真っ先に答えたのはこの中で一際大柄な長身の男だった。

「がっはっはっはっは！ そんな細かいこと気にしてもしょう

がないでさあ。ま、告げられるまで気楽に待ちましようや!」

豪快に笑った長身の男は、さも気にしないと言った風に青年の肩を叩きながら言った。

「そうだな、君の言うとおりだな。気にしていても仕方がないな」

優しい顔つきの青年が、長身の青年の言葉に強くうなずいた。

「不安なのは分かるけど、今は待ちましよう? ……ところで君は不安にならないの?」

穏やかな物腰で気品を備えた長髪の女性はなだめる様に青年に言う。と、先ほどから古ぼけた本を読んでいる銀色の眼をした顔立ちの良い童顔の青年に質問をした。

「別に……」

女性の言葉に無愛想に青年は読んでいた本に目を向けようとしたその時……

コン、コン

ドアをノックする音と共に一人の男が部屋に入ってくる。そこにはヒッターが立っていた。

「おはよう、諸君。私はノリス・ヒッター、君たちの上司となる者だ」

「「「はッ! おはようございます! ヒッター司令官!」「「「

ヒッターの挨拶に勢い良く返す四人。

「今日から君たちは特殊戦略部隊。特戦の隊員となった。そこで一人ずつ名前を言ってくれ。まず、その青年」

「はッ！ 自分はアルマン・ギルガネスでありますッ！」

「うむ、では次の者」

そう言っただけヒッターはこの中で唯一の女性に目を向けた。

「レイナ・フランクであります」

「自分はマック・エイガーでありますッ！！」

「レオン・マッケインです…」

各々が自己紹介を追い、簡単な戦闘能力を見るための模擬戦闘をした。

内容は個人が扱う武具とそれにあつた戦闘スタイルの確認。

模擬戦闘終え、ヒッターの前に来た四人は自らの司令官の渋った顔をしているのを見て不思議に思い、四人を代表してアルマンが疑問を問いかけた。

「司令、どうかなされましたか？」

「うむ、諸君らの戦闘力は申し分ない。しかし、これでは敵に接近戦や奇襲を用いられると対応しにくいのだ」

「「「「……………」」」」」

そうなのだ。

全員が全員、近接戦闘の向いてはいない者が多かったのだ。

レイナは長距離精密射撃を得意とし、マックは機関銃を振るい、レオンの戦闘力は魔術士として高い力を持ち戦略を立てるのが得意である。しかし、呪文詠唱時は完全に無防備になってしまう。

唯一近接戦闘を得意とするのはアルマン、彼一人である。彼はオールラウンダーで、近・遠の両方に対応できる。

「誰か、腕の立つ近接戦闘を得意とする者を探さなくてはならぬ……」

「「「「……………」」」」」

設立して間もないと言うのに関門にぶつかってしまった特戦。しばらく全員が考えていると、アルマンが打開策があるのか、ヒッターに述べた。

「ヒッター司令、腕の立つ剣術使いに心当たりが……」

「なぬ！？　そうか、それでその心当たりとやらは？」

「はい、兵士達の間での噂でして……その者の剣は兵士百人に匹敵し、その速さは矢の如し……と言う噂がありました、その者の名は確か『ケン・シュナイダー』と言っておりました。今は確か、ここから五キロ程離れた『タッセル』と言う町の護衛に赴いている筈です」

その話を聞いたヒッターはしばらく考え込むと、意を決したかのような顔つきをした。

「全員、荷造りを始めろ。これよりタッセルまで赴き、ケン・シュナイダーと接触を試みるッ！」

「……はッ」「」

そういうと各隊員は十分に支度を終え、剣士ケン・シュナイダーがいるタッセルへ向かうのであった。

プロローグ（後書き）

第一部主な登場人物の紹介

└アルフォード王国┐

└特殊戦略部隊┐

アルマン・ギルガネス：隊長：26歳：男性：黒色の中髪：茶色の瞳：人柄がよく誰にでも好かれる人物。任務のために冷酷になると努力しているがいざとなると人命を優先してしまう。ギルガネス家の人間で超人的な運動能力を持つ。その運動能力は発射された弾丸を簡単に避けられるほど。刃物から銃までありとあらゆる武器を使いこなすエキスパートでもある。

レイナ・フランク：副隊長：25歳：女性：紫色の長髪：緑色の瞳：隊の中では頼れるお姐さんの存在。狙撃の名手でその集中力は三日間、同じ射撃体勢でいられるらしい。

マック・エイガー：ムードメーカー：20歳：男性：茶色の短髪：青色の瞳。大柄で長身。細かいことは気にしない豪快な性格。バルカン砲などの重火器を使用して戦う。

レオン・マッケイン：天才：17歳：男性：水色の中髪：銀色の瞳：IQ200を超える超天才。言葉数が少なく、無愛想。その頭と魔法で数々の戦いを勝利へと導いてきた。また、ハッキングを得意と

し、セキュリティ解除や、情報の奪取なども行う。

ケネス・フロイド：曲者：20歳：男性：黄土色の中髪：黒色の瞳：妙な言葉遣いをするお調子者だが任務の時には隠れた冷酷さを見せることがある。爆弾に関しては確かな腕を持つ。特戦の曲者的存在。

リリス・クラフト：オペレーター：16歳：女性：朱色の中髪：水色の瞳：性格は非常に明るく、特戦のマスコットの存在。彼女の存在が隊員の戦場で受けた心の傷を癒しているのは疑いようがないだろう。オペレーターとしての腕も確かなものを持っている。

ノリス・ヒッター：司令官：56歳：男性：灰色の短髪：茶色の瞳：若かりし頃は【戦場の稲妻】という二つ名で恐れられていた。今でもそのたくましい体つきは衰えておらず、また歳を取ったことでより一層その風格は増している。人としても戦士としても隊員達に影響を与える人物。ちなみに【戦場の稲妻】という二つ名は彼が使用するガントレットが電撃を流すことが由来。

—その他の人物—

アルフォードⅤ世：国王：45歳：男性：黒色の中髪：黒色の瞳：現、アルフォード王国の最高権力者として王座に座る者。国は民あつてのものと考えており、常に民の事を考えている。この戦争を終わらすために特戦を設立することを決意する。

紅髪の剣士【壱】

——最前線激戦区タツセル——

ドウン、ドウン、キン、ガン、チュン、チュン、カン、ガウウウ
ウウウンッ！

そこには様々な音が支配していた。

銃声、金属音、爆音、怒声、悲鳴……。

ここは戦場……様々な人々の意思がぶつかり合う場所。

そして、命の光が消えていく美しくも悲しくもある場所である。

その戦場に、一際目を張る戦闘をする青年がいた。

「せいッ！ やぁ！ オラッ！！」

青年は片刃の剣を上段から振り下ろして、相手の持つ剣を縦に両断し、腹部に蹴りを放つ。

それを横目で見ながら刀を水平にして左から斬り掛かってきた敵軍の兵士の肩を右下から素早く左上へと斬り、後ろから奇襲を掛けて来た兵士に対して刀を後ろへ一気に突き出し、刀ごと相手突き飛ばした。

「怖気づいたのなら帰れッ！！ これ以上向かってくるなら次は容赦しない！！ 遠慮なく斬るッ！！」

大きな声を上げて敵兵士に凄み、力を見せ付けるように下ろした刀を前へ振りかぶった。奇襲を加えた波状攻撃は隙が無く完璧だった。

それでも相手は、何ら苦勞した様子も無く味方を全員斬ったのだ。

その様な光景を目の当たりにしてはどんなに戦意向上した兵士も怯えて逃げてしまうものである。

現に、先ほど青年の目の前にいた七、八人の兵士全てが青年を恐れて逃げ出していた。それを見て青年はその場で一息つこうと、近くの岩陰に隠れた。

「ったく、誰も命の奪い合いなんてしたい訳じゃないさ…大切な人が一瞬にして奪われる…そして戦場で自らの命が散れば、その親子、兄弟や恋人も奪った相手を恨み、憎んでしまう…どうしてあちらさんは戦争したがるのかねえ？」

誰に言うのでも無く青年はぽつりと独り言のように呟き、紅色の髪をかきながら戦場とは不釣合いの蒼穹色の空を見上げた。

——半年前、ミスバルにて——

それは一瞬の出来事だった……。

透き通った青空から一筋の閃光がミスバルに舞い降りた。閃光は広がり町を、人を、全てを飲み込んだ。

ミスバルという名の町はこの日を境に地図の上から消え去った……。

これが後に『ミスバルの悲劇』と呼ばれる大事件であり、これを合図にディーベルク王国とアルフォード王国の戦いは火蓋を切る。

この事件をケンが耳にしたのは事件勃発から三時間が経過した後だった。彼はその時、中立国ナミルの開放都市ナルミダにいた。

ケンとはまたま剣術の師匠の元に指導を受けにやってきていたのである。

彼はその報道を聞くや一目散に家族のいるミスバルヘエアバイクを飛ばした。エンジンがオーバーヒートするほどまでに飛ばしたため一時間も経たないうちに彼はミスバルにたどり着いた。

しかし、そこにかつて商業都市として栄えていたミスバルという名の町は存在しなかった。もはやそこにあったのは地面を深く抉り取ってできた巨大なクレーターだけだった……。

ケンはしばらくの間何も考えることができなかった。彼は今すぐにでもその場に崩れ落ちて泣き叫びたかった。しかし、あまりにも受けた衝撃が強すぎて彼には泣くことも、叫ぶこともできなかった。

もはやその時の彼には目の前に広がる巨大な影をただただ呆然と見ることしかできなかった……。

——現在——

「もう、あの時のような思いはゴメンだ…そして、それをもう誰一人として味合わせたくない…だから戦う。この悲しみを生まないために……」

握ったこぶしを見つめ、青年は決意を秘めた表情で空を見上げた。

大地とはやはり違い、空はどこまでも青かった。

まるで汚れを知らぬかのように、どこまでも、どこまでも澄み切った青空のままでいた。

ピルルルル、ピルルルル……………

青年の胸に取り付けてある通信機が戦場に鳴り響いた。
それを、繋げると切羽詰った声が通信機からノイズと共に青年の
耳に届いた。

聞き取るため耳を澄ます。

『こちら……い四警備隊……現在……敵……隊……強襲により……壊滅
……危……急……救援……要す……』

砂嵐のためか途切れ途切れだが通信の内容はある程度内容が把握
できる言葉が伝わってきた。

どうやら他の部隊からの救援要請らしい。

青年はそれを聞いた途端、そばにあった剣を手に持った。

「第四警備隊って言ったところから本国寄り北に約1キロぐらいか
……」

『こちら、第七警備隊所属、ケン・シュナイダーだ！ 第四警備隊、
応答を願う。繰り返す、第四警備隊、応答を願う！』……通じない
のか！？ クツ！ 俺が行くまで耐えてくれ……」

青年は苦戦を強いられているであろう第四警備隊にそう願をかけ
ると颯爽と風を切って駆け抜けていった。

仲間を助けるために、悲しみを、憎しみを増やさぬためにも風の
如く戦場を駆け出した。

——タッセルから東に二キロの地点——

一機のヘリが地上すれすれまで降下し、中から数人、地上へと降り立った。降り立ったのは五人。一人は軍服を纏っているが他の四人はバトルスーツという伸縮性に優れ、且つ耐久性をも備えた戦闘服を着用している。

「もう、まもなくケン・シュナイダーが向かったとされるポイントへ到達します」

「うむ、了解した」

首を少し後ろへ捻り、青年——アルマンの言葉に頷くと老兵——ノリスは首を前に戻した。

只、黙々と顔色一つ変えずに道を歩んでいく五人。無駄話をすればそれだけ体力を浪費すると分かっているからである。

流石に軍人の中でも選りすぐりの人材である。

只一人、大柄な青年——マックは退屈そうな顔を作っていた。

「しかし、一体どんな奴なんですかね？ そのケン・シュナイダーって奴は……」

怪訝な顔半分、退屈な顔半分でマックが疑問を投げかける。

そこに小柄な少年——レオンは溜息をつきながらマックの質問に答える。

「ケン・シュナイダー、出身はミスバル。幼い頃から剣術を学び、“ミスバルの悲劇”で家族を無くしたのをきっかけに軍に入隊した、と言う情報を得ています」

それをアルマン、マック、そして気品のある女性——レイナの三

人はそれぞれ耳を傾け、驚愕の声を上げる。

ケンの過去に驚いたのではなく、其処まで知っているレオンの情報収集能力に驚愕しているのだ。

「よくここまで調べたわね」

感心したようにレイナが首を縦に振る。

「別に、仕事柄です…」

レオンは別に大したことでもないかのように素気なく答えた。
ちなみに、ケンが味方への支援のため本来の警備担当地区から離れたという情報もレオンの持ってきた情報だ。

「無駄口はそこまでしておけ！ 今敵はいないが、タッセルは襲撃を受けているんだぞ！ 気を緩めるな！！」

「……はッ！！」「」「」

ノリスは一括させ、雑談を終了させた。

——タッセルから東へ2・3キロの地点——

ここも先程、ケンの居た地域と変わらない音と光景が広がっていた——否、あそことは違いアルフォード軍の警備隊が劣勢に追いやられている。

第五部隊は全滅し、残った第四部隊も六人中たった二人になって

しまっている。

しかも部隊長は敵の強襲により彼ら二人をかばって殉職。それに加え、敵の猛攻により生き残った内一人も右腕骨折と右下腹部に銃弾を浴び、重症である。

軍人とはいえ、女性である彼女には今の状態を耐え切るだけの体力は恐らくないだろう・・・。

「はあ…はあ…ゴフツ！……うつ、はあ…レイ…ト……」

呼吸も荒く、吐血までしている。応急処置はしているが早急に治療をしないと手遅れになる。仲間の状態でそれを悟っているため相手に負担をかけないように、できるだけ早めに移動している。

「大丈夫か！？ くそッ、救援はまだなのか！？」

先程から数回にわたり救援を要請しているが、一向に返事すら返ってこない。

先刻のケンの通信も電波状態が悪く、届いてないのだろう。もし、このまま援軍が来なかったら………そう胸に不安が広がっていた、その瞬間――

ドドドドドドツッ！！

ダウン、ダウン！！

「ガッ！！！！…リーガ…レイ…ト……ごめ……」

激しい銃声と共に、脇に抱えた仲間の体が次々と撃ち抜かれ、全身を紅に染めながら地に伏せ………息絶えた。

ゆっくりと、静かに崩れる仲間を見ていた…いや、見ていること

しか出来なかった彼は体をワナワナと震わせ……

「ミッシェル……！！！！！！！！」

涙が出るのを堪えながら仲間の名を叫んだ。

「そこまでだ……」

迷彩の入った装甲服を身に纏ったディーベルク軍の兵士が仲間の死に涙するリーガの前に現れた。

死に絶えた兵士——ミッシェルの前で蹲っていたリーガはディーベルク兵を睨みつける。

「……何故だ？」

「何がだ？」

リーガの言葉の意味が判らないディーベルク兵は怪訝そうに首を傾げる。

「何故……俺では無く……彼女を撃つた……！」

「別に、特に意味はない……狙いやすい方から狙っただけだ」

ディーベルク兵の言葉に怒りで今にも飛び掛りそうになるが、辛うじて手に握りこぶしを強く握るだけにとどまらせた。

「彼女は、三日後に結婚式を控えていたんだぞ！？……それを……」

先程ミツシエルが言った、レイトという名。それが彼女の婚約相手だろう……後三日に迫った結婚式を彼女は心底楽しみにしており、今日だけで十回以上聞いていた。その時の心底嬉しそうな彼女の笑顔が脳裏に焼きついたままである。

しかし――

「くだらないな……」

「……!」

「これは戦争だ……犠牲の出ない戦争は戦争と呼びはしない」

悲しいかな……戦争と言う世界の中で一切そんな理屈はまかり通らない。

あらゆる人、あらゆる犠牲が出ると、これは戦争だからと、仕方ないからと、そんな一言で片付いてしまうのだ。

そんな世界に身を投じる軍人としてならリーガの言い分はむしろ筋違いと言え、そしてデューベルク兵の言い分が戦争と言う世界では正論と言われる方が多いだろう。

悪く言ってしまうえば戦争に人情も何もある訳が無い……

勝利を得て生きるか、敗北して死ぬかの二つに一つしか元来存在しない世界なのだから……。彼、リーガもそれは分かっているのだろう……けれど理性と感情は、時として別物である。

「貴ツ様……!」

咆哮しながら相手に突撃銃を構え、トリガーを引く。

しかし、怒りに我を忘れた者の攻撃は先が読みやすく、敵兵は引き金がかかる前に拳銃で突撃銃を撃って弾き、間合いを詰め、腹部に蹴りを入れる。

「ガはッ！」

衝撃が腹に伝わり、体にいきわたる。

リーガはよろよろと二、三步後退すると地べたに崩れ落ちた。デ
イベルク兵は体制の崩れたリーガに拳銃を突きつけ、心臓に銃口
を合わせる。

「終わりだ……」

その瞬間、リーガは自分の心臓の音が大きく耳に入り、全ての景
色がスローに見えた……。

紅髪の剣士 【弐】

——時を少し遡って——

「ここがそのポイントです」

レオンがノリスに報告を入れる。

「うむ、しかし…肝心のケン・シュナイダーが見当たらないが……」

レオンの報告に怪訝な顔をするノリス。

それはそうだろう…何せ居る筈の本人がいないのだ。
怪訝に思っても不思議ではない。

「いえ、情報によると今この区域に向かっているとの事です」

冷静にノリスの疑問に手元の小型ディスプレイに映し出されたマップを見せるレオン。

「ふむ、そうか…しかし何故彼は自分の区域を離れてこ……」——

トクトクトクトクトシ……

ドウン、ドウン……

「ミッシェル……！！！！！！！！！！」

「……………ッ!?」

ここまで来たのだ? そう言おうとしたノリスの言葉を突然の銃声と悲鳴に遮られた全員が(約一名違うが)それに驚愕したがノリスの一括ですぐに冷静に戻り、全員声の方向へと向かった。

「各人、私を中心にアルマンを左斜め前方、マツクを右斜め前方、レイナを左斜め後方、レオンを右斜め後方に配置し、進軍する! 各人後方の警戒を怠るな!!」

「……了解!」

そこにはアルフォードの装甲服を纏っているのだろう…血で判別がつきにくい血まみれの女性……恐らく死んでいるだろうと思われる者と、銃を突きつけられた男性がいた。

その向こうには銃を突きつけているディーベルクの兵士以外にも、その後ろにさらに2人控えていた。

現状の状況に、すぐさまアルマンが脇に装備したハンドガンを取り出し、安全装置を外して銃口を相手の拳銃に狙い定める。

(間に合うか!?)

内心焦っていた。これだけの距離が有り、尚且つアルマンの目には既に指が引き金を引く直前だということを捉えていたからだ。

祈り半分の思いで相手より早く引き金を引こうとするアルマン……が、その時……

「やめろおお……………」

その大声にアルマン、そして相手兵士までも引き金を引くのを止めて声の方へ目を向けた刹那――

スパ――ン！！

鋭い金属音が当たりに響いたのと同時に細身で片刃の形状をした独特の剣を持つ青年が友軍の兵士と相手の兵士の間に割って入った。

状況的に見ると、どうやら彼が敵兵の拳銃を斬り落としたらしい。

互いが状況に驚いていると、青年が声を上げた。

「ヒーローみたいなお約束で悪いけどな！　これ以上仲間はやらせはしないッ！！」

「何者だ！？　貴様！！」

「オレはケン・シュナイダーだっ！！」

大きな声で、高らかに名前を名乗り、尚且つ仲間の危機を救った紅髪の青年が我々、特戦が探していた“ケン・シュナイダー”だったのだ。

（彼のあの独特な剣……思い出した……刀と言いましたね。あの剣は………）

手に持つ刀で相手の急所を外したところを斬りつけ、続けざまに後ろの2人の銃を破壊し……尚且つ彼らの両腕を斬り付け戦闘不能にした。

あっと言う間の事だった。自分が知る中でもトップクラスの實力

といても過言ではない。

唯一それを見ていたノリス・ヒッターは驚愕に表情を染めた。
だが、驚愕しているのはノリスだけでなくアルマンや他の隊員全員、果ては敵兵も驚愕していることだ。

他の者とは違いノリスだけは幾分冷静な面付きだったが…。

「グッ！ …貴ッ様！！」

「やめろ…退却だ」

「何故ですか！？ まだ……」

やれる！ そう口にしようとした、が――

「戦況が見えんほど愚か者が貴様は？ ならば去れ！ そのような者はディーベルクには不要だ……」

「！！！！ ……了解」

隊長格の言葉に一瞬反論しそうになるも、その兵士は冷静に咎めて去っていった。

それをケンは見送りながら仲間の安否を気遣っていた。男性は命に別状は無い。が、女性の死が精神的に不安定にしているとの事でマックは男性と女性の骸を運び、レイナは男性の症状を見ており、レオンは二人の護衛として先にタッセルへと戻っていた。

この状況でなんだが特戦の本来の目的はケン・シュナイダーの實力をはかり、心・技・体どれも申し分のないようであれば特戦への入隊を命じる事なのだ。

（おそらく彼は入隊を命じられる。實力は先程の戦闘を見ても問題

はないだろう……)」

「ケン・シュナイダー！」

アルマンの考えが伝わったのか…ノリスはケンに声をかける。

「あなたは？」

声にケンも反応する。

「私は、特殊戦略部隊。通称、特戦を率いているノリス・ヒッター中將だ」

「ッ！！ はッ！ 失礼しました！ 貴方がかの有名なヒッター將軍でしたか。先程の口の聞き方、失礼しました！」

「気にしなくてよい」

目の前の人物の正体を知り、驚き、敬礼をするケン。

どれだけ、軍に身を投じて日が浅かろうと、戦場の稲妻の異名を持つノリス・ヒッターを知らないものはアルフォード、ディーベルグ共にいないとまでされている程の人物だ。

彼の異名の由来は現役に装備していた雷を纏ったガントレットからきている。

「つかぬ事をお聞きますが…そのヒッター將軍が私などに何用で？」

ケンはどうしてかの將軍が自分に接触してきたのか不思議に感じていたのだ。

「うむ、おぬしに私が率いる特戦に配属してもらいたい」

「はッ！ ご命令と有らば！！」

ノリスの命を即座に快く受けるケン。

それにノリスとアルマンは一つ頷き合い。

「自己紹介は後にして、この辺で下がりましょう。幸い、敵も撤退しているようです」

アルマンの言葉どおり徐々に敵が後退していく。

「うむ…ではこれより帰還する！ 二人とも遅れるな！」

「はッ！」「」

二人ともノリスに敬礼を返し、帰路へと付く。

こうして、三人は一度タッセルでマック、レイナ、レオンと合流し、アルフォード王国へと帰還していくのだった。

—— 第六控え室 ——

新しくケンを加えたメンバーは、ノリスに最初に集合した控え室で待機しておくようにと命じられここで待機している。

彼らは新隊員のケンと自己紹介を交わしているようだ。

「初めまして、ケン・シュナイダーです。これから、同じ部隊の仲間どうし、よろしくお願いします！」

「よろしく、おれはアルマン・ギルガネスだ」

互いに静かに握手を交わす。

「がっはっはっは！！　おう、よろしくな！　ケンッ！！　俺はマック・エイガーだッ！！」

次に豪快に笑いながら握った手をブンブンと荒々しく振るマック。

「はいッ！　よろしくお願いします！」

負けじとケンも振る。どうやら気が合っているようだ。

「私はレイナ・フランクよ。よろしく」

「よろしくお願いします！」

アルマンとはまた少し違い、おしとやかに握手した。

「……レオン・マッケインだ。よろしく……」

他とは対照的にレオンは事務的に済ませた。
握手は一応している。

「こちらこそ、よろしく」

一同自己紹介をすませ終えたときに丁度よく、ノリスが入ってきた。

その脇には見慣れぬ男女を一人ずつ連れている。

ノリスの入室で全員起立をし、敬礼をする。それをノリスは手を上げて座るように促す。

「よく聞いてくれ。重要事項を二つほど伝えておく……一つはもう気付いておるだろうがケンを含めここにいる二人もこの特戦に加わる事となった。二人とも挨拶をしてくれ。そしてケンも既に終えていると思うが、改めて自己紹介を頼む」

「了解しました」

ケンは言われたとおりにするため、二人の隣に並んだ。

「では、わいから言わせて貰ってもええかいな？」

独特な言葉遣いをする男性が名乗り出る。

「ええ、構いませんが……」

「おおきに、……ゴホン」

礼を言い、一歩前に出ながらわざとらしい咳をする。

「ええ、わいはケネス・フロイド입니다。特技は潜入工作と爆弾作り。ここではまだまだ新米やさかい、よろしゅう頼みます」

一例をして一歩下がる。

「えっと、リリス・クラフト十六歳です！ この特戦のオペレーターをやらせて頂きます！ よろしく願います！！」

元気よくお辞儀をして、ケネスと同じように一步下がって元の位置に戻る。

ケンの番になり、他の二人同様一步前に出て挨拶するようだ・・・

「最後はオレだな。自分はケン・シュナイダーです！ 特技は剣術……ってか正直、これしか取り得がありません！ 何かと至らない自分ですが、これからどうぞよろしく願います！」

そう言いながらお辞儀するケン。これしか取り得が無いと断言した時に何人が笑っていたのはご愛嬌だ。それからは各自、自己紹介を交わしていく。

ノリスはそれが終わるのを見計らって、手を叩いてみなを意識をこちらへと集中させた。

「自己紹介も済んだ所で、本題に入らせていただく」

隊員全員緊迫した顔つきに変わっている。

「先程言った重要事項のうちのもう一つ……それは特戦の初任務だ！」

「初任務……」

アルマンが全員の心を代弁したような感じだ。

「うむ……敵ディーベルクが、このアルフォード王国の本格的侵略に

向けての前線基地と思わしき施設を発見した。特戦は直ちに現場へ行き、敵施設を占拠せよとの事だ」

「うつしやああ！！！！ 特戦の初任務にしては打って付けってもんだぜ！！！」

気合をいれ、戦意を高揚するマツク。

それに水を差す様にレオンが冷静に述べる。

「…その情報に信憑性はあるんですか？」

「その辺については問題ない」

「…了解しました」

ノリスの言葉を聞き、着席した。

「他に質問は？」

ノリスの問いにアルマンが挙手をした。

「その前線基地は具体的にどの辺なのですか？」

「ミルバーク森林地帯だ」

「ミルバーク…了解しました」

「うむ、では他に質問は？」

「……………」

全員が沈黙する……

これは問いに対して肯定を差している。

「うむ…ではこれより特戦は今から四時間後に各自第七格納庫に集合する様に、その後は追って通達する。尚、これ以降の特戦の隊長はアルマン・ギルガネスとする！ 以上だ！！」

「「「「「了解ッ！！」「」「」「」」」」」

各人一度解散し、戦いの準備をする。

特戦の初任務……果たして彼らの先に待つものとは、希望か、あるいは絶望なのか…

その答えを知るものは、まだ誰もいなかった……。

紅髪の剣士 【武】（後書き）

第一部主な登場人物の紹介

くアルフォード王国く

―特殊戦略部隊―

ケン・シュナイダー：第一部の主人公：16歳：男性：紅色の短髪：
黒色の瞳：アルフォード王国の機動歩兵として前線でその自慢の剣
術を巧みに使って活躍していた。その腕が買われアルフォード国王
直属の部隊で特殊戦略部隊、通称『特戦』に配属される。彼が軍に
入隊したのには悲しい過去が関わっている。彼が使用する剣術は天
魔無双流と呼ばれるものでそのあまりに巨大な力のために神にも魔
にもなれると言われている。またその所持する剣もこの世界で流通
している両刃の剣ではなく、片刃の剣、刀である。情に熱い男でこ
の情こそが彼の長所でもあり短所でもある。

アルマン・ギルガネス：隊長：26歳：男性：黒色の中髪：茶色の
瞳：人柄がよく誰にでも好かれる人物。任務のために冷酷になろう
と努力しているがいざとなると人命を優先してしまう。ギルガネス
家の人間で超人的な運動能力を持つ。その運動能力は発射された弾
丸を簡単に避けられるほど。刃物から銃までありとあらゆる武器
を使いこなすエキスパートでもある。

レイナ・フランク：副隊長：25歳：女性：紫色の長髪：緑色の瞳：
隊の中では頼れるお姐さんの存在。狙撃の名手でその集中力は三日

間、同じ射撃体勢でいられるらしい。

マック・エイガー：ムードメーカー：20歳：男性：茶色の短髪：青色の瞳。大柄で長身。細かいことは気にしない豪快な性格。バルカン砲などの重火器を使用して戦う。

レオン・マッケイン：天才：17歳：男性：水色の中髪：銀色の瞳：IQ200を超える超天才。言葉数が少なく、無愛想。その頭と魔法で数々の戦いを勝利へと導いてきた。また、ハッキングを得意とし、セキュリティ解除や、情報の奪取なども行う。

ケネス・フロイド：曲者：20歳：男性：黄土色の中髪：黒色の瞳：妙な言葉遣いをするお調子者だが任務の時には隠れた冷酷さを見せることがある。爆弾に関しては確かな腕を持つ。特戦の曲者的存在。

リリス・クラフト：オペレーター：16歳：女性：朱色の中髪：水色の瞳：性格は非常に明るく、特戦のマスコットの存在。彼女の存在が隊員の戦場で受けた心の傷を癒しているのは疑いようがないだろう。オペレーターとしての腕も確かなものを持っている。

ノリス・ヒッター：司令官：56歳：男性：灰色の短髪：茶色の瞳：若かりし頃は【戦場の稲妻】という二つ名で恐れられていた。今でもそのたくましい体つきは衰えておらず、また歳を取ったことでより一層その風格は増している。人としても戦士としても隊員達に影響を与える人物。ちなみに【戦場の稲妻】という二つ名は彼が使用

するガントレットが電撃を流すことが由来。

―その他の人物―

アルフォードⅤ世：国王：45歳：男性：黒色の中髪：黒色の瞳：
現、アルフォード王国の最高権力者として王座に座る者。国は民あ
つてのものと考えており、常に民の事を考えている。この戦争を終
わらすために特戦を設立することを決意する。

初任務【壱】

——特殊戦略艦オルフィス艦内にて——

「以上で本作戦の説明を終了する」

説明を終え、ヒッターは一呼吸入れる。

「何か質問がある者はいるか？」

「司令、作戦ポイントまで小型船で向かうのは分かったのですがこれでは敵のレーダーに引っかけりませんか？」

アルマンは首をかしげて質問した。アルマンだけではない、そこにいたメンバーのほとんどが疑問に感じていた、一人を除いて…。

「そんなに心配しなくてもいいですよ、隊長。我々が搭乗する小型船『マージ』にはステルス機能が付いていますから」

レオンが当たり前のように述べた。

「ステルス機能？ なんじゃそりや！？」

マックが素っ頓狂な顔をしている。

「ステルス機能っていうのは要はレーダーを欺くシステムのことですかな。あんさん、軍に入って何年になりやす？ こんな言葉、一般人でも知ってますがな？」

ケネスが少しあきれた様子で答えた。

「うるせえ、俺はそういう知的なことが苦手なんだよ！」

マツクは開き直った様子で答えた。

「レオンやケネスが述べたようにマージにはレーダーに反応しないステルス機能が搭載されている。マージだけではない、このオルフィスにもステルス機能は搭載されている。その他にも通常艦にない様々な特殊な装置を搭載している。いわばこの艦はアルフォードの最先端技術の塊のようなものということだ」

ヒッターが少々誇らしげに述べた。その後、数点質問などを済ますと隊員たちは解散し作戦準備にはいった。

——小型船マージにて——

あれからどれほどの時間が経っただろうか。ブリーフィングが終了して格納庫にあるマージに搭乗してからというもの、口を開かずにいる。隣にはレイナが座っている。彼女は愛用の狙撃銃を黙々と整備していて、こちらを振り向こうとはしない。正面を向くとレオンが読書に耽っている。こちらも自分の世界にのめり込んでいるようだ。（いったい、何の本だろう？ ずいぶん古い本のようだ……）その隣にマツクが座っているがよほど退屈なのだろう、ぼんやりと天井のライトを眺めながら時折、大きなあくびをしている。（そっいえばケンはまだ搭乗していない、一体どこをほっつき歩いて

いるのやら……）機内の空気はどんよりしていて重い。

（まあ、無理もないかあ、なんだかんだ言っただけで初任務だからな……）

そう思いながら自分自身も緊張していることにアルマンは気づいた。本来なら隊長である自分がこの場の雰囲気改善しなければいけないと思ったのだがどうすればよいのか分からず、ただ首から垂れ下がっているお守りを手のひらにのせ、眺めていた。それは不思議な色をした首飾りだった。大きさは手の甲よりひと回り小さく、金色の円形のふちの中に球体の宝石が輝いている。その宝石は常に定まった色を持たず、少量の光を放ち、アルマンの心を引き込んでいた。が、すぐにアルマンは現実の世界へと連れ戻された。原因は搭乗口の方角から聞こえてきた一筋の声だった。

「特戦にとつての初任務、張り切っていきましょう！」

機内の異様な雰囲気を知ってか知らずか、ケンが気合の入った声で搭乗してきたのだ。機内の空気は一瞬にして軽くなった。

「おお、ケン、気合が入っているじゃねえか！」

マツクが待っていましたとばかりに声を上げる。

「別に気合が入っているのは良いことだけど、あまり力み過ぎてもだめよ」

レイナが続いて穏やかにケンの方を向いて述べる。が、その手はまだ愛銃の調整を行っていた。レオンは一瞬、ケンの方を向いたがまたすぐに本を読み始めた。一瞬にして機内の空気が軽くなってい

た。

「しかし、我々だけで敵の前線基地を占領するなんて司令も大胆な作戦を考えますね」

そういうケンの表情はうれしそうだった。

「それだけ我々が信用されているということだ。我々一人一人の力は兵士何十人にも匹敵するのだ。それに我々の成功は何千もの同胞の命を救うことにもつながる……」

アルマンが自分に問いかけるように述べた。

「それだけ我々に課せられた責任は思いということですけどね……」

レオンがさりげなく述べる。その言葉は隊員達に重く押し掛かったがそれ以上に彼らに活力を与えたのだった。

『皆さん、マージ発進まであと五分です。各員準備に入られてください。健闘を祈ります。がんばって下さい!』

リリスの明るく透き通った声が機内に響き渡るのだった。

——ミルバーク森林地帯にて——

「よし、行くぞ」

アルマンの合図と共に皆が一斉に動き出した。今回の作戦は二チームに分かれて行われる。

アルマンチームには隊長のアルマン、ケン、レオンの三人、レイナチームには副隊長のレイナ、マック、ケネスで構成されている。

レイナチームは陽動を、アルマンチームは司令室の占拠を目指す。

ミルバーク・ジャングルは敵前線基地の西に存在する。アルフォード軍は東側から攻撃を行っているため、西側には敵の基地の警備も手薄になっている。

その東側に存在する森林地帯から敵前線基地に侵入し、敵前線基地の司令室を占領する。これによって敵軍の指揮系統を混乱させるという普通では考えられない大胆な作戦だ。

「理屈は分かったけど本当にこの作戦は成功するのかしら？」

レイナが半信、疑いの念でつぶやいた。

「大丈夫です。計算上では本作戦の成功率は八割を超えていますから」

レオンがさりげなく述べた。

「まあ、何とかありますよ。そのために我々がいるのですから」

「おっ、いいこと言うじゃねえか、ケン！」

ケンが述べると共にマックが同意の念で述べた。そうこうしているうちにあたりが明るくなってきた。森林地帯の出口が見えてきたのだ。

森を抜けると目の前に巨大な鉄壁が現れた。

「でかいな……」

「簡単には入らしてもらえそうにないわねえ」

アルマンとレイナはその巨大さに驚き呆れてしまっている。

「へっ、やりがいがありそうじゃねえか」

「さてと、やりますかね」

マックとケネスは返ってその巨大さに燃えているようだ。

「よしっ、がんばるぞ。リリス、オペレートのほうよろしく!」

突然の声掛けにリリスは動揺してしまった。

『は、はいつ、こちらこそ。些細ながらもオペレートさせていただ
きます!』

少し、間を置いたのだがその動揺は隠し切れなかった。アルマン
が深く息を吐いた。

「…やるか」

一同が眼で同意した。

「作戦開始ッ!」

アルマンの声が小さくも辺りに響き渡る。
開始の合図と共に森に潜む影達は飛び出した…。

――敵前線基地西ブロック格納庫付近――

「ふああ、つまらねえ…」

「本当だよな、こんな所を巡回するぐらいなら前線で戦いたいぜ」

小柄な兵士と長身の兵士が愚痴をこぼしながら格納庫周辺を巡回している。

彼らがこの担当になってから、いや、この前線基地が建設されてから一度としてこの西ブロックから侵入してきた輩はいない。よってこのブロックの警備を任せられるというのはこの基地内では大変不名誉なこととされていた。

「早く、交代の時間にならねえかなあ。くそつ、俺はこの格納庫をぐるぐる回るために軍に入ったわけじゃねえっての」

小柄な兵士はうんざりした顔で述べた。このブロックの警備を担当してまだ浅いのだろう。顔には不満の文字が浮かび上がっていた。

「ふつ、まあそう怒るなよ。これも大事な任務さ」

長身の兵士はなだめる様に述べた。その気の抜けた声からこのブロックを担当して長いのだろう。完全に気が抜けている様子だ。

「けつ、よく言っぜ。こんな所、警備したところで何になるってんだ」

小柄な兵士は更に愚痴をこぼした。

「あゝっ！ アルフォードの兵士がこの基地まで来ねえかなあ。そしたら俺も一肌脱いでやるっていうのによお」

小柄な兵士は自動小銃の標準を除きながら誰もいない正面に銃口を向けた。

「はは、何ありえねえ事をぼやいているんだか」

長身の兵士は小ばかりするように述べた。

「……………」

「おい、何いきなり黙り込んでんだよ。腹痛か？」

長身の兵士はいきなり小柄の兵士が黙り込むのでどうしたものかと思った。

「…いる」

「はあ？」

「数十メートル先に、アルフォードの兵士が一人突っ立ってやがる……………」

「はっ、何だ、新手的ジョークか？」

長身の兵士は意外な返事が返ってきたため思わず笑ってしまった。

「違うっ、ジョークじゃねえ！ 本当にアルフォードの兵士がいるんだよ。よく見る！」

そう言われるがままに長身の兵士は数十メートル先をのぞいた。

一瞬、長身の兵士は止まった。そして次の瞬間、即座に肩に掛けていた自動小銃を構えた。

そこには確かにいるはずのないアルフォードの兵士がいた。よく見ると女兵士のようにだ。こちらを向いて笑いながら手を振っている。

「な、何者なんだ、あいつは！？」

長身の兵士はあまりにも予想していなかったため、未だに現状を理解できていなかった。

「知るかつ、とにかく本部に連絡だ。基地内に敵兵士が侵入したってな！」

長身の兵士は小柄な兵士の言うとおりに本部に連絡しようと胸ポケットの無線を取った。

「本部、本部、こちら西ブロック警備兵W04。A-3にてアルフォード兵士を発見！ 至急応援をッ！ ……」

次の瞬間、長身の兵士は地面に倒れこんでしまった。

「! ? ツ」

長身の兵士が倒れるのを見て、すかさず小柄の兵士は相棒の方を振り向く。しかし、気づいたときには彼も同じく地に這いつくばっていた。

意識を失う間際、小柄な兵士は二人の男の姿を見た。

初任務 【弐】

——ディーベルク前線基地施設内——

「…うまく陽動してくれたみたいだな」

アルマンがささやくように述べた。

「我々も行動を開始しましょう！」

ケンが小声ながらも気合の入った声で述べる。

「情報局の情報ですと司令室はそこから北にあるエレベーターを乗って三階の北にあるそうです」

リリスが少し不安そうに述べた。

「ふむ、情報は現地調達するしかないな。よし、ではこの先の角まで行くぞ」

アルマンの合図と共に三人は影のごとく十数歩先の角へと移動する。

アルマンチームはレイナチームと別れた後、司令室のある前線基地施設内に侵入していた。

施設内の敵兵はかなりの多勢だったがレイナチームの陽動によって現在は常時の半分以下になっている。

「ここも出払っているみたいだな…」

それでもアルマン達は敵兵士がいなか厳重に警戒している。

「隊長、数歩先の部屋に向かってくれませんか？」

レオンがささやく様に述べた。

「何故だ？」

アルマンが尋ねる。

「…良い事を思いついたのですよ」

レオンは微笑みながら述べた。それは彼が何か策を思いついたという表れだった。

「…いいだろう。その顔はよほどの自信と見える。行くぞ」

アルマンチームは敵がいなか警戒しつつも目的の部屋の前に向かった。しかし、着いたのは良いものの肝心の部屋のドアにはロックが掛かっていた。

「おいおい、鍵が掛かっているじゃないか。これじゃ、中に入れないな」

アルマンは参ったなあという様子で述べた。

「任せてください隊長！ 自分の刀でこのドアを……」

ケンは刀に手を掛けようとしたがレオンに止められる。

「やめたほうがいいよ。敵兵に見つかりたくなければね…」

レオンはためいきを吐きながら述べた。

それから彼はバトルスーツの左腕の手首からひじに掛けて装着してある腕輪状の装置のボタンを押した。そして収納されてあるプラグを取り出しドアの横にあるカードリーダーにつないだ。

「それは何？ レオン」

ケンはレオンが自分にはない装備を持っていたので質問した。

「これは《ハグノーン》という僕が作った万能コンピュータだ。まあ、見ていて…」

そういうとレオンはパネルを開き、キーボードを叩き出した。

ガチャッ

数秒も経たない内にドアのロックは解除されてしまった。

「これはすごい。やるなレオン！」

ケンはその早業に感銘を受けた様子だ。

「別に…たいしたことじゃないよ」

レオンは何食わぬ顔でプラグを装置内に収納した。

部屋に侵入する。中には机やベッド、本棚などがある。どうやら

ここは個室らしい。ベッドの上には雑誌が開いたまま放り出されている。

レオンは何かを探している様子だった。そしてどうやらお目当てのものを発見したらしい。

「ん、それは……」

ケンがレオンの後ろからその様子を覗いている。どうやらレオンの探していたものは端末だったようだ。

「これを使って施設内のコンピュータに侵入します。この施設内を歩き回って司令室を探すよりよほど楽でしょう？　まあ、見ててください……」

そういうとレオンは左腕のキーボードを叩き出した。一分も経たないうちに施設内のマップを手に入れた。

「リリース、今から基地内のマップのデータを送る。そのデータを副隊長達に転送してくれ」

レオンはそういうとデータをリリースが乗るオルフィスへとマジを経由して転送する。

「敵兵に傍受される心配はないのか？」

アルマンが心配そうに述べた。

「心配はいりませんよ。この我々が使用している通信方法は元来の電波とは全く異なるものですから」

そう言い残すと彼は再び作業に入る。どうやらまだやることがあるらしい。数分後、レオンは端末からプラグを外した。そしてこちらを向いて微笑みながら一言述べた。

「隊長、これで我々は“透明人間”になれますよ」

——西ブロック格納庫屋根上——

「ありがとう、確かに受け取ったわ」

レイナが寝そべって銃を構えたまま暖かい声で述べる。

『いえ、わたしはただレオン隊員の指示に従っただけですから』

リリスが照れた口調で述べた。よほど役に立てたことがうれしいらしい。

『姐さん、準備のほう出来ましたがな。そちらのほうもオッケーでつか？』

ケネスの気の抜けた声が通信機を通して聞こえてくる。

「ええ、こちらも準備オッケーよ。あら、かわいいねずみさん達が走ってきているわ」

『それはまた駆除が大変なこと。と、では後ほど』

ケネスからの通信が切れる。レイナは深く深呼吸をした。

次の瞬間、重い銃声と共に一人の敵兵士が倒れた。どうやら脚を打ち抜かれたようだ。

敵兵士はどこから撃ってきたのか警戒している。が肉眼では狙撃主の姿は確認できない。

再び、レイナの狙撃銃、《ディパルサー》が火を噴いた。

「ぐあっ！」

「はうっ！」

敵兵士は次々に倒れていく。つがそれでも数に任せて着々とこちらに向かってきている。

「ケネス、そろそろお願いね」

「はいな」

レイナの合図と共にケネスが手元のスイッチを押す。

ドオオオオン！

巨大な爆発音が格納庫から北に数キロ離れた場所から響き渡る。

「ちい、侵入者が向こうにも！ 仕方がない、部隊を半分に分けるぞ」

そついつと敵部隊の半数は爆発音の鳴ったほうへと進路を変えた。

「ふふ、うまくいったわ。そちらのほうは頼んだわよ」

『了解つ、まあ、期待しておいてくださいな』

そつ言い残してケネスは通信を切る。次にレイナはマックに連絡を入れる。

『マック、前方の敵が見える？』

「ええ、ばつちり見えますぜっ！ うじゃうじゃいやがる。うゝん、暴れ甲斐があるぜ！」

マックは気合を入れて背中にかけてある機関銃を構える。その大きさは巨漢なマックが持つても大きく見える。

「隊長！前方に大柄な男が一人たたずんでいます」

「一人だとお！？ 我々をバカにしているのか。くそっ、蜂の巣にしてくれるわ！」

そついつと一斉に敵兵士たちは銃口をマックに向ける。つが次の瞬間彼らは鬼を目撃することになる。

「吼えろ、《バルスト》！」

ズガガガガガガッ！

マツクの雄たけびと共にバルストの口から何百という銃弾が敵兵士らを飲み込む。

「ぐあああ！」

次々と倒れていく敵兵士、彼らも必死に反撃するも目の前からやってくる銃弾の壁の前においては彼らの弾は砂粒にすぎなかった。

機関銃をぶっ放しながらマツクが吼える。その姿は正に闘鬼そのものであった。

敵の中には迂回して攻撃を仕掛けようとする者もいたが彼らは彼らでレイナの餌食となった。

激戦は長きに渡って続いた……。

——西ブロック格納庫北の倉庫付近——

「侵入者は見つかったか!？」

「はっ！ 残念ながら未だに発見されたとの通信は入ってきたおりません」

「くそつ、何処にいる？」

敵兵士たちは必死にケネスを探していた。

ドオオオン！

再び爆発音が響き渡る。今度は西側からだ。

「侵入者は向こうか！」

敵兵士らは急いで現場に向かう。だが彼らは気づいていなかった。

敵兵士が一人消え、一人増えたことを……。

爆発現場にたどり着いたもののやはり侵入者の影は見当たらない。

「くそ、我々をおちよくっているのか？ ええい、さっさと探さんか！」

敵兵士の隊長の怒りは頂点に達していた。部下の兵士らは八つ当たりされるのを恐れて必死に探している。が、やはり侵入者は見当たらない。

「やはり、侵入者は別の場所にいる。我々をかく乱しているのでは？」

これ以上の搜索は無駄だと判断し、副隊長が隊長に撤退を提案する。

「むう、止む終えんか」

隊長もさすがに諦めかけていた。つがその時…、

「侵入者、発見！ 侵入者、発見！」

大声で叫ぶ兵士の声が響き渡る。残りの兵士たちは急いで声の聞こえた方向へ向かう。

「はっ、ついに見つけたかあ！　今までおちよくられた分、晴らしてくれるわ！」

敵の隊長は待つてましたと言わんばかりに駆け出した。そしてついに声のした場所にたどり着いた。そこは　無数にある倉庫の一つだった。何故か扉が開いている。

「隊長、ここです！　この中に奴は潜んでいます！」

「よし、でかした。突撃っ！」

敵兵らは内部へ勢いよく突撃する。しかし、そこには人っ子一人存在しなかった。

「どういうことだ！？」

辺りを慎重に見渡す。しかし、どこにも人の気配がしない。彼らは警戒しながら奥へと入っていく。

「誰もいないではないか。いったい何処に侵入者がいるというのだ？」

「いますよ、確かに」

「だから、何処にいますと言っただ？」

「…ふう、ほんまに勘の鈍い方々やな、あ・ん・さ・ん・ら・は」

部下の兵士は呆れたように述べた。

「あ・ん・さ・ん・？」

隊長はいきなり部下の口調が変わったためキョトンとしている。

次の瞬間、その兵士は倉庫の入り口へと走り出した。突然のことに他の兵士たちも動揺して目をやるので精一杯だった。

入り口までたどり着き、その兵士は軍服を高らかと天に放り投げた。

「……あつ！」「……」

他の兵士たちはやっとその正体に気づいた。そうその兵士こそが彼らが探し求めた侵入者、ケネスその人だった。

「ほんまにあんさんらのまぬけっぷりには笑わせてもらいましたがな。おかげで大分時間を稼ぐことができました、おおきに♪」

敵兵士たちは怒りよりも驚きが強すぎて一瞬固まってしまった。が、隊長の合図と共に一斉にケネスのほうへ向かってきた。

「貴様つ、よくも我々をコケにしてくれたなあ！ ひねりつぶしてくれ！」

だがケネスは余裕の表情でニコニコしながら笑っていた。

そして右手のスイッチを押した。

ドオオン！ ガラガラグワシャーン！

爆発音と共に倉庫の天井が爆発。無数のガレキが落ちてきて倉庫の入り口を塞いでしまった。

「最後までおもしろいもん見せてもらてありがとな」では、さらば
「！」

そう言っただけケネスはその場を立ち去ったのだった。

「リリースちゃん、ほんまかいな。姐さん達が危ないって……」

『はい、徐々にではありますが押されつつあります』

通信を終えるとケネスはレイナたちの元へ一心に駆け出した……

……。

「……隊長、どうします？」

「どうするって……」

「俺たち、本当にアホですね……」

「やめろ、ますます落ち込む……」

彼らが救助されたのはそれから数時間後のことだった。彼らにとってその時間は一生のように感じられただろう……。

初任務【参】

——ディーベルク前線基地司令室——

「応答しろ、第一小隊。現状はどうなっている？」

『依然として侵入者と交戦中。こちらの負傷者が増える一方で中々前に進むことが出来ません』

司令室の軍人は基地内への侵入者への対応をしていた。兵士の話
を聞くとこの状況は良くないようだ。

「バカなっ！ 数十人の兵士がたった二人の輩に手こずっているだ
と、信じられん……」

あまりにもありえない状況に対応している軍人以外の者も啞然と
している。

「奴らはどうやってこの基地内に侵入してきたのでしょうか？ 普通
はリーダーに反応するはずです。なのにリーダーに引っかからずに
侵入するなんてありえません」

二十代に見える若い軍人が不思議そうに述べた。

「…だが事実だ。我々の眼をかくぐり進入した者達がいるのだ。
これが上層部に知れ渡ったら我々はただでは済まぬぞ」

三十代の目つきの鋭い男が重々しく述べた。身なりからしてどう

やら彼がここの司令官らしい。

「くそつ、ただでさえ前線が激戦で情報が混雑しているってのに…」

対応している兵士が愚痴をこぼす。どうやら前線で戦っている本隊も苦戦しているようだ。

「お前たち、何者だ。ぐわっ！」

司令室前の廊下が騒がしい。銃撃の音が響き渡る。

「どうやらまだねずみがいたようだな……」

そう言つと司令官は不適に笑った。

次の瞬間、司令室の扉が大きな音を立てて崩れ落ちた。そこには三人の戦士達が立っていた。

「よし、やっと司令室にたどり着いたぞ！」

「何で扉を斬ったんだい？ 普通に開けられたのに……」

ケンは爽快つといわんばかりの表情をしている。レオンは彼の行動にすかさずツツコミを入れている。

「ど、どうやって進入してきた。監視カメラに死角はないはずだぞ！？」

カメラを監視していた軍人は驚いた様子で述べた。彼は常にカメラに映る映像を見ていたが侵入者らしき者は一人も映っていなかつ

たからである。

「それは映るはずがないだろうね。何せ僕らは透明人間になったのだから」

レオンが微笑みながら述べた。

「なるほど貴様、監視カメラを乗っ取ったな」

司令官は冷静な口調で問いただした。

「ご名答。僕はこの建物の端末からメインコンピュータに侵入して監視カメラの映像を現在の映像ではなく録画された映像に切り替えたのさ」

レオンが自慢げに微笑んだ。

「さあ、命を落としたくなければ銃を捨て床に伏せろ」

アルマンが銃口を司令室の者たちに向けながら述べた。軍人たちは力が抜けたかのように銃を捨て床にひれ伏した。つがただ一人、イスに座ったまま動こうとしない者がいた。

「あんたもだ司令官殿、銃を捨て床に伏せるんだ」

アルマンが敵司令官に銃を向けた。

次の瞬間、その者は異様なスピードでアルマンに襲い掛かった。幸いにもアルマンはその攻撃をひらりと避ける。

「抵抗するきか、司令官殿？」

アルマンが余裕の表情で述べた。向こうの司令官は不意を突いた一撃と思っていたのか、避けられたことに動揺を隠せない様子だった。

「貴様…、何故あの状態からこうも余裕に避けられる？ 普通の人間ではありえんぞ！？」

確かに、アルマンの動きは人間離れしていた。

何故なら彼が回避したものが至近距離からの銃弾だったからである。

彼だけではない。ここにいる全ての者がアルマンの動きを見て驚いている。

「隊長、こんなにすごい人だったのか」

「バカな…、ありえない」

ケンやレオンもその動きに驚きを隠せない様子だ。

「ふむ、どうやら私の動きを見て驚いている様子だな。ではこういうええ納得してもらえるかな。あんたはギルガネスという一族の名を聞いたことはないか？」

アルマンが述べたギルガネスという単語を聞いて司令官は更に驚くと共に納得した様子だった。

「そうか、あのギルガネスか……人間離れした運動能力を持つと言われる超人一族の者か」

「その名を聞いてもまだ抵抗するつもりか？」

アルマンが勝ったといわんばかりに強気で述べる。つが返ってきた言葉は意外な言葉だった。

「ふふ、はははは！ 私がその名を聞いて怖気ずくとも思ったか！ ギルガネスの一族の者よ？ 残念ながら私は好戦家でね、その名を聞いて余計にやる気が湧いてきたのだよ。さあ、遠慮はいらん。掛かって来い！」

そのあまりに意外な返答にアルマンは思わずため息を吐いた。

「ギルガネスの名を知る者だからてつきり賢明な者と思ったのだね。どうやら単なるバカのようなだ。良いだろう、お前の相手になつてやるよ。ただし、こいつがな」

そういうとアルマンはポンツとケンの肩を叩いた。

「え！？ オレが戦って良いですか？」

あまりのことにケンはアルマンに再度確認を取る。だが、その答えは同じくイエスだった。それを聞いてケンは非常にうれしそうだった。

「私をバカにしているのか？ こんな屈辱は初めてだ。私の相手など、そのようなヒヨッコで十分ということか！」

敵の司令官は自分のプライドが傷つけられて頭に血が上っている様子だ。

「こいつがヒヨッコかどうかは戦ってから決める。こいつを倒せたら、その時はおれが戦ってやる。ただし、勝てたら話だが……」

その言葉を聞いてますます司令官の頭に血が上った。

「いいだろう、この小僧と戦ってやる。すぐに準備をしておけ、二秒で終わらせてやるからな！」

そういうと司令官は壁に掛かった大剣を取り、勢いよくケンの頭上に振りかざした。

「死ねええ、青二才がつ！」

部屋中に高らかな金属音が響き渡った……。

——西ブロック格納庫——

「まずいわねえ、徐々にはあるけど押されている」

レイナの額から汗が流れ落ちる。

「俺の方もそろそろ弾が切れそうでっさあ！」

マックも今の状況に焦りを感じている。

長きに渡った激戦も終わりを告げようとしていた。何十人という敵と対等にやりあってきた彼らだがやはり所詮は二人、次第に押さ

れて始め追い詰められている。退路は何処にも存在しない。彼らは少なくとも死を覚悟しようとしていた。

「くっ、もはやこれまでね…」

レイアが死を覚悟したその時、空から一つの鉄の塊が敵兵たちの目の前に転がり落ちた。

ボンツ、プシュ——ッ

敵兵たちは目の前に広がる煙幕によって辺りが見えなくなってしまった。中には煙をすってむせている者もいる。

『今です、その場からすぐ撤退してください！』

リリスから通信が入る。それを聞くな否やレイナとマツクは急いでその場から逃げ去った。ようやく煙幕も収まり出したとき、敵兵たちは辺りを見渡した。つがもはやそこに二人の姿は見当たらなかった。

「おい、見る！ あそこにもう一人侵入者がいるぞ」

格納庫の反対側に、なんとケネスが立ちずさんでいた。

「何！ そうか、この煙幕は奴の仕業か！」

一斉にケネスのほうに向かってくる敵兵たち、つが次の瞬間、彼らの視界は閃光に飲み込まれそして強烈な爆発音と共に音を消された。閃光弾である。

彼らが視力を回復した時、もはやそこに人影はなかった…。

——敵前線基地司令室——

部屋中に高らかな金属が響き渡る。何かが宙を舞った。そして数秒後、その物体は床に突き刺さった。

「バカなっ……！」

司令官は今自分が目のあたりにしている光景を何度も疑った。つが結果は同じだった。

彼の大剣は真つ二つに斬れたのだ、目の前にある細い片刃の刃によつて……。

「何だ、その剣は！？　　いったいどんな仕掛けがあるというのだ」

またもありえないことが起こったため司令官は混乱している。

「これは刀といってね、従来の両刃の剣と違い、叩き斬るのではなく、純粹に斬ることを目的とした代物だ。あんたはさつき力任せに大剣を振り下ろしただろ？　それは純粹に斬るとは言えない。叩き斬るという感じだ」

ケンの言動に重みが増す、司令官はうろたえていて動くことが出来ない。さらにケンは述べる。

「鋼より硬くないものは斬れるかもしれないがそれでは鋼を斬ることなんて出来やしない。だが刀は出来る、それは刀の刃が最もモノ

を斬る上で絶好の曲線を描いているからだ。刀の前においてそんな大剣は剣としての意味を成しはしない！」

もはや司令官は考えるということが出来なくなっていた。怒りや目の前で起こる常識離れのことによって頭が混乱してしまったからだ。目の前にいる小僧を倒す、司令官の頭にはもはやそのことしか存在しなかった。

「ぬおお、小僧！」

司令官は鬼の形相でケンに襲い掛かる。

ヒュッ！

風を斬る音と鋭い音が響き渡る。司令官の腹部は大きく開いた。司令官はもはや倒れるほかなかった。

彼は最期に己の目の前に立つ青年を見た。その姿はまるで魔物のようには思えた……。

初任務【四】

——敵前線基地へリポート——

「敬礼！」

アルマンの号令と共に一斉に隊員達は目の前に降り立った男に敬礼をする。

ヒッター司令官である。

「諸君、任務遂行ご苦労であつた！ 諸君らの活躍により敵前線部隊は撤退、我々はこの基地を手にすることが出来た。ありがとう！」

ヒッター司令官は満面の笑みを浮かべていた。

「それにしても姐さんの狙撃の腕はほんますごかつたですねえ」

ケネスがここぞとばかりにレイナを褒めちぎる。

「いえ、あなたの腕こそ大したものよ。たった一人で十数人の敵をかく乱して閉じ込めるなんて。それとマック、あなたも豪快だったわね。正に闘鬼のようだったわ」

レイナがお礼と言わんばかりにケネスとマックを賞賛する。

「レオンもすごかつたな、ああも簡単に敵のコンピュータに侵入するなんて正に神業だったよ！」

ケンがレオンの偉業を思い出し打ち明ける。

「僕のなんてケンや隊長の偉業に比べたら大したことないよ。隊長は人間離れた動きをするし、ケンは敵の司令官を倒しちゃうし…」

レオンが少し驚き呆れた様子で述べた。

「これで我々が出会ったわけが何となく分かったな。我々はそれぞれが特異な力を持っている。そしてその力を合わせることで不可能と思われることも可能にしてしまう。正に最強のチームだ」

アルマンが満足した様子で述べた。

「あの、本当にわたしのような凡人がこの部隊のオペレーターとして居て大丈夫なのでしょうか？」

リリスが不安そうに述べた。

「何言っているんだ、居て良いに決まってるじゃないか。今回の任務だってリリスは十分に役に立っていたよ。何せ、アルフォードのオペレーターじゃないか！」

ケンが笑顔で述べる。その声に嘘はないようだ。他の隊員達も同じ気持ちのようだ、皆、笑顔でリリスを見る。

「ケンの言うとおりだぞリリス君、君は確かに直接任務は遂行しないが彼らをサポートするという重大な仕事を受け持っている。例えば、現場にいらなくても君はれっきとした特戦のメンバーだ！」

ヒッター司令官が穏やかな口調で励ます。

リリスの顔にもはや不安な表情はなくなっていた……。

——アルフォード王国軍総本部——

「…ふう、何とか終わったな……」

深く息を吐きながらケンは倒れるようにベッドに横になった。アルフォード城内にあるここ総本部に特戦は拠点を置いている。そのため隊員達には特別に個室が用意されている。当然ケンにもその個室が用意されていた。

「しかし、リリスも言っていたけど俺もまだまだだなあ。今後、より一層過酷な任務が待っているというのに、今の腕では自分の命を守るだけで精一杯だろうなあ」

そうつぶやくとケンは壁にかかった刀を見る。

「そう…誓ったんだ……あの時……」

数秒の間、沈黙が続いた。つが、すぐにケンはベッドから立ち上がった。

「休んでなんていられないな、よし、特訓だ！」

そういつとケンは愛刀と共に部屋を飛び出すのだった。

「そう、誓ったんだ…もう二度と、あんな悲劇は起こさせないって……」

初任務 【四】（後書き）

第一部主な登場人物の紹介

くアルフォード王国く

―特殊戦略部隊―

ケン・シュナイダー：第一部の主人公：16歳：男性：紅色の短髪：
黒色の瞳：アルフォード王国の機動歩兵として前線でその自慢の剣
術を巧みに使って活躍していた。その腕が買われアルフォード国王
直属の部隊で特殊戦略部隊、通称『特戦』に配属される。彼が軍に
入隊したのには悲しい過去が関わっている。彼が使用する剣術は天
魔無双流と呼ばれるものでそのあまりに巨大な力のために神にも魔
にもなれると言われている。またその所持する剣もこの世界で流通
している両刃の剣ではなく、片刃の剣、刀である。情に熱い男でこ
の情こそが彼の長所でもあり短所でもある。

アルマン・ギルガネス：隊長：26歳：男性：黒色の中髪：茶色の
瞳：人柄がよく誰にでも好かれる人物。任務のために冷酷になろう
と努力しているがいざとなると人命を優先してしまう。ギルガネス
家の人間で超人的な運動能力を持つ。その運動能力は発射された弾
丸を簡単に避けられるほど。刃物から銃までありとあらゆる武器
を使いこなすエキスパートでもある。

レイナ・フランク：副隊長：25歳：女性：紫色の長髪：緑色の瞳：
隊の中では頼れるお姐さんの存在。狙撃の名手でその集中力は三日

間、同じ射撃体勢でいられるらしい。

マック・エイガー：ムードメーカー：20歳：男性：茶色の短髪：青色の瞳。大柄で長身。細かいことは気にしない豪快な性格。バルカン砲などの重火器を使用して戦う。

レオン・マッケイン：天才：17歳：男性：水色の中髪：銀色の瞳：IQ200を超える超天才。言葉数が少なく、無愛想。その頭と魔法で数々の戦いを勝利へと導いてきた。また、ハッキングを得意とし、セキュリティ解除や、情報の奪取なども行う。

ケネス・フロイド：曲者：20歳：男性：黄土色の中髪：黒色の瞳：妙な言葉遣いをするお調子者だが任務の時には隠れた冷酷さを見せることがある。爆弾に関しては確かな腕を持つ。特戦の曲者的存在。

リリス・クラフト：オペレーター：16歳：女性：朱色の中髪：水色の瞳：性格は非常に明るく、特戦のマスコットの存在。彼女の存在が隊員の戦場で受けた心の傷を癒しているのは疑いようがないだろう。オペレーターとしての腕も確かなものを持っている。

ノリス・ヒッター：司令官：56歳：男性：灰色の短髪：茶色の瞳：若かりし頃は【戦場の稲妻】という二つ名で恐れられていた。今でもそのたくましい体つきは衰えておらず、また歳を取ったことでより一層その風格は増している。人としても戦士としても隊員達に影響を与える人物。ちなみに【戦場の稲妻】という二つ名は彼が使用

するガントレットが電撃を流すことが由来。

―その他の人物―

アルフォードⅤ世：国王：45歳：男性：黒色の中髪：黒色の瞳：
現、アルフォード王国の最高権力者として王座に座る者。国は民あ
つてのものと考えており、常に民の事を考えている。この戦争を終
わらすために特戦を設立することを決意する。

鬼【壱】

——ガルフォント森林地帯——

ここはディーベルクとの国境に面する森林地帯。この数キロ西へ向かい森を抜けるとそこにはアルフォードの前線基地がたたずんでいる。

今日はお天道様の機嫌が悪いらしい、雷が鳴り響き、大粒の雨が大地に降りそそぎ小さな川が幾つも出来る。足場は安定しない。

そんな悪天候な中、森林地帯を進む者たちがいる。武装した兵士数十人、荷を積んだ大型装甲車五、六台、彼らはアルフォードの補給部隊である。戦いで消費する物資を届けようとしている。特に前線ともなればその消費の早さは半端ではない。通常の基地への補給が月一でよいのにも関わらず、前線ではその四分の一に当たる週一で補給しなければならない。

「こちらT - 01、T - 01。周辺に不審なものなし。そちらはどうだ02、03？」

前方車両の護衛する小隊の隊長が中央と後方の護衛隊長へ定期交信をする。彼らの任務は敵および盗賊などから補給物資を守り無事、基地へ補給物資を届けるというものだ。この説明だけを聞けば非常に重大な任務のように思えるが実際のところは非常に楽なものである。敵とは遭遇することはまずなく、ただ補給物資についていくだけだからである。

ところが彼らの様子は違った。常に銃を構え、獲物を探す獣のごとく鋭い目つきで周りを警戒している。よく見ると補給物資の護衛にしては兵士の数が多い。辺りには緊迫した空気が漂っていた。

「01、02、聞こえるか。こちら03！敵と交戦中、気をつける！」

突如、後方車両を護衛していた隊長から通信が入る。兵士たちを覆う緊迫感はさらに強くなる。03の通信から間もなくして01、02も敵との交戦に突入した。豪雨のなか、ものともせず響き渡る銃撃音、あたり一面に漂う硝煙、両者の攻防は激しさを増す。しかし、彼らの攻防はそう長くは続かなかった。

アルフォードの兵士たちの前に突如として二匹の鬼が現れた。一瞬の出来事だった。一匹の鬼は巨大で次々に兵士をなぎ倒していった、もう一匹の鬼はそれほど大きくはないが兵士たちが認識する前に彼らを死へと追いやった。

戦闘を終えると彼らは補給物資が載せてある大型装甲車に乗ると物資ごと奪い去っていった。

森には無数の薬莢と屍が転がり落ちていた……。

——アルフォード王国軍総本部——

「ヒッター、ただいま参上いたしました！」

ヒッター司令の太く、鋭い声が玉座の間に響きわたる。彼は国王に緊急の用があると呼び出されたのだ。

特戦はその特殊な任務のために軍部とは完全に独立しており、国王直属の部隊とされている。よって特戦の任務は軍部を通さず、国王直々に言い渡されるのである。

「うむ、いつ聞いてもお主の声は良く響くのお。さてヒッターよ、お主を呼んだのは他でもない、特戦への任務を伝えるためだ。ところでヒッターよ、最近、我が軍の前線基地へ向かった補給部隊が次々に謎の部隊によって襲撃されていることは知っておるな？」

「はっ、存じております。兵士たちの間で噂になっております」

「うむ、実は襲撃され始めてからというものの一回も前線に補給が行き渡っておらぬのだ。まだ、形としては現れてはおらぬがこのままいけば物資が不足し前線部隊は後退せざるおえなくなる。そうなれば、せつかくの特戦の成果も無駄になってしまう。そこでだヒッターよ、お主ら特戦にその補給部隊の護衛を行ってもらいたい」

ヒッターは一瞬、自分の耳を疑った。自分らは軍の中でも選りすぐりを集めて結成された部隊である。敵基地への強襲や、情報の奪取などなら分かるが補給部隊の護衛など一般の兵士にも出来ることである。だが、ヒッターは国王がこのような任務を命じたのには何か裏があると察した。

国王は側近の者に命じ、とある映像をスクリーンに映し出させた。

「ヒッターよ、お主はこのマークに見覚えはないか？」

それは補給部隊が襲われた場所に書き残されていたものだった。そこには一本角の鬼の横顔とその後ろに二本の交差した両刃の斧が描かれていた。よく見ると槍のようにも見える。

「うっ、このマークは、……！」

ヒッターはそのマークに見覚えがあった。いや、ヒッターに限ら

ずアルフォードの全ての兵士がそのマークに見覚えがあるはずである。

「もし、このマークが本物だとするのなら、いくら兵士を多く導入したところでどうこうなるものではあるまい。やってくれるな？」

「御意ッ！」

ヒッターはそういうと再度頭を下げ、玉座の間から立ち去った。その表情は以前にまして厳しかった。しかし、その眼はやる気の炎で燃え盛っていた。

——アルフォード王国軍本部第七訓練所——

風が澄んでいる。空には雲一つなく、真っ赤な太陽が激しく燃え盛っている。

ここは軍本部の敷地内に存在するとある訓練所。本部には合計十二の訓練施設が存在し、それぞれ異なった訓練のために存在する。

第一から第四までの訓練所は射撃を行う場所で第一と第二のみ屋外で主に模擬戦を、第三、第四は屋内施設で人に模した的を使用した射撃を行う。第五から第八は格闘訓練を行う場所で第五、第六が屋外訓練所、第七、第八が屋内といった感じだ。屋内には様々な訓練器具が設置されているが屋外の施設は何もなく、主に組み手などを行う。第九、第十は機動戦車の訓練に使用する。最後に残った第十一、第十二は特殊訓練施設で地雷などのトラップ処理訓練を行う場所だ。

そして今ケンがいる場所はその中の一つ、第七訓練所だ。どうやらマックと何やら行っている。

「よしっ、いくぞっ！」

そういつとマックはボーリング球程の大きさの（ちなみに彼らの世界にボーリングは存在しない）鉄球をケン目掛けて思いっきり投げた。鉄球はケン目掛けて猛スピードで迫る。ケンは意識を集中し、腰に差した刀に手を掛ける。

スパ——ンッ！！

するどい金属音が辺りに響き渡ると同時に鉄球はきれいに二つに割れた。ケンは抜刀を終えていた。その時間は一秒に満たなかった。

「はあ、ほんとにやりやがった。おめえ、すごいなあ！」

鉄球を投げたマックは驚きというよりそのケンの神技に感心している。マックは鉄球を全力で投げたがその鉄球をケンが斬り捨てることに關しては半信半疑だったからだ。ケンは深く息を吐くと笑顔でマックを見た。その額からは一滴も汗は流れていない。

「いやあ、たいしたことじゃないよ。こんなことは長年刀を振り回してきたら誰でもできることだよ」

ケンは当たり前のように述べたのでマックにはイヤミに聞こえた。彼はこの訓練にかれこれ二時間つき合わされている。最初はゴムボールから始まったのだが徐々に球の硬さが増し、最終的には鉄球にまで及んでしまっていた。

「たく、このガキが。人が誉めたら調子に乗りやがって、よおし、こうなりや次はこいつでいってやるっ！」

そういうとマックは壁に掛けていた愛用のバルカンを持ち上げ、ケンに銃口を向けた。ケンは少し驚いた様子でマックに弁解していた。そんな時だった。アルマンが訓練所にやってきた。

「何をやっているんだお前ら？」

今までの経緯を知らないアルマンにとってその風景は異様だった。

「おお、隊長。い、いやあ、何でもないでさあ。ちよいとこいつのこのでしやばった口を黙らせようとしただけでさあ」

マックがいきなりの訪問者に必死で誤解を解こうとしている。ケンは何も言おうとはしないがアルマンのほうを向いて苦笑して見せた。

「まあ、いい。マック、ケン、司令が呼びだ。どうやら新しい任務の説明を行うようだ。ついて来い」

新しい任務という単語を聞いて二人はすぐに片付けを始めた。それもそのはずだろう。彼らは初任務から今日に至るまで丸二週間任務がなかったのだ。おかげでケンは毎日訓練所に来ては鍛錬を行い、マックは退屈で仕方なくケンの特訓に付き合っていたのだ。

（やったっ！ ついにこの退屈な時間ともおさらばだ。）

二人は片付けを終えると急かしながらアルマンと共にオルフィスへと向かった。

——特殊戦略艦オルフィス・会議室——

アルマン一同が会議室の扉を開くと既に残りのメンバーは席に付いていた。

この会議室はオルフィス艦内に存在する。当然、軍本部にも特戦の会議室は存在するが会議終了後に即作戦に移れることや、設備環境の良さも踏まえてこちらの会議室を使用している。会議室は人が二十人ほど入れるくらいの部屋で中央にはホログラムディスプレイが取り付けられたテーブルが設置されている。

アルマンは部屋に入ると辺りを見渡した。入り口から向かって右側の手前にレオンが座っている、少年は相変わらずあの古ぼけた本を読んでいる。その奥でケネスが笑顔でこちらを向いている。（そっういえばケネスはいつも笑っているな…あいつあの顔が普通なのか？）ケネスの反対側にはレイナが座っており、こちらと目が合うとウィンクを返した。

ケンとマツクはレイナ側の席へと付き、アルマンはレイナと向き合うような形で座った。ケン達が席に付いてから間もなくしてヒッターとリリスが現れた。隊員達は一斉に立ち、敬礼した。ヒッターとリリスも敬礼で返す。ヒッターのその物腰には年老いても尚、武人の風格が感じられた。彼は一番奥の席に付くのを見計らい隊員達も席に付く。リリスはレイナとケンの間の席に座った。

「諸君らに集まってもらったのは他でもない。特戦に新たな任務が言い渡された。今回、諸君らには前線基地に向かう補給部隊の護衛

に当たってもらう」

ケン達はその言葉を聞くや、自分の耳を疑った。自分達は軍内の選りすぐりが集まった特殊部隊である。それなのに今回の任務は敵基地に侵入するでもなく、前線で戦うわけでもない、補給部隊の護衛というリスクの低い任務である。

すかさず声を上げたのはマックだった。

「司令、それはないでさあ。俺たちは特殊部隊だぜ！？ どうしてそんな任務を俺達が請け負わなきゃならんのよ？」

その声が続いて他の隊員達もヒッターに納得のいく返答を求めた、レオンは相変わらず無言だったが……。事の訳を既に知らされているリリスは皆の反応にやっぱりという表情だった。

「まあ、そう慌てるな。実は最近、前線基地に向かう補給部隊が次々に謎の部隊に襲撃にあい、尽く全滅しておるのだ。いくら護衛を増やしても結果は同じだった。そこで仕方なく、我々がこの任務を負かされるようになったわけだ」

ヒッターの発言を聞いてまたマックが口を開いた。

「それならわざわざ地上からでなく輸送機を使って空から運ばないじゃねえんすか？」

マックは何故こんな簡単なことが浮かばないのかと不思議に思った。

「ガルフォント森林地帯といえば神獣の管轄内だよ？ 空なんか飛んでいたら一瞬にして落されるよ……」

レオンがさらりとマツクの意見をつぶした。すかさず、ケネスが笑いながら意見を付け足す。

「こりゃあ、一本取られたなあ！ まあ、あんさんにしては上出来かな」

マツクはケネスの言葉に腹を立たせて顔を赤らませながらも反論の言葉が出てこなかったため、わざとらしく音を立てて座った。

「うるせえなあ、こつちとしてはこれが精一杯なんだよ！」

強気な発言をするマツクだったがその顔は赤い。そのやりとりには皆は笑った。

「落ち着けマツク。お前もこのマークを見れば今回の作戦に乗る気になるだろう」

ヒッターはそういうとリリースにホログラムディスプレイを操作するよう促せた。リリースは手元のパネルを操作する。すると中央に一つの写真が映し出された。それは玉座の間で国王がヒッターに見せたものと同じものだった。

「……！？ッ」「」

その写真に映し出された鬼のマークを見たとき、彼らは驚きのあまり何も言えなかった。しばらくの間、沈黙が続く。

「これは…【ツイン・バルベルト】の紋章……！」

沈黙を破ったのはアルマンだった。彼はそのマークを見た途端、この任務が前回に増して難しいものと察した。

「どうしてディーベルクの猛者達がこんなことを？」

レイナは今回のターゲットの大きさに驚きを感じると共に、何故彼らほどの者がこのようなことを行っているのか疑問に思った。マツクは先ほどまで存在した強気が消えうせ、黙り込んでしまった。

ケンもこの任務が簡単ではないと感じていたがレオンやリリス同様、他のメンバーほど驚いてはいなかった。それもそのはずだろう、彼らはこの二人の鬼のことを話でしか聞いたことがないのだから。

「これで納得がいったことと思う。今回の任務は単なる護衛任務ではない。彼らツイン・バルベルトを相手にしなければならぬ。何故彼らのような猛将がこのような襲撃を行っているのかなど、引つかかる点もあるが今回の任務、一筋縄にはいかんぞ……」

ヒッターは重々しく隊員達に述べた。そしてリリスに説明を進めるように言った。

「今までの襲撃を考慮しますと、襲撃ポイントはガルフオント森林地帯の中心部付近に特定されます。襲撃部隊の規模は一個中隊ほどと考えられ、多く見ても四十ほどと思われます。ツイン・バルベルト以外の兵士らは送られた映像から推測して特殊訓練を受けた兵士ではなく、ごく一般の兵士と思われます。今回の任務はあくまでも補給物資の護衛です。よって敵との交戦は深入りせず、輸送車の護衛に重点を置いてください」

リリスが説明を一通り終えたのを確認すると続けざまに口を開いた。

「さて問題のツイン・バルベルトへの対策だが彼らは常に後方から現れている。よって最後尾の護衛には白兵戦が得意なアルマン、ケンを配置する。先頭車両の護衛はケネス、レオンが、レイナ、マックは第中間車両の護衛を任せる。襲撃されしだい、アルマン、ケンはツイン・バルベルトを食い止め、他のメンバーは残りの敵兵士らを輸送車に近寄らせるな」

そういい終わるとヒッターは一呼吸置き、アルマン、ケンを見て再度口を開いた。

「今回の任務で鍵を握るのはアルマン、ケン、お前ら二人だ。彼らの強さは超人の域に達している。だがお前らもまた超人だ。つらいかもしれんが頼んだぞ。特にアルマン、お前の貴重な経験はかなり頼りになる。開戦当初、前線で我らが同胞の兵士たちを次々に葬り去り鬼神と恐れられているやつらに挑み、唯一生還したのはお前以外にいない。頼むぞ、アルマン！」

ヒッターはアルマンに念を押すと大きく息を吐いた。そして再びリスにバトンを渡し作戦の詳細を説明させた。隊員達はただ黙々と説明に耳を傾けた。ただ一人、アルマンを除いて……。

鬼【貳】

——オルフィス・廊下にて——

ケンはバトル・スーツを装着し終わるとすぐに格納庫へと向かった。

格納庫にいくまでの廊下でケンは考え事を始めた。今回の敵、ツイン・バルベルトについてのことだ。

ケンはその名を聞いたことはあるが彼らを実際に見たことはない。開戦後に軍に志願したケンは最初の二ヶ月間、軍事訓練を受けていたため前線にはいなかった。ツイン・バルベルトはその開戦から二ヶ月間の最も両者の攻防が激しかった時に名を上げた者たちだ。後にこの二ヶ月間の激戦は『英雄誕生の二ヶ月』と称されるようになる。このように呼ばれるようになったのもこの戦いが双方とも多くの英雄を生み出したからに他ならない。

ツイン・バルベルトとは《バルベルト》と呼ばれる、ハルベルト（ハルバートとも呼ばれるこの武器は斧と槍を合わせたような武器）の斧の部分が片刃ではなく両刃である武器を使用する二人組みの通称である。筋肉質の大男で青色のバトルスーツを覆った方は青鬼、大男ほどではないが長身ですらとした体形の赤色のバトルスーツを着こなす男の方は赤鬼と呼ばれている。彼らはその巧みな斧さばきで幾つもの死体の山を築き上げてきた。その実力はディーベルクの英雄たちの中でも上位にあたる。

一方でアルマン隊長もこの戦いでアルフォードの英雄になった男だ。その戦いぶりは彼が【アルフォードの戦神】と敵から恐れられることから分かるように超人の域に達していた。現に彼は赤鬼と戦い、生き残った唯一の者である。当時、その場に居合わせた者の話によると両者の戦いは他の兵士らが近寄れないほど激しい戦いだった。

たらしい……。

（しかし、それほどの実力者とは、今回の任務、自分の腕を磨く良いチャンスかもしれない）

そのようにのん気なことを考えているうちに格納庫へとやってきた。

—— オルフィス・格納庫 ——

ここにはマージ以外にも様々なものが存在する。最新鋭の機動戦車が四機、高機動戦闘機が二機配備されている。特戦が様々な任務に当たることを考えてのことであろうが果たして彼らが使用される時は本当に来るのだろうかと内心、ケンは思った。特に格納庫の端っこに置いてある巨大な大砲はいつたい何に使うのだろうかと思議に思っている。（後々この大砲が重宝視されるのだが当時のケンには予想できなかったことであろう……）

今回搭乗する装甲車を見てみると既に先客がいるようだ。車内には入らず外で待機している。近づいてみるとそれがアルマンであることが分かった。

「隊長、オレより先に来られていたんですか？ さすがですね！」

声を掛けられたアルマンは一瞬驚いた様子だった。何か考え事をしていたようだ……

「隊長、今回オレたちが戦うツイン・バルベルトについて教えてほ

しいのですが……」

「ん、ああ、そうだな。まず奴らはバルベルトという特殊な武器を使う。このバルベルトはリーチが長くその上、一撃一撃が重い。その分、振りが大きくなってしまうので隙が生じやすいのだがやつらは全く隙を見せることはない。今回お前には青鬼のほうを担当してもらおう。やつのパワーは尋常ではないが避ければどうということもない。お前の腕なら互角に渡り合えるはずだ。とにかくやつらを護送車から放すのを優先しろ」

一通り説明を終えるとケンはアルマンに以前赤鬼と戦ったことについて尋ねた。彼はその時のことをどうしても本人に聞いてみたかったのだ。

「やつらは正に前線でアルフォードの兵士たちをことごとく葬っていたよ。その姿は正に鬼と呼ばれるに相応しい姿だった。特に赤鬼の腕は青鬼とは比べ物にならない。やつは自分の身長と同じほどの長いバルベルトを木の棒でも振り回すかのように軽々と扱っていた。俺はやつと激しく撃ちあつた。その時はあの激戦の中にもかかわらずとても静かでな、自分の鼓動がはっきり聞こえたのをよく覚えてる。まあ、結局2時間かけてもやつを倒せなかったがな……」

そういい終わるとアルマンは一息つき、再び口を開いて一言述べた。

「……だが今度は必ずやつスの息の根を止めてやる。それがおれの宿命だからな……」

ケンはその意味深な発言が気になったがちょうど他のメンバーも格納庫にやってきたのでそれ以上尋ねるのをやめた。いや、例えばメ

ンバーが来なくともケンは何かができなかつただろうと思った。その時のアルマンは何か重いものでも背負っているかのような表情をしていた。アルマンと赤鬼には何か特別な関係がある、ケンは直感的にそう感じた。

——ベラムート補給基地——

「ではよろしく願いします」

そういうと補給基地の長官は特戦の隊員らに敬礼をした。彼らが護衛する輸送車は全部で二十車両に及ぶ。これは今まで前線に物資を送れなかった分も運ぶためである。それだけ前線の物資不足は深刻であることを意味している。

「この補給物資、特戦の名において必ずや前線で戦う同胞たちの下へ届けてみせます」

特戦もそのことを十分に承知している。彼らは装甲車に乗ると自分たちに敬礼する補給基地の兵士らに見送られながら闇がどこまでも続く森へと向かった。辺りの雲行きは怪しくなり出していた……。

——ガルフォント森林地帯——

森林地帯の入り口が見え出すとケンたちは装甲車から降りてそれぞれの担当車両についた。レイナだけは装甲車からは降りず天上にあるハッチを開け上半身だけを外に出した。再び補給部隊が進みだす。

森に入るとあたりは一瞬にして闇へと変わった。この森ではほとんど光が入ってこない。それは十メートル以上もある木々がさえぎっているに他ならない。

この森の木々のほとんどはどれも数百年は生きている。それはこの森の木々を切ることが出来ないことにある。それはこの森が神獣の居住地だからである。

彼ら神獣はるか昔からこの世界にいて言われている。彼らは他の獣たちとは違い、人間以上の知能と力を持ち合わせている。彼らは常に自分の住む領域に入ってくる者を監視しているらしく、もし、その自然を壊そうというものなら侵入者に牙を向くらしい。それゆえ切るにも切れないのである。森の中を進みだしてからしばらくして上空に雲が集まりだし大粒の雨が降ってきた。おかげで辺りの視界は更に狭くなった。

「何やこの雨は？ お天道様はわいらを嫌つとるんかいな？」

ケネスがこの最悪の状況をぼやいている。しかし、その表情は陰しくなく、むしろこの最悪の状況を楽しんでいるかのようだ。

「はい、そこ。ぼやいていないで警戒する。敵が襲ってきてても知らないからね……」

そう言うレオンは再び辺りの木々とリンクして敵の気配を探知している。これは彼が魔術師ならではの芸当だ。そんなレオンとは対称的にケネスは全く敵を探す気など毛頭ない様子だ。しかし、決して彼が気を抜いているわけではないことは百も承知だ。それ故レ

オンはそれ以上何も言わないのだ。雨は次第に激しさを増していった。

「雨が降ってきたわね、やつらが襲ってきたもおかしくないわね。マツク、気を引き締めなさい」

レイナは辺りの空気が変わったことに気づき、マツクに更に警戒するよう促した。レイナも愛銃のスコープ越しに辺りを見渡す。今回視界が悪くなることを承知していたレイナはスコープを通常のものからサーモスコープに取り替えていた。おかげで大分視界は良好だ。

「了解でさあ姐さん！　しかし、ひでえ雨だなこりゃ。どうしても降りますかね？」

マツクはレイナに問いかけつつも辺りに変化がないか気配を探っている。機関銃はいつでも撃てるように構えた状態にしている。さすがのマツクも単なる筋肉バカではないことが伺える。

「言い伝えによればこの雨はここに住まう神獣が降らせているらしいわよ」

レイナもレイナで狙撃体制を崩さずに返答する。彼女には三日もの間、狙撃体制を維持し続けたという記録がある。彼女にとって微動だにせず同じ体制でいることなど容易いことなのだ。

「ああ、神獣の野郎、見つけたらぶっ殺してやる！」

「やめときなさい、返り討ちにされるわよ」

そんなやり取りを装甲車を運転しながら聞いていた補給部隊の兵士はレイナ達の余裕っぷりに言葉が出なかった。

（今回の相手はその名を聞いただけでも逃げなくなるあのディーベルクの鬼たちだぞ！？　それなのにこいつらときたら先ほどから何食わぬ顔で会話をしている始末、こいつらの神経どうかしているんじゃないのか？）

そう心の中で思いつつも結局はこの者たちに守ってもらうしかないことを思い出し、兵士はただただハンドルを握るしかなかった。

「そろそろ襲撃があってもおかしくないですね」

ケンはそういうと常に刀が抜けるよう柄に手を当てた。そして辺りを見渡し敵の気配を探っている。

一方のアルマンは先ほどからただ黙っている。しかし、その全身からは強い闘争心を感じる。その姿は正にこれから獲物を狙おうとする獣のようだ。やはりいつものアルマンではなかった。

ドドドドッ！　パ——ンッ！

前方から銃撃音が聞こえた。音からしてどうやらマックたちが交戦を始めたようだ。

『みなさん、聞こえますか？　レイナ班が敵の襲撃を受けました。その数は約十四、報告の人数は三十以上なので他にもどこかに潜伏しているものと思われます。他の班は十分に周りに警戒してください。もう一度確認しますがこれはあくまで護衛任務です。敵の殲滅より輸送車の安全を優先してください！』

通信機から甲高い声が聞こえてくる。前方の銃撃音は更に激しさを増す。ケンは一瞬すぐにでも援護に向かいたかったがすぐに任務を思い出し、その気持ちを堪えた。

次の瞬間、後方からすさまじい殺気を感じた。すかさず後方に振り向く二人。雨のカーテンによって彼らの姿を捉えることはできない。しかし、殺気は先ほどよりも強く感じる。すると遠方からぼんやりとだが二人の人影を確認できた。その影はどんどん近づいてくる。アルマンは愛用の突撃銃ジークの銃口をその影に合わせる。彼の殺気は先ほどのものより更に強くなっている。ケンもすかさず抜刀し、刀を正面に構える。影は更に近づきその輪郭もはっきりと見えてきた。その形は紛れもなく鬼だった。

——レイナ班——

パ——ン！

一発の銃声が闇の森に響き渡る。森の奥で何かが倒れる音がした。同時にその音がした方向から複数の影が現れた。

どうやら例の襲撃部隊の兵士のような。全員深緑の迷彩が入ったバトルスーツを着用している。手にはハルベルトを構えている。ヘルメットを被っているためその表情はよく見えない。

「ああ、ついにでやがったな小鬼どもめッ！」

マックは敵を確認すると同時にバルストから銃弾のシャワーを放った。すかさず敵も木々を盾に身を隠したが何人かは隠れる前に銃弾の餌食となった。

「ちい、たったの四人かよ!? 戦車の装甲でも貫く銃弾だってんのになんて硬ええ木だッ!」

さすがは何百年も生きてきた木々である。その厚みは相当なものだ。マツクはこの木々は敵にとって格好の防壁になることを察した。

「リリース、聞こえる? こちらレイナ班。敵襲撃部隊と遭遇。その数ざっと十四。報告の人数より少ないわ。まだどこかに潜んでいると見ていいわ。他の班に十分注意するよう警告しておいて」

通信を終えると再び敵との交戦に集中しようと銃を構える。前方から銃声! とっさに体を引っ込める。どうやら遠方にも敵はいるようだ。銃音からして敵は七、八人。使用している銃はおそらくデイーベルク軍正式突撃銃KS-17(通称「ヴァライム」)をベースにカスタムしたものだろう。

レイナは深く息を吐くと再びハッチから顔を出した。そしてなりふり構わず機関銃をぶっ放しているマツクに注意を促した。

「マツク、木々に銃弾を当ててはだめよ。さっき言ったこともう忘れたの?」

そう言っている間にレイナは遠方の敵兵二人の頭に銃弾を放った。すかさず車内に体を隠す。そして再び体を出すとまた一人屍へと変えた。

「ちっ、こいつじゃ木々に当てないようにするなんて無茶な話だぜ。仕方がねえ、久々にこいつを使うか」

突然、マックは機関銃を前方の敵兵に向かって投げつけた。敵兵はあまりに突然なことで避けることが出来ず機関銃の下敷きとなった。

マックはその間に背中に手を回すと三十センチほどの鉄製の棒を手にとった。するとその鉄の棒は一瞬にしてマックの身長ほどの長さになり、その先端から巨大な刃が顔を出した。それは正しく薙刀だった。刃は通常のもの二倍近くもある。名を《デュラード》という。

「ぬおりやあああッ！」

マックは薪を割るがごとくデュラードを縦に振ると敵兵を一刀両断した。続いて水平に力任せに振ると敵兵三人の首を同時に吹っ飛ばした。その勇ましさに敵兵は二、三步後退した。

レイナはその光景を目の当たりして近隣の敵は彼に任せられると判断し、遠方の敵に照準を合わせた。続けざまに三回銃声が鳴り響く。彼女のスコープ越しの視界には新たに三つの屍が出来上がった。いた。

鬼【参】

——アルマン班——

二匹の鬼はケンたちから四、五メートルほど離れたところで足を止めた。情報の通り彼らは赤と青のバトルスーツに身を覆っていた。手には二メートルはあると思われるバルベルトを持っている。残念ながらその表情はヘルメットに隠れて見えない。ヘルメットの額部分から二本の角が生えていた。なるほど、それで鬼というわけか。ケンは勝手に納得するとすぐさま神経を集中した。双方とも動こうとせずひと時の沈黙が続いた。

「ついに本命が現れたか。待ちくたびれたぞ、アルマン・・・」

最初に沈黙を破ったのは赤鬼だった。彼はそういうと二、三步前に進んだ。口調は穏やかな感じがしたがその見えない表情からはとてつもない殺気を感じる。ケンは目をそらせば確実に殺られると思いい、じつと赤鬼たちをにらんでいた。アルマンは一瞬間を置くと赤鬼に質問を返した。

「どうしてお前らのような者が補給物資の強奪などをしているのか、その訳を教えてもらおうか・・・」

アルマンは依然として赤鬼から目を離さない。殺気は更に増している。あまりの殺気の強さに一瞬ケンは潰されそうになった。

「ふっ、いいだろう。冥土の土産に教えてやる。我々はお前たち特戦の有無を調べていたのだ」

「我々の有無だと？」

アルマンはその以外な答えに驚かされた。彼らが行っていたことは補給物資の強奪である。これがいったい自分たちの有無にどう関係があるというのだろうか？とアルマンは思った。

「以前、我々の前線基地が占拠されたこととある噂が流れた。前線基地はたった数人の超人部隊によって占拠された、とな。その噂を我々がディーベルク？世が興味を抱かれ、その真偽を調べよと我々に命ぜられたのだ」

「それがいったい、今回の襲撃事件とどういう関係があるというのだ？」

アルマンの放ったその声は冷静であったが彼の闘争心は既に抑えられないところまで来ていた。再び赤鬼が口を開く。

「簡単なことだ。通常の兵士が補給物資を襲撃しても普通は護衛を強化するだけでよい。しかし、相手が我々であると分かればお前たちの対応も違ってくる。何せ、前線で何千ものアルフォードの兵士らを葬り去ってきた私たちだからな。いくら兵士を増やしたところで対応できるわけがない。考えられる対応策は一つ、お前たち特戦を送りこむことだ」

「では我々はまんまとお前たちの策にはまっただというわけか……」

アルマンが軽く息を吐き捨てた。何か臭うと思えば…なるほどそういうことか。先ほどまで彼の心に引っ掛かっていたものはもう無くなっていた。

「聞きたいことはそれだけか？」

「ああ……」

ひと時の沈黙が流れる。そして双方同時に武器を構える。突然、青鬼が天に向かって吼えた。その声にケンは一瞬怯んだ。赤鬼が一歩前に出る。そしてアルマンに向かって高々と叫んだ。

「もはや、話す必要などない！ さあ、アルマン。我々の決着を付けようではないか！」

「ついて来いッ！」

そういうと赤鬼は左の密林の奥へ走り出した。アルマンもその後を追った。ケンの目の前には残された一人の大鬼がバルベルトを構えている。ケンは相手を見ると同時に愛刀―ハガネーの剣先を青鬼へと向けた。

――ケネス班――

「……ほな、いくぞ」

ケネスはレオンに合図すると木々の陰から飛び出した。そしてすかさず敵に向かって筒状の爆弾を投げる。筒は空中で破裂し、中から無数の鉄製の針が出てきた。その針は敵のバトルスーツに刺さるが肉体にまでは至っていないようだ。だが次の瞬間、一筋の閃光が

上空から舞い降り、彼らの体を貫いた。

雷撃である。巨大な雷撃が突如として彼らの上に落ちたのだ。立ち待ち彼らの体は炎に包まれる。よろめき、もがき苦しむがほどよくして力尽き、辺りには肉の焦げた臭いが漂った。

「……うわあ、きつついなあこの臭い。それにしてもえげつないことを考えるなレオン」

その悪臭にケネスはたまらず鼻を手でつまんだ。しかし、その表情はしてやったりという気持ちで笑っていた。

「仕方がないだろ…最も効率よく敵を一掃する方法はこれしか思いつかなかったのだから……」

レオンは別に誇っている様子もなく、ただその黒こげの物体化の様子を見ている。確かに空は荒れてはいたがこの雷撃は偶然の産物ではない。これはレオンが意図的に発生させたものである。魔法である。レオンはケネスが特殊弾を投げた後、タイミングを合わせて雷撃魔法を発動させたのだ。

もはや動く様子もない。完全に息絶えたようだ。そしてこのような残酷な殺し方をしておきながら何も思わない自分に一種の嫌悪感を感じた。

確かにこれは戦争だ。しかし、本当にこうまでする必要があったのだろうか。レオンは一瞬、自分はこの戦争によって何か大切なものを失ってしまったのではないだろうかと思った。だがすぐにこの疑問を心の内に押し殺した。

「これは戦争だ…」

「ん、何か言ったかレオン？」

突然のケネスの声にレオンは現実に戻された。どうやら無意識のうちに声に出していたらしい。レオンは「何でもない」というとごまかす様にリリースに現状報告をしだした。

「こちらレオン、先頭車両の敵の一掃は完了した。他のチームの現状を教えてください」

『はい、副隊長たちはもうすぐ終わりそうです。あ、今通信が入りました、今一掃したようです。隊長たちは…ツイン・バルベルトとの接触後、連絡はありません……』

「分かった、報告ありがとう…」

そういうとレオンは通信を終えた。どうやら隊長たちは苦戦しているらしい。レオンはすかさずケネスの方を向いた。こちらを向いている。どうやら考えていることは同じらしい。二人はうなずくとすぐさま後方車両へと駆け出した。

——ガルフォント森林地帯中央区（移動中）——

いったいどこまでこの森深くまできたのだろうか。赤鬼を追いかけて数分後、アルマンは急に足を止めた。赤鬼が止まったのだ。辺りを見回すとアルマンは赤鬼がこの場所で立ち止まった意味を理解した。

この密林地帯の奥地で何故かこの場所だけ木々が全くないのである。その大きさ直径20メートルといったところだろうか。上空か

ら見ればまるで穴があいているようになってるだろう。アルマンはそう考えながら呼吸を整えている。最も整えるほど疲れていたわけではないが・・・。

「いい場所だろう？　ここでなら存分にバルベルトを振れる。アルマン、ここがお前の墓場だ」

赤鬼はそういつと顔を隠していたヘルメットを脱ぎ捨てた。中からは非常に顔立ちのよい顔が現れた。髪は長髪で光沢のある金色をしている。髪は根元のところで束ねられていてその長く真っ直ぐな髪は肩より下まで伸びている。

彼はバルベルトを両手で構えるとアルマンと対峙した。その矛先はちょうどアルマンの胸に向けられている。

「おれはまだ死ぬつもりはない。死ぬのはレギオス、お前のほうだ……」

アルマンもすかさず突撃銃―ジーク―を構える。アルマン自身は気づいていなかったがアルマンは無意識の内に赤鬼を彼の本名で呼んでいた。

「死ぬのは私だとアルマン？　よくもそのような言葉が言えたものだ……。貴様は罪を償うつつもりはないのか？」

「償う気はある。だがおれは一隊長だ。私情で行動できる立場ではない。おれには守るべき部下がいるんだ。ここで死ぬわけにはいかん」

「その言葉を信じろというのかアルマン、貴様は単に逃げているだけだろうがッ！」

先手を取ったのはレギオスだった。バルベルトを腰の位置に地面に水平に構え、アルマン目掛けて地面を蹴った。そして間合いにアルマンを捕らえると全身をバネにしてそのままバルベルトを思い切り横に振った。

すかさずアルマンは後ろに跳ぶようにして下がり、その攻撃を瞬間的に避けた。そして避けると同時に銃口をレギオスの方へと向け、彼の頭に標準を合わせトリガーを引いた。けたたましい銃声と共に無数の銃弾がレギオスに向かってくる。

レギオスは銃弾を目で捉えるとバルベルトでその銃弾を防いだ。

「私に飛び道具はきかんツ！」

レギオスはバルベルトを短く持つと真上から振りかざし、《ジーク》を一刀両断した。続けざまに今度はアルマンの心臓目掛けて突きを放つ。

アルマンは上半身をひねりながら後方に跳び間一髪、心臓を貫かれるのを回避した。しかし、無理な体勢から跳んだためバランスを崩し、地面に左の膝と手をついた。

アルマンは右手で左胸に固定されてあるナイフホルダーから銀色に光るナイフを抜いた。刀身は二十センチといったところだ。刃には流線上の模様が浮かび上がっている。アルマンはそのまま立ち上がると左手を前に出し、右手に持ったナイフを腰の位置に構えるという独特の構えを取った。

「ナイフ一本で何ができる？ 悪あがきはよせ」

レギオスは主要武器を失いながらもまだ闘う姿勢を崩そうとしないアルマンを見て呆れている様子だ。リーチで勝るバルベルトにナイフ一本で挑もうとは正に無謀なことだからだ。

「…おれを甘く見ないほうがいいぞ、レギオス」

アルマンは地面を蹴り上げると一瞬にしてレギオスの目の前へと移動した。レギオスは咄嗟にバルベルトを振った。しかし、突然のことに動作が一瞬遅れた。アルマンはその隙を見逃さなかった。

シュンッ！

風を斬る音が聞こえた。アルマンはレギオスの後方に回り込んでいた。レギオスはすぐに後方へと振り向いた。そして斬られた感触はしていたのでどこかに損傷はないか探した。よく見るとバトルスーツの胸の辺りに横に斬られた跡があることに気づいた。痛みは感じない。どうやら内部にまで至っていないようだ。

しかし、これはバトルスーツである。最先端の技術を取り入れた最も硬質で柔軟性に優れた戦闘服だ。それをアルマンは斬ったのだ。

「まさかこの私のバトルスーツに傷がつくとは夢にも思わなかったよ。そのナイフ、ただのナイフではないな？」

レギオスは必死に心の動揺を悟られぬよう冷静に振舞った。さすがは英雄といったところか、その表情は全く動じたようには見えない。

「そうだ。こいつは《アルデイス》といってな。代々、ギルガネス一族で最も力を持つものに受け継がれる物だ。その昔、初代ギルガネスが創りだしたと言われ、その構成物質、能力など未だに解明されていないことが多いものでもある」

「なるほど。まさかそのような切り札があるとは…良いだろう。そちらが切り札を出したというならこちらもちり札を出すでしょう…」
「目覚めよ、《ライサー》！」

レギオスはバルベルトのちょうど真ん中に位置するところにあるスライド型のスイッチをオンにした。

ブ————ン

低く唸るような音があたりに響き渡る。よく聞いてみるとその音はレギオスのバルベルトの刀身から聞こえてくる。さらに驚いたことに何故かその刀身に振れた雨粒は激しくはじかれている。

「これこそ、我がバルベルトの真の姿だ。この刃が高速振動することにより、少し触れただけでも相手に大きな損傷を与えることが出来るのだ」

レギオスは説明し終わるとライサーの矛先を再びアルマンの心臓に向けた。アルマンも基本姿勢を取る。そして両者共に地面を蹴り相手に向かって突進した……。

鬼【四】

——護送車後方車両——

ガキーンッ！

カ——ンッ！

重い金属音が辺りに響き渡る。ケンはアルマンが立ち去った後、すぐに青鬼との戦闘に入った。青鬼のバルベルトは赤鬼のものと比べ刀身が二倍ほど大きく、非常に重そうだ。しかし、当の青鬼はそれを外見通りのパワーでしかも予想以上に高速でケンに向けて振り放ってくる。ケンはその斬撃を必死に刀で防いだ。一撃受けるたびに全身が痺れるような気がした。

「さつきから黙りやがって何かしゃべったらどうだ！」

ケンは現状押されていることは分かっていたがあえて強気な発言をし、挑発してみた。

「今から死ぬ野郎に掛ける言葉なんてねえよ」

荒々しい言葉と共に新たな斬撃が返ってきた。すかさず刀で防ぐ。そしてそのまま鏢迫り合いに持ち込んだ。両者共に相手の眼を睨み合う。ケンはこの状態から反撃を仕掛けようとし、重心を後方へと移動させる。

「甘めえ！」

ケンは突然の衝撃によって後方に二、三メートル吹き飛ばされた。青鬼からタイミングよくみぞおちに蹴りを入れられたのだ。ケンは体勢を崩された状態で宙に浮いたものの何とか足で着地した。

（くっ、何て重い斬撃なんだ。それにあのパワー尋常じゃない）

ケンはみぞおちに走る激痛に耐えながらも必死で反撃の機会をうかがった。しかし、青鬼は大振りにもかかわらず、隙という隙を見せない。さすがは英雄の一人である、ケンは改めて青鬼が英雄と呼ばれるわけを納得した。

「けっ、軽すぎるぜ、てめえの斬撃はよ！」

ケンは青鬼から感じる雰囲気がどことなく誰かに似ていると感じた。

（…そうだ、マツクだ。この言葉遣いに戦い方、どことなくマツクに似ている）

ケンは体の節々からくる痛みに耐えながらも立ち上がり再びハガネを構えた。青鬼は間を空けることなく突進してきて再び斬撃をお見舞いした。ケンはそれらを確実に防ぎながらも青鬼の攻撃の癖を見つけようとした。何十回もの猛攻を防いだ後、ケンは青鬼が見せた一瞬の隙に乗じて反撃した。

「そこだッ！」

それは青鬼が次の斬撃に移る時に息を吐いて吸い込む前の一瞬というものだ。人は誰しも息を吐いてから吸い込むまでの一瞬、全身

の力が抜けてしまうのだ。

ケンは斜め上から思い切り斬りかかった。しかし、間一髪のとこ
ろで斬撃を防がれてしまった。だが、青鬼は無理な体勢で防いだた
めその斬撃の衝撃によって後ろに後退してしまった。

青鬼はすぐさま体勢を整えると再び矛先をケンに向けた。しかし、
すぐに構えを解くといきなり豪快に笑い出した。

「ガッハツハッ！ 小僧、おめえ以外にやるじゃねえか。気に入っ
た！ いいだろう、特別に俺様の名と顔を教えてやる」

そついうと青鬼は二本角のヘルメットを豪快に放り投げた。そし
てその素顔をあらわにした。その顔立ちはレギオスとは対照的にあ
まり良いとは言えない。

全体的に角ばっていてあごは割れている。髪は茶色で短くまとめ
られており、その眼は獣のように鋭くこちらを見つめている。左の
頬に傷があり、いかにも戦士の顔立ちといったところだ。

「俺様の名前はザムス、ザムス・ロドリゲスだ！ デイーベルクー
の豪傑よッ！」

ケンはザムスを見て改めてマックとキャラが被っていると感じた。
そして何よりもこの場所にマックがいないことを安堵した。

（ここにマックが合わさればあまりの濃さにオレなんか消えてしま
うな……）

一瞬自分の世界に入り込んでしまったケンだがすぐさまこんなこ
と考えている余裕なんてないと思い、頭を横に振りながら頭を切り
替えた。

「ガッハツハツ、あまりのかつこよさに固まっちまったか！ だがおめえと長々と交えているほど俺も暇じゃねえんだ。残念だがそろそろ本気でいかせてもらうぜっ！」

そういつとザムスはレギオスと同様にスライド型のスイッチを入れた。すると見る見るうちに刀身が赤くなり、数秒も経たないうちに真っ赤になった。周辺の雨は蒸発し刀身からは湯気が立ち込めている。

「これが俺様のバルベルト、《ディグム》の真の姿よっ。この数千度の熱を持った灼熱の刃でめえをその変わった剣と共に焼き斬ってやるぜっ！」

（あの顔、本気でかつこいと思っっているのか！？ マックも同じ感覚なのかな？）

ケンはザムスの説明そっちのけで先ほどの彼の発言に心を奪われていた。しかし、また自分が変なことを考えていることに気づき頭を横に振った。そして彼が持つ武器がどれだけ危険なものなのかというのをケンは一瞬見ただけで理解した。

「いくぜっ！」

ケンが気づいた頃にはザムスはすでに目の前にいた。灼熱の刃はケン目掛けて勢いよく舞い降りてきた……。

「ぶえくしょんっ！」

マックが突然豪快にくしゃみをしたため隣にいたレイナは一瞬心臓が止まる思いをした。

「びつくりしたあ。大丈夫、風邪？」

「いや、大丈夫でさあ姐さん。たぶん誰かが俺の噂をしているんでさあッ！」

マックも突然自分がくしゃみをしたので不思議に思った。

彼らは先ほど戦闘を終了させたばかりだ。マックのデユラードからは赤色の液体が滴り落ちている。そのようなやり取りをしているうちに前方車両側からケネスたちがやってきた。

「どうもーお待たせしましたー」

ケネスがご満悦の様子で手を振りながらやってきた。その後ろからケネスとは対極的に病んだ様子でレオンがやってきた。レイナはそのあまりに違う二人の様子を不思議に思った。

「何かあったの？」

「いや、何もありませんでしたけど？」

ケネスはそういいながらもその表情は未だに笑顔のままだ。レオンはレオンで何も言わず、ただ黙り込んでいる。どうにも腑に落ちなかったがアルマンたちと通信がつかないというリリースから報告を受けていたので、とりあえずそちらのほうに意識を回すことにした。

「よし、全員揃ったわね。聞いているとは思うけど隊長たちと連絡が取れないの。まだ他にも敵は隠れているかもしれないけどワタシたちが護衛しなくてもさして支障はないわ」

「ほな、行きますか」

「おうよッ！」

レイナたちは後方車両へと急いだ。

——護送車後方車両——

「うおっ!？」

ケンはギリギリのところではザムスの攻撃を回避した。しかし、既に第二撃が迫っていた。これもまたケンはギリギリのところでは後方へと避けた。そして急いで木々が密集した場所へと入っていった。ザムスはその後を追う。ケンもここなら思う存分にバルベルトを振ることは出来ないと考えた。しかし、その思惑はもろくも崩れ去った。気がつくのと周りに木々が全くないのである。

「おお、こいつはいい。これで思う存分振り回せるぜ！」

ザムスの斬撃は止むことを知らなかった。ケンは尚も賢明にザムスの攻撃を避けた。しかし、このまま避けていても進展がないこと

をケンには分かつていた。かといって攻撃を防御しようとすれば例えこの刀でも焼き斬られるだろう。ケンは後退しながらも必死で打開策を考えていた。

「さつきからチヨロチヨロと動きやがって、戦う気あんのか!？」

ザムスは回避に専念するケンの姿勢に苛立ちを隠せなかった。そしてその怒りはピークに達しようとしていた。

「てめえ、それでも男か？ 男だったら逃げずに正面から堂々と挑みやがれッ!」

突然、ケンが後退するのを止めた。ザムスもケンとの間を取りつつ立ち止まった。ケンはザムスのほうを向いている。その眼は先ほどまで逃げながら試行錯誤していた男のものではなかった。

何かを覚悟した者の眼だった。そしてケンは刀を腰の位置に構え刃を下に向けた。剣先は後ろを向いている。

「あんたと普通に剣を交えても勝てる気がしない。本当は使いたくはなかったのだが仕方ない。奥の手を使わせてもらっぞ」

「何をしようてか？ 最期の悪あがきか!？」

「悪あがきかどうかは実際に見てから言うんだな」

ケンは息を深く吸い込み、ゆっくりと吐いた。そしてザムスに向かって一直線に駆け出した。ザムスはバルベルトを思い切り振り上げるとケン目掛けて一気に振り下ろした……。

「天魔無双流ゝ竜の太刀ゝ奥義…地竜!」

ケンは相手に言い聞かせるようにその言葉を発した。しかし、もはやザムスの刃はすぐそこまで迫っている。

「終わりだあゝッ！」

ザムスはこれで勝負あったと思った。だが次の瞬間、ザムスは自分の眼を疑うことになる。

ズバ——ンッ！

鈍く何かが斬れた音が周辺の木々にこだまする。確かにザムスの放った一撃はケンの頭を両断するはずだった。しかし、目の前の光景は全く予想外なものだった。

「バ、バカなッ！ 俺様のバルベルトを……、灼熱の刃を切断しただとッ！？」

そう、彼のバルベルトは確かに斧刃を真つ二つに切断されていた。しかし、普通なら数千度にまで熱せられたこの刃によってケンの刀のほう切断されるはずである。

このようになったのには彼が使用した剣術が大きく関わっている。

彼が使用した地竜とよばれる技は簡単にいえば使用者の斬撃を強める技だ。詳しいことはよく分からないが体内で生み出された運動エネルギーを刀身に移動させ、尚且つ全体重をその斬撃に乗せることによりとてつもない威力を斬撃に込められるらしい。しかも、剣などの刃物系の武器は物体に触れる面積が狭いため、その威力を一点にしかも分散させることなく与えることができる。よってケンのハガネが熱によって溶ける前にディグムの刃を切断することが出来たと

いうわけだ。

よく見るとケンが右足で踏み込んだ地面は深く陥没しており、先ほど放った斬撃がどれほどの威力であったかが伺える。

「さあ、どうする？まだ戦うか？」

ザムスの目の前には妖しく光る刀の剣先が向けられていた。ケンの表情からは先ほどの苦しいような様子は伺えない。ただ思った以上に地竜の威力が強かったためか自分自身に驚いている。

ケンは再び刀を構え直すとザムスと目を合わせた。

その時だった。突然、ケンの目の前が真っ白になった。激しい爆発音を聞いたかと思えばすぐに音という音が周りから消えてしまった。それは閃光弾によるものだった。何者かがケンとザムスの間に閃光弾を投げたのだ。数十秒後、ケンは段々と視界が回復していくのを感じた。それから一時して耳の機能が回復していくのが分かった。

ケンが完全に視界を戻した時、既にザムスは目の前から消えていた……。

鬼【五】

——ガルフォント森林地帯中央区——

「ぬんッ！」

レギオスは下腹に力を入れるとアルマン目掛けてライサーを振りかぶった。その速さはまさに高速だ。

アルマンはその驚異的な身体能力で何とかその攻撃を紙一重で避け続けていた。そして隙あらばアルデイスで斬りつけた。しかし、レギオスはその攻撃を全てライサーで防いだ。

激闘は尚も続いていた。そんな時だった。突然レギオスがアルマンとの間合いは広げた。アルマンは間合いを詰めようとはせずその場に立ち止まった。

「残念ながら時間だ。決着は次会ったとき、必ず付けてやる。それまでその首、しばし預けておく……」

「元々、おれの首だ。誰にもやるつもりはない。それに逃がすとは一言もいっていない！」

アルマンがレギオスとの間合いを詰めようとした時、レギオスが突如何かを手にした。そしてそれを地面に叩きつけるとレギオスは光に飲み込まれていった。視力が正常に戻るとそこにはもうレギオスはいなかった。

しばらくの間、アルマンは動こうともせずになたただその場に立ち尽くし無数の雨粒に打たれ続けた…。

——ベラムート補給基地——

ツイン・バルベルトが撤退した後、ケンとアルマンは援護に駆けつけた仲間たちと合流し見事、補給物資を前線基地へと運送することに成功した。それからケンたちは休む間もなくここベラムート補給基地へと無事帰還した。

ゲートの周りには兵士たちが拍手と声援で出迎えてくれた。基地の兵士たちは彼らの任務成功の報告を聞き、二十分前から待機していたらしい。そして車を降りると、補給基地長官とヒッター司令、そしてリリスが隊員たちを迎えてくれた。

隊員たちは一斉に敬礼した。リリスもお帰りの意味も込めて隊員たちに敬礼を返した。

「うむ、任務ご苦労であった！ 今回の任務で色々と議論せねばならぬことは多いが今は部屋に戻ってゆっくり休息を取ってくれ。何か用があれば艦内通信で報告する」

ヒッターはそう言い終えると、隊員たちを解散させその場を去っていった。その後を長官は付いていく。ケンたちは艦内に帰る間に基地の兵士たちに何回も激励や感謝の言葉を掛けられた。

最初のほうは悪い気にはならなかったがやはり何回も同じようなことを言われるといくらほめ言葉といっても少々目ざとく感じた。艦内に戻ると隊員たちはそれぞれの部屋に戻った。

ケンは部屋に戻るなりシャワーを浴びると軍服の上着は着ず、Ｔシャツとズボンだけを着用した。そしてベッドに仰向けになつて天井を眺めた。改めて見てもこの天井は真っ白で清潔感がありすぎてどこか落ち着かない。いつものように天井に対する不満を考える

と今回の任務を回想し始めた。そして今頃になって自分があの青鬼と対等にやりあったということにびっくりした。あの時はただ戦うことに必死だったのでそのようなことは思わなかったが改めて考えると夢のように思えた。しかし、あの時の記憶は確かにこの体に刻まれているのだ。

ケンは顔を横に向けて壁に掛けてある自分の刀を見た。基地に変える途中車の中でハガネを手入れしていたケンは剣先が少し溶けていることに気づいた。更に細部に渡り調べてみると少し芯にヒビが入っていることが分かった。どうやら一度師匠の元に戻らなければならぬようだ。

次にケンはアルマンのことを考え出した。任務前もそうだったが隊長は赤鬼のことになると人が変わったように真剣で重い表情になる。ケンは考えていくうちに隊長と赤鬼には何か敵という枠を超えた親密な関係があるのではと推測した。ケンはその答えにたどり着くとも心落ち着かなくなり、ついにはベッドから起き上がり、部屋を飛び出した。

—— オルフィス・廊下にて ——

ケンがアルマンの部屋へ向かっている途中、後ろから自分を呼ぶ声が聞こえてきたので振り返った。後ろから巨漢が迫ってくる。マツクだった。どうやら彼も隊長に用があるようだ。しかも、自分と同じ理由で。

マツクはアルマンの部屋に着くまでの間にケンに青鬼がどんな野郎だったかと尋ねてきた。ケンははっきりとしない記憶を辿りながら戦いの中で感じた印象を思い出した。

「うーん、そうだね。たぶんマックとは気があうんじゃないかな？」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味さ」

ケンはその言いながらマックのほうを見て苦笑した。マックはケンが言ったことを半分ほどしか理解できなかったが実際に会ったほうが手っ取り早いと思い、それ以上聞こうとはしなかった。

そうこうしているうちにケンたちはアルマンの部屋の前にやってきた。そしてドアの右横にあるモニター付のインターホンでアルマンを呼び出した。

「すみません、ケンです。隊長お疲れのところ申し訳ないのですが少しお時間をいただけませんか？」

「隊長、俺もちとばかり聞きたいことがあるんでさあ！」

しばらくすると扉のロックが解除された。中からアルマンが顔を出す。そして入るよう促すとケンたちは部屋へと入っていった。

「……!? ツ」

部屋に入るなりケンたちはその光景に驚かされた。なんと自分たちの前に既に先客がいたのだ。しかも、リリスを除く残りのメンバー全員が。

「あら、あなたたちも気になって聞きに来たわけ？」

「どうも、お先です」

部屋の左側に座っていたレイナはこの偶然に半ば呆れつつもやはり自分たちは一つのチームなのだと思えて痛感した。ケネスは奥のほうでいつものように軽いノリでこちらを向いて笑った。相変わらず何を考えているのか分からない顔だ。レオンはレイナの奥の隣に座っている。一応こちらを見て目を合わせたがその口は閉じたままだ。任務終了直後に比べ大分表情は明るくなっているがそれでも何か病んでいる様子だ。

ケンが前へ進もうとした時、後ろから愛嬌のある声が遠くのほうから聞こえてきた。ドアから顔を出すとリリスが早歩きでこちらに向かってくる姿が見えた。そしてケンを見るなり、やっぱりという表情で彼に声を掛けた。

「さっき部屋を通るついでに誘おうとしたんだけど、やっぱりここにいたのね。わあ、他のみんなも来ている。みんな同じことを気になっていたなんて奇遇ですね」

リリスは驚きつつもとても嬉しそうな笑みを浮かべている。どうやらみんなと繋がっているという証明が間接的にしか仲間と任務が行えない彼女にとっては格別なものようだ。ケンはそんなリリスの表情を見ているうちに自分も嬉しい気持ちになっていることに気づいた。

三人はそれぞれリリス、ケン、マツクの順に入り口側に座った。全員が揃うとアルマンは他のメンバーより少し高い位置になるように右側に置いてあるベッドに腰を下ろした。そして手を組んで少しの間床をぼんやりと眺めてゆっくりと深呼吸をした。そして気持ちを整理し終わると顔をあげ重々しげに口を開いた。

「本当はこのことは自分の心の中に閉まっておくつもりだったのだ

がな…しかし、仲間がこれほど自分のことを心配し、思ってくれているのに話さないというのは隊長として、いやおれという一人の人間として許せる行為ではない。だからみんなには正直に赤鬼との関係について話そうと思う。

アルマンは一人一人の目を見ながら語るように仲間たちに話し出した。

「赤鬼の本名はレギオス、レギオス・ザルバンという。彼は数年前までアルフォードの兵士だった」

最初の語りからケンたちは驚かされた。あのディーベルクの英雄の一人である彼がほんの数年前まで我々側にいたというのだ。アルマンは隊員たちの驚いた様子を目で確認していたがそれを無視するかのように話を続けた。

「彼とおれは同期で入隊した。共に訓練し語り合い、時には喧嘩をすることもあった、要するに親友というやつだ。そしておれたちは共に国境の監視に当たる部隊へと所属され何度も死線を共にくぐってきた」

アルマンは話を続けていたが話の内容が思い出話のほうへとずれ始めていたのでケンは勇氣を持ってアルマンに質問した。

「隊長と赤鬼との仲はよく分かりました。でもオレの疑問は話を聞く前よりも強くなりました。教えてください、どうして彼はあなたという旧知の友を恨みそしてアルフォードと敵対するディーベルクへ寝返ったのですか？」

アルマンは言い出したくても言いづらいために出来るだけ本題を

後に回そうとしていた。しかし、ケンに質問されたことにより今から言わずにはいられない状況となり自分の心に言い聞かせその鉄の口をこじ開けた。

「…奪ったんだよ。あいつの最も大切なものを……」

「何を…奪ったんです？」

ケンはそう問いかけると次に発せられるアルマンの言葉に耳を傾けた。しかし、彼の口から出たものはあまりに衝撃的な言葉だった。

「おれは…あいつが最も大切にしていた…この世で最も輝いていた宝石…あいつの……」

「妹を殺したんだ……」

鬼 【五】（後書き）

第一部主な登場人物の紹介

くアルフォード王国く

―特殊戦略部隊―

ケン・シュナイダー：第一部の主人公：16歳：男性：紅色の短髪：
黒色の瞳：アルフォード王国の機動歩兵として前線でその自慢の剣
術を巧みに使って活躍していた。その腕が買われアルフォード国王
直属の部隊で特殊戦略部隊、通称『特戦』に配属される。彼が軍に
入隊したのには悲しい過去が関わっている。彼が使用する剣術は天
魔無双流と呼ばれるものでそのあまりに巨大な力のために神にも魔
にもなれると言われている。またその所持する剣もこの世界で流通
している両刃の剣ではなく、片刃の剣、刀である。情に熱い男でこ
の情こそが彼の長所でもあり短所でもある。

アルマン・ギルガネス：隊長：26歳：男性：黒色の中髪：茶色の
瞳：人柄がよく誰にでも好かれる人物。任務のために冷酷になろう
と努力しているがいざとなると人命を優先してしまう。ギルガネス
家の人間で超人的な運動能力を持つ。その運動能力は発射された弾
丸を簡単に避けられるほど。刃物から銃までありとあらゆる武器
を使いこなすエキスパートでもある。【アルフォードの戦神】（も
しくは戦神）という二つ名を持つ。レギオスとは意味深な関係。

レイナ・フランク：副隊長：25歳：女性：紫色の長髪：緑色の瞳：

隊の中では頼れるお姐さんの存在。狙撃の名手でその集中力は三日間、同じ射撃体勢でいられるらしい。

マック・エイガー：ムードメーカー：20歳：男性：茶色の短髪：青色の瞳。大柄で長身。細かいことは気にしない豪快な性格。基本的にバルカン砲などの重火器を使用して戦うが他にも白兵戦用に大雑刀を使用する。

レオン・マッケイン：天才：17歳：男性：水色の中髪：銀色の瞳：IQ200を超える超天才。言葉数が少なく、無愛想。その頭と魔法で数々の戦いを勝利へと導いてきた。また、ハッキングを得意とし、セキュリティ解除や、情報の奪取なども行う。

ケネス・フロイド：曲者：20歳：男性：黄土色の中髪：黒色の瞳：妙な言葉遣いをするお調子者だが任務の時には隠れた冷酷さを見せることがある。爆弾に関しては確かな腕を持つ。特戦の曲者的存在。

リリス・クラフト：オペレーター：16歳：女性：朱色の中髪：水色の瞳：性格は非常に明るく、特戦のマスコットの存在。彼女の存在が隊員の戦場で受けた心の傷を癒しているのは疑いようがないだろう。オペレーターとしての腕も確かなものを持っている。

ノリス・ヒッター：司令官：56歳：男性：灰色の短髪：茶色の瞳：若かりし頃は【戦場の稲妻】という二つ名で恐れられていた。今でもそのたくましい体つきは衰えておらず、また歳を取ったことでよ

り一層その風格は増している。人としても戦士としても隊員達に影響を与える人物。ちなみに【戦場の稲妻】という二つ名は彼が使用するガントレットが電撃を流すことが由来。

―その他の人物―

アルフォードⅤ世：国王：45歳：男性：黒色の中髪：黒色の瞳：現、アルフォード王国の最高権力者として王座に座る者。国は民あつてのものと考えており、常に民の事を考えている。この戦争を終わらすために特戦を設立することを決意する。

↳デューベルク王国↳

―ツイン・バルベルト―

レギオス・ザルバン：赤鬼：26歳：男性：金色の長髪：茶色の瞳：バルベルトと呼ばれる槍と両刃の斧を合わせたような武器を巧みに扱う者。性格は非常に冷静でどんな窮地に陥ろうとも理性を失うことはない。唯一、アルマンのことになると感情を表に出す。【赤鬼】という二つ名でアルフォードの兵士から恐れられている。アルマンとは意味深い関係。

ザムス・ロドリゲス：青鬼：22歳：男性：黒色の短髪：黄土色の瞳：レギオスの相棒。とても豪快な性格でその自慢の力で敵をなぎ

倒す。【青鬼】という二つ名で敵から恐れられている。ザムスの使用するバルベルトの刃はレギオスのものの二倍。マックとキャラが似ている。

アルマン 【巻】

——ドライアス山岳地帯——

荒れ果てた大地、むき出した多くの岩、緑のない黄土色の世界。そんな世界に複数の点が線に沿うように存在する。彼らは山岳警備隊の兵士たちだ。

このドライアス山岳地帯はアルフォードとディーベルクのちょうど間に存在する。そのためこの山岳地帯に国境線が引かれ、双方の軍の兵士たちがにらみ合っている。

彼らの任務は国境線を超えて敵が侵入してくるのを防ぐことにある。ほんの二、三年前ならこの国境警備隊は非常に退屈でのんびりとしたものだった。しかし、現在は双方の国の情勢がよろしくなく、いつ開戦してもおかしくない状況だった。

最近では銃撃の聞こえない日など存在しない。

そんなピリピリとした大地にアルマンもまた立っていた。

アルマン・ギルガネス当時二十三歳、階級は少尉。まだ子どもらしさが抜けていない歳頃だ。彼はアルフォード軍左翼第貳師団の第四大隊第三中隊通称、『山岳警備隊』の第二小隊小隊長を務めていた。小隊は隊長一名と部下四名、計五名によって構成されている。

「こちら、第二小隊。ポイントαに異常なし」

『了解、第二小隊はそのまま基地へ帰還してください』

アルマンは本部への報告を終えると自分の右側を歩く兵士に声を掛けた。

「ふう、やれやれ。やっとこの緊迫した空気ともおさらばできるな」

「おい、小隊長がもう気を緩めてどうする。まだ基地に帰還したわけではないのだぞ」

隣の兵士はアルマンに喝を入れると再び辺りを警戒しながら進みだした。驚くべきことに彼は小隊長であるアルマンにタメ口で、しかも湯を入れたことにある。だが別に驚くこともなかった。

単純な答えだった。彼はアルマンと非常に親しいのだ。その上、階級も少尉。これなら別に驚くこともない。

「おいおい、そんなにピリピリしているとデコが広くなるぞ、レギオス」

「そういうお前も気を抜きすぎると敵にやられるぞ、アルマン」

双方の放つ言葉は相手に食いかかってはいるがその表情は柔らい。口で何と言おうが彼らには互いの気持ち理解できたのだ。

「はいはい、ケンカはそこまで。そんなに大声で言い合っていたら敵さんに撃ってくださいって言っているようなものよ」

そんな二人の間に一人の女兵士が仲裁に入ってきた。

「こいつは失礼。以後気をつけます」

「すまない、リース。私としたことが…」

双方とも照れ笑いをしながらその兵士に詫びた。レギオスにリースと呼ばれたその女兵士はそんな二人を見て困った二人だ、という

様子で苦笑した。階級は彼らより下の軍曹でどうみてもまだ十代に見える。

「アルも小隊長なんだからもつとしつかりしてよね。兄さんも兄さんよ、アルの補佐役なんだからアルの調子に引き込まれないでよ、もう……」

リースことリース・ザルバンはレギオスの実の妹である。歳は十八で少しは大人の女性の香りがしてもいいはずだが彼女は実年齢よりも見た目がさらに幼いのでそのような香りは少しも感じられない。ヘルメットで隠れてはいるが金色のショートヘアーをしており、赤色のバンダナをしているのが特徴的だ。

アルマンのことをアルと呼んでいることから分かるように彼らはかなり親密な関係にある、つまり恋人同士ということだ。

そんなやり取りをしながら歩くこと半刻、ようやく基地が視界に入ってきた。

——アルフォード軍第四大隊基地——

国境線から二キロ離れたところに彼らの基地は存在する。基地のつくりは非常に強固で入り口は硬いゲートで侵入者を寄せ付けない。また渓谷に建設されているため、陸路において完全にディーベルクの侵入を拒んでいる。

「こちら第二小隊、巡回の任務を終え帰還。」

アルマンが無線で告げると人員用のゲートの一つがゆっくりと開

きでした。

渓谷の高さは数百メートルもあり、ゲートは複数存在する。その中でも最下層に存在するゲートは主に人員や装甲車用として使用される。逆に最上層などは戦闘機や輸送機、戦艦用として使用される。

アルマン一行はゲートをくぐるとすぐに渓谷の奥にある建物へと入り、とある一室へと向かった。そして受付にいる秘書官に告げると秘書官はインターホンでその部屋の主と連絡を取った。数秒後、秘書官はアルマンたちに入るよう促した。

「失礼します。第二小隊、巡回の任を終え報告に参りました」

「うむ、ご苦労。まあ座りたまえ」

その部屋の主はそういうと彼らにソファアに座るよう促した。普通、上官は部下が自室に来て座らせたりはしない。例えそれが長話だったとしても、だ。しかも、彼らは巡回から帰ったばかりでその身なりは汚れている。それでも彼らに座るように言ったこの主は全くといって気にしていない。

「お言葉に甘えさせてもらいます、ブラウ司令。では報告します。ディーベルクとの境界線において特に変わった変化は以前見られません。ただ、これは自分個人の意見ではありますが以前にまして周辺の空気がピリピリしてきたと思います」

アルマンにブラウ司令と呼ばれたこの男はこの基地の司令であり第四大隊の頂点に立つ人である。階級は少将。歳は五十四で髪は茶色と白色の縞模様を形成している。非常に心が広く、また司令としての器も大きく、彼を尊敬する部下は後を絶たない。

「ふむ、それは今の我が国とディーベルクの情勢を知る者なら誰し

もが感じることだ、少尉。うむ、報告ごころう。次の指示があるまで体をゆつくりと休めておいてくれ」

「『『『』はっ、失礼します』『』『』」

アルマンたちは一斉に立ち上がると司令に敬礼をし、部屋を後にした。

——第四大隊基地寄宿舎——

アルマンは寄宿舎にある自室に戻るとすぐさま体についた汗と汚れを流した。この第四大隊基地には中隊に分かれてそれぞれ寄宿舎が存在する。彼らが所属する第三中隊の寄宿舎は二階建てで十六の部屋が存在する。部屋割りは一隊長と副隊長の二人で一室、残りの三名で一室という感じだ。ただし、この第二小隊だけは（もしかすると他の部隊にも当てはまるかもしれない）この振り分けが違っていた。

「体の汚れは取れた、アル？」

シャワールームから出てきたアルマンに声を掛けたのは副隊長のレギオスではなく赤いバンダナが特徴の彼の妹のリースであった。何故彼らはこのような振り分けを行ったのか？それは読者の方々のご想像にお任せするでしょう。要は他三名が彼らに気を配ったための結果というわけだ。

彼女はアルマンより先にシャワーを済ましていたため、既に洗濯済みのものに着替え終わっていた。ただ、髪はまだ乾ききっていない

かったので彼女の特徴である赤いバンダナはしていない。（このバンダナはアルマンが彼女に初めてプレゼントしたものである。ちなみに彼らは付き合ってからこれ三年になる）

「ああ、だと思った以上に体の疲れが大きいようだ。少し、横になるよ」

そういうとアルマンはリースの膝を枕代わりにして横になった。リースは少し恥ずかしそうではあったが抵抗はないようだ。どうやら珍しいことではないようだ。

ガチャ

「リース、アルマン、入るぞ」

そうやって言うと同時に入ってきたのはレギオスだった。彼は二人の状態を見るなり、彼の表情は鬼と化した。

「アルマン、貴様というやつは…、誰が私の妹に手を出していいと
いったあ！」

レギオスはそう言うなり怒りの鉄拳をまだ上体を起こしきれていないアルマンの顔面目掛けて放った。アルマンはすかさず両手でその拳を受け止めた…っが、連続して今度は彼のミドルキックがすでにアルマンの左腹目掛けて接近していた。

「ちょ、タンマ！ 落ち着けレギオス！」

だがアルマンの言葉などお構いなしにかれの右足はアルマンの右腹にクリティカルヒットした。そのあまりの勢いにアルマンは壁へ

と吹き飛ばされた。

「じはあつー！」

壁に背中をぶつけたアルマンは横腹の想定外の痛みにもその場に崩れ落ちた。

「痛つてえー、待てつただろうがこのシスコン野郎！ 隊長への暴行は軍法違反だぞ！」

「誰がシスコンか、妹を大切に想う兄は全国共通だ。それに私のリースへの愛情の前に軍法など敵ではないわっ！」

そう言い放つとレギオスはいつもの冷静さを取り戻し、リースに大丈夫かと声をかけた。

しかし、自分を心配している兄に対して放たれた言葉は痛烈なものだった。

「もう何するのよ、兄さん！ アルと私は彼氏と彼女の仲なのよ。膝枕くらいで蹴ることなにじゃない、バカ！」

妹から放たれたその一言はレギオスの心に深く突き刺さった。レギオスは二、三步後退するとその場に崩れ落ちた。どうやらよほど彼女の言葉が奥深くに刺さったようだ。

「おーい、お兄さん。いつまでスネているんだよ。何らかの用件があるから来たんだろ？」

アルマンは未だに痛む横腹を押さえつつ、立ち上がるとレギオスに尋ねた。レギオスは少しの間を置いて立ち上がると立ち上がり用

件を述べだした。彼の眼は少し赤くなっていたが…。

「司令からの伝令だ。すぐに出頭するようにとのことだ。どうやら次の任務が出来たようだ」

アルマンはそれを聞き終えたとすぐに上着を着用し、リースと軽い口付けを交わすとレギオスと共に司令の元へ向かった。（ちなみにこのあとまたレギオスから罵声を浴びさせられたわけだが…）

——ブラウ司令執務室——

再び執務室を訪れると司令は先ほどと同じく机のイスに腰掛けていた。そしてこれまた同じくソファアに掛けるよう促した。しかし、先ほどと違う点が一つあった。第三中隊全ての小隊長、副小隊長が揃っていたのだ。

「さて、今回の任務なのだが事を急ぐものである。これはかなりの秘密事項に値するのだが諸君らの腕を信じてのものだ、心して聞いてくれ」

アルマンらは司令の厳しい表情から今度の任務は一筋縄にはいかないと判断した。そしていつも以上に真剣に任務内容に耳を傾けた。

「実はつい先ほど入った報告なのだがどうやらディーベルク軍の兵士が多数、国境を越えてこちら側に侵入してきたらしい。センサーも多数の人間を捉えている。報告をしてきた兵士たちはすぐにその討伐に向かったようだが以前連絡が取れない。おそらく敵の侵入者

にやられたと見て良いだろう」

その言葉を聞いてアルマンはそれがどの部隊かすぐに理解した。この場にはいないのは第四小隊の者だけだ。第四小隊の小隊長とは結構な仲であつたのでアルマンは心を痛めた。

（もう二度とあいつと酒を交わせないのか、残念だ……）

「そこで諸君らに命令する。すぐに準備を整え三十分後に第一滑走路へ集合せよ。そして輸送機で現地まで向かい敵勢力を完全に殲滅せよ、以上」

司令の説明が終わると同時に各小隊長らは立ち上がり敬礼するとすぐさま準備へと動き出した。アルマンたちもすぐさま携帯していた通信機でリースら他メンバーに連絡を取り準備を急がせた。

十五分後、彼らは滑走路へと足を運ばせていた。他の小隊も五分前には集合地点にやってきてた。そして全員輸送機に搭乗すると輸送機は大空へと飛び立った。空はしだいに暗くなりだしていた。

アルマン 【貳】

——ドライアス山岳地帯——

輸送機が通信のあった場所に降り立つとアルマンらは即座に大地へと降り立った。そして輸送機内で確認した自分たちの搜索区域へと駆け出した。

担当区域にたどり着くとアルマンは自分を中心に正方形の陣形を取った。左前にレギオス、右前にリース、左後ろにチャック、右後ろにロベルトという感じた。お互いに2メートルほど距離をとりながら彼らは敵が隠れていないか全ての感覚を研ぎ澄ませていた。

搜索を開始してから半刻が過ぎないうちに第一小隊の小隊長から通信が入った。どうやら敵は自分たちとは反対方向に逃亡したようだ。

通信を終えるとすぐさまアルマンたちは第一小隊の担当する区域へと向かった。

ほどなくして現場に到着するとすでに現場では銃撃戦が始まっていた。しかし、敵の姿は捉えられない。

「第二小隊、ただいま到着した。至急援護を行う。しかし、敵さんはいったいどこだ？」

アルマンはそう第一小隊長に尋ねたがどうやら彼も大体の位置しか把握できていないようだ。こちら側はほとんどの小隊が到着していたが既に四人もの兵士が息絶えていた。むこうの兵士はよほどの腕の持ち主と考えていいだろう。しかし、どうやらそれだけではないようだ。どうやら敵はかなり高性能な暗視ゴーグルを装備しているようだ。こちらも暗視ゴーグルは着用しているのにもかかわらず

敵を捉えられないのだから可能性は十分にある。

アルマンは一瞬考え込むと咄嗟に全ての兵士に暗視ゴーグルのスイッチを切るよう促した。兵士たちは何のことやら分からなかったが考えるよりも先に体が反応したかのように一斉にスイッチを切った。

アルマンはそれを確認するよりもさきに星空目掛けて銃口を向けた。

ボシュ——、パンッ！

アルマンが放った弾丸は空高く上昇するといきなりとてつもない光を放ちだした。発光弾である。アルマンはすぐさま敵の姿をとらえると愛銃であるカスタム突撃銃ジークの引き金を引いた。敵はあつけなくバタバタと倒れていく。アルマンに少し遅れて他の者たちも次々に敵目掛けて銃弾を放つ。今度は発光弾によって発生した疑似太陽の光によって敵をはつきりと捉えることが出来た。数分後、アルマンらは敵の半分を一掃することに成功していた。

彼らは何故こうも敵をたやすく一掃できたのか？それには暗視ゴーグルの仕組みが深く関わっている。暗視ゴーグルは光量を増幅する装置でそれによって暗黒の中でも視界を得ることができる。しかし、もしそんな状態で太陽ほどの強い光を見てしまうとどうなるか？答えは簡単、暗視ゴーグルは視界を失うのだ。たしかに数分も立たないうちに視界は回復するがアルマンたちにとってはその数分で十分なのだ。

「半分は逃げたか、どうやらまだ十人ほどはいたようだが……。よし、とにかく先を急ごう。奴らを逃がすな！」

アルマンの掛け声と共に第三中隊は一斉動き出した。どうやら先ほどの行動によって自然的にアルマンが指揮官の位置に就いたよう

だ。

第三中隊は彼の指揮の下、残りの敵の討伐へと向かった。

——キヌマス遺跡——

「どうやら敵はここに隠れて可能性が高いな」

アルマンは遺跡の入り口を見ながらつぶやくように述べた。

キヌマス遺跡——この遺跡は彼らの文明が築かれる何万年前に存在していたと言われる文明の遺跡でその文明の技術力は彼らが持つ技術力よりも高いとされている。このような遺跡は他にも点々と存在し、多くの学者の関心を買っている。通称、この文明のことを彼らは超文明と呼んでいる。

遺跡は断層をくり抜いて存在しており、その入り口は斬層と一体化している。しかし、内部の壁はどうみても人工的な素材でできている。

「よし、第一小隊と第三小隊、そしておれら第二小隊はこの遺跡内部に入り敵を搜索しよう。他の小隊はこの近辺の搜索に当たってくれ」

アルマンはそうのように告げると部隊を引き連れ遺跡へと入った。

内部は床に非常灯のようなものが点灯しておりかろうじて足場が見える程度の光しかない。またその通路の横幅は人二人分ほどしかない。入り口から内部に入ってから間もなくして通路が三手に分岐している場所にたどり着いた。そこでアルマンはそれぞれの小隊で

搜索するようにした。第一小隊は左の道を、第三小隊は右の道をそして第二小隊は正面の道を進むことにした。

しばらくしてアルマンたちは遺跡の外のものたちと全く通信ができないことに気づいた。どうやらこの遺跡は電波を遮断しているようだ。（内部にいる者たちにはちゃんと電波は届くようだ）そのまま進むこと数分、アルマンたちは一つの空間にでた。何やら変わった機器が置いてあり、何かの作業を行う場所のようだ。更に奥には一つの道がある。

アルマンが進もうとした時、チャックが皆を止めた。

「待ってください。ここから先は道が分かりません」

「分からない？」

「はい、ここから先はまだ調査が済んでおらずデータがありません」

アルマンは困ったという顔をしてその場に止まったがすぐさま行動に移った。つまり先に進みだしたのだ。

「道が分からないのは敵さんだって同じさ。要は同等の視点にたっただけさ」

そういうと皆も納得してか黙って先に進みだした。ただし、道が分からないということは敵が隠れそうなところも分からない、つまり敵がどこにいるのか全く予想できないということで奇襲にあってもその対処が難しくなったということを意味する。隊員たちはより一層神経を尖らせながら進んだ。

内部に入って間もなく半刻が経とうとしていた。敵は未だに出てこない。突然、第三小隊から通信が入った。

『こちら第三小隊、敵に遭遇、交戦状態にある。しかし、旗色があまりよろしくない。くっ、こいつら予想以上に手ごわい。もはや、オレを含めて隊員は二人しかない。お前たちも十分に注意し……バンッ、ぐっ……』

通信はそこで途絶えてしまった。どうやら第三小隊は全滅したようだ。その通信を聞くや否やアルマンは彼らの元へ向かおうとした次の瞬間、前方より複数の銃弾が迫ってきた。

すかさず、アルマンたちは壁のくぼみに身を隠す、だが最後尾にいたロベルトは一瞬判断に遅れ、まともに銃弾を浴びてしまった。ロベルトは無残にも地面に崩れ落ちた。

「ちっ、この野郎…よくもロベルトを！」

アルマンはすぐさま飛び出すと銃声を頼りにジークを放った。奥のほうで人の苦痛の音が聞こえた。どうやら命中したようだ。アルマンは間をおかず敵の方向へと突進した。

「バカッ、早まるな、アルマン！」

レギオスはそういつつも他の隊員たちを引き連れアルマンを追った。アルマンに追いつくと目の前には既に息絶えた敵兵士の屍が倒れていた。どうやら先ほどの銃弾は彼の急所を射抜いたようだ。しかし、彼はそんなことを考えるより先にアルマンに警告した。

「ロベルトの後を追うつもりか？ お前は隊長なんだぞ、アルマン！ もし、こいつが死んでいなければお前がこいつのようになっていたかもしれないだぞ！？」

その言葉にアルマンはあっさりと言葉を返した。

「安心しろ、レギオス。おれはお前たちを置いて死にはしない。それに先ほどの銃撃でこいつが倒れる音を聞き取ったんだ。別に何も考えずに突進したわけではないよ」

レギオスはこのとき改めてアルマンがギルガネスの一族であることを思い出した。彼の身体能力は我々より数倍高いのだ。だから我々に聞こえない音もアルマンには聞こえている場合もあるのだ。レギオスはやれやれという表情でアルマンを見た。

「なるほど。確かにお前の言うことはよく分かったがお前が隊長であることを忘れるな。隊長はただ単に戦う兵士ではない。兵士たちを動かす指揮官なんだ」

「そのくらい分かっているよ」

二人のやり取りは一向に収まる気配がない。二人のやり取りを止めたのはやはり彼女だった。

「こら、こんな時にケンカしてもしょうがないでしょ。それにいくら悔やんだってロベルトは生き返らないわ。それよりどうやってロベルトの仇討ちをするかを考えるべきよ。それこそ、死んでいったロベルトが浮かばれるはずよ」

アルマンとレギオスはリースの言葉を聞き終えるとお互いに向き合い苦笑した。そうだ、今はこんなことをしている余裕はない。いつ何時、敵に奇襲されるか分からないんだ。

「確かにリースの言うとおりだ。おれが悪かったよ、レギオス」

「こちら言い過ぎた。許せ、アルマン」

気がつけば彼らの士気はより一層高まっていた。ロベルトの死が彼らの闘争心火を点けたというのもあるがやはりリースがメンバーの意思をまとめたからであろう。リースという女性はそれだけ彼ら第二小隊において重要な存在であったのだ。

——キヌマス遺跡（最深部）——

そうこしているうちに彼らはかなり奥へと足を踏み入れていると感じた。先ほどと比べてかなり多くの部屋に出くわすようになったからだ。今となつては道から部屋へ、ではなく部屋から部屋へ、になっている。

移住区域のような部屋を出た彼らの前に再び分岐地点が見えた。道は二手に分かれていた。

「また、分岐点か。よし、おれとリースは左に、レギオスとチャックは右に進んでくれ」

「しかしそれでは戦力が半分になってしまうぞ」

「だからといって敵を逃がすわけにはいかない。大丈夫だってレギオス、敵と遭遇しだい連絡をとればいいだけさ」

アルマンの案に少々反対ではあったがレギオスも彼の考えに納得したため分かれて行動することに決めた。アルマンは後ほど、この選択に非常に後悔することになるうとは当時のアルマンはこれっぽ

っちも思っっていなかった。

レギオスたちと別れてアルマンとリースは更に奥深くへと進んだ。だが敵の気配は全く感じられない。アルマンはリースのほうへ顔を向けてみると彼女の表情が不安の色に染まっていることに気づいた。

「リース意識を敵の気配へと集中させる。ロベルトの二の舞を踏むことになるぞ。そう心配するな、レギオスなら大丈夫さ。君の兄さんの実力は唯一の肉親である君が一番知っているはずだろ？」

リースはアルマンの言葉に幾分安心したようで彼女の表情には明るさが戻っていた。彼女ら兄妹は早いうちに両親を亡くし、兄妹力をあわせて今まで生きてきたのだ。その絆はとてつもなく深い。レギオスがいつも妹のことになると性格が豹変するのもこういう事情があつてのものだ。（だからといってシスコンであることには変わりはないが…）

その時、アルマンの通信機に信号が入った。どうやら送り手はレギオスのようだ。

「ああ、レギオスか。どうだ、そっちのほうは……」

『アルマン、こちらはビンゴだ。敵とばったり遭遇してしまった。しかもかなりの数だ。これでは太刀打ちできるのも時間の問題だ。今すぐ他の部隊に連絡をとって応援に来てくれ』

「分かった、今すぐそちらに向かう。それまで耐えてくれ！」

アルマンはレギオスと通信を終えると急いで分岐点まで駆け出した。そして第一小隊に応援要請の通信を取ろうとした。だが、事態はとてつもなく深刻であるということにアルマンは気づかされた。

第一小隊との通信が出来なくなっていたのだ。

アルマン 【参】

——レギオス班——

ダダダダダダッ　ダダダダダッ……

バンツバンツ　キュンツ　キュンツ……

銃撃が始まってからどれくらい経過しただろう……。旗色は依然として良くはならない。チャックも先ほど敵の銃弾にやられてしまった。しかし、彼は敵を四人も道ずれにした。大したものだ。だが今となつては自分一人で何とかこの場を踏ん張らないといけないという現実がある。敵はどんどん、間合いを詰めてくる。

「すまない、アルマン、そして妹よ。どうやら私はこれまでのようだ……」

間もなくして銃声の音はしなくなり、辺りは再び沈黙の闇へと舞い戻った……。

——アルマン班——

「待っている、レギオス！」

アルマンたちは懸命にレギオスの元へと向かっていた。だが、ア

ルマンとリースを除いて応援部隊はいない。もはや遺跡内において生き残っているのは第二小隊のものただけとなってしまった。敵の実力は彼らが想像していた以上のものだったのだ。アルマンは走りながら自分の取った行動をとてつもなく悔いた。あきらかにおれの判断ミスだ、アルマンは自分の判断で仲間を死なせてしまった罪で胸が一杯だった。しかも、今となつては親友の命までも失おうとしている。

「許せ、レギオス。頼むから生きていてくれよ！」

アルマンは自分たち二人だけが来て本当に事態の改善になるのかという不安もあったがもはや悩む余裕などなかった。行かなければ確実に自分の親友は死ぬ。その事実が彼に判断する時間を与えなかった。

駆け出してから数分後アルマンたちはとある空間にでた。その空間はかなり広いものだった。その広さはざっと五十平方メートルはある。

彼らが空間の奥へと歩んでいると前方に人影が見えた。その人影は座り込んでいるように見える。更に近づいてみる。アルマンは驚愕の表情を浮かべた。最悪の事態が起こったのだ。

「兄さん！！」

リースが思わず叫んでレギオスの元へと駆け出す。アルマンはあまりのショックでその場に立ち尽くしてしまった。

「兄さん、しっかりして。眼を覚まして、兄さん！」

リースの眼から大粒の涙が零れ落ちる。彼女はレギオスの肩を必死に揺らした。

「ん…、リ、リースか…。お前たち来てくれたのか……」

「兄さん！」

レギオスは生きていた。彼は額から血は流していたものの意識を失っていただけだった。アルマンも目の前で親友が眼を開いてことで思わず、眼がうるんでしまった。

「バカ野郎、人を心配させやがって…」

そう言いながらアルマンは腕で眼を覆っていた。
レギオスは弱弱しくも状態を起こし、口を開いた。

「…逃げる…んだ…、リース…アルマン…畏だ……」

その刹那、アルマンは周りからとてつもない殺気を感じた。ゆっくりと闇から複数の人影が現れる。その数、二十。彼らはいつの間にか敵に囲まれていたのだ。ほどなくして周りには敵兵のバリケードが出来あがっていた。

一人の敵兵士が一步前へと歩みよった。どうやら敵部隊の隊長のようだ。彼はヘルメットを取るとそこには左目に傷のあるごつごつした顔が現れた。歳は四十代といったところだろう。

「我が部隊を前にしてここまでやりあうとはお前たち、中々の腕だな。よろしい、特別に辞世の句を読ませてやる」

その発言に対してアルマンは苦笑するとその男の眼を睨みながら述べた。

「あいにく、それほど昔かたぎじゃなくてね。くそ食らえだ馬鹿野郎……」

「はははっ、このような絶望的な状態であつても怖気づかんとはやはり我々とやりあうだけはあるものよ。だが、残念だが小僧よ、その命、ここで散らせてもらうぞ」

男が言い終わるのを合図に敵兵士たちはゆっくりとアルマンたちのほうへ向かつてきた。絶体絶命、彼らの状況は正にその状況だった。レギオスモリースも既に覚悟を決めていた。だが、アルマンだけは違った。彼はこの状況においても諦めてはいなかった。それは彼が本当に今の状況が理解できないバカでというわけではない。彼にはこの状況を打ち壊すことが出来るかもしれない、切り札があつたのだ。

それは彼の体に掛かっているリミッターを解除するというものだった。元来、ギルガネスの一族は通常の人間より高い身体能力を持つてはいるがそれでも限界というものは存在する。所詮は人間並みなのだ。しかし、一族の中にはその人間とは思えない動きが出来る者がいる。彼らは厳しい鍛錬によって体に掛かっていたリミッターを外し超人の域に達したのだ。アルマンはその域にまで達していたのだ。ただその能力は不安定で一度外すと自我を失い体力が切れるまで戦い続けるという闘争心がむき出しの状態になるため、通常はリミッターを意図的に付けているのだ。だが、今となつてはリミッターを外すしかこの場を打開する方法がない。彼は友を守るため、最愛の女性を守るために精神を集中した。体の内から熱いものを感じる。脈がどんどん速くなり、気持ちが高ぶってくる。

「全員、撃ち方用意！」

敵隊長の一声の下、敵兵士が銃の標準をアルマンたちに合わせた。

アルマンの体が小刻みに震える。

そして“悪魔”は放たれた……。

——数時間後——

アルマンが意識を取り戻したのはそれから数時間が経った後だった。彼の体の節々は悲鳴を上げ、頭には激しい痛みが走っていた。それでも彼は完全に意識を回復するまでに数分掛かった。

アルマンは意識が回復すると辺りを見回した。天井も周りの壁も真っ白だ。眼が痛む。光がまぶしい。ここはどこだ……アルマンは自分が見知らぬ世界にやってきたと思った。つがすぐにそうではないことに気づいた。なぜなら彼はこの場所を知っていたからだ。ここは第四大隊基地にある病院だ。アルマンは病院のベッドに横になっていたのだ。

「気がついたかい？」

そう言うなり白衣に身を纏い、眼鏡を掛けた男性が病室に入ってきた。どうやら医師のようだ。彼はアルマンに近づくと右手中指で眼鏡を上げた。

「しかし、君はよく眠っていたねえ。彼これ半日は眠っていたぞ。まあ、それだけ体が極限状態なら無理もないね。君は遺跡の周辺で搜索していた兵士たちに倒れているところを発見されたんだ。それにしてもよかったねえ、彼らが心配して遺跡内を搜索してくれなかったら君はあそこでミイラになっていたところだよ」

医師は眼鏡越しに笑みを浮かべながらアルマンを見た。そしてどこか異常はないかと尋ねた。

「…そうだ。レギオス、そしてリースは？」

突如として思い出したかのようにアルマンは医師に尋ねた。医師は一時時間を置いて彼の質問に答えた。

「レギオスという彼は緊急治療室にいるよ。思った以上に重傷だね。あ、でも大丈夫。命に別状はないよ」

その言葉を菊や否やアルマンは安堵の気持ちでいっぱいになった。

「でもリースという子は残念ながら死亡しているよ…」

「えっ…」

一瞬、アルマンは自分の耳を疑った。リースがどうしたって？そして再び彼が聞きなおそうと思ったとき、医師のほうが先に口を開いた。

「誠に残念だけどね。彼女は遺跡内に搜索に入った兵士たちによればそのとき既に息を引き取っていたそうだよ。本当に残念だ。あんなに若くして命を落とすなんて」

アルマンの中で何かが崩れ落ちた。彼は一瞬周りからの情報を全て遮断した。そして彼は頭の中で必死に整理しようとした。リースが死んだ？ ということだ？ 何かの間違いじゃないか？ そうだ、彼女が死ぬわけがない。だってあんなにぴんぴんしていたじゃ

ないか！？

「彼女の遺体なら他の隊員の遺体と共に安置所においてあるよ。一応彼女本人かを確認するために君に確認を取りたいのだからいいかい？」

アルマンは静かにうなずいたが彼の意識は依然困惑していた。そして医師に連れて行かれるまま、彼は安置所へと向かった。

――遺体安置所――

遺体安置所へと連れてこられたアルマンの眼には複数の灰色のビニール袋に収められたものが置いてあった。その中でまず彼は入り口から数えて五番目の袋の前まで連れてこられた。医師がビニール袋のファスナーを開くと中から一人の兵士に遺体が出てきた。それはロベルトだった。医師はアルマンにこの遺体がロベルト本人であるかを訪ねた、アルマンは黙ってうなずいた。次にその右隣にあるビニール袋を開いた。中にはチャックであった遺体が入っていた。同じく医師はアルマンに確認を取った。そしてその右隣にあるビニール袋のファスナーに医師が手を差し伸べた。袋はゆっくりと開いていく。そしてすきまから生気を感じることのない真っ白な肌が見えてきた。金色のショートヘアー、小さくまとまった顔……紛れもない、それはリースであった。

アルマンはリースであった遺体の目の前にしばらく呆然と立ちつくんでいた。思考を動かさなかったが全くといって何も考えることができなかった。

「遺品は通常親族の者に渡す義務があるのだがね。彼女の場合、血のつながりがあるのはまだ意識を戻していないレギオス少尉しかない。そこで彼の意識が戻るまで君が預かってくれないかい？」

そういつと医師はテーブルに置いてあったケースからあるものをアルマンに手渡した。

「これは…」

それは彼女が常に身に着けていた彼女の象徴、アルマンが彼女のために送った初めてのプレゼント、赤色のバンダナ…。バンダナは彼女の血をすすり赤色から紅色へと変わっていた。アルマンはただただバンダナを握り締めた。

それが今の彼に出来る唯一の行為だった。

アルマン 【四】

——それから一週間後——

一週間後、彼の体は完全に回復し、退院を果たすことが出来た。しかし、レギオスはまだ半分も回復しておらず、最低でも一ヶ月は掛かるだろうとのことだ。

退院早々、アルマンはブラウ司令に出頭命令を出された。彼は軍服に着替えるとすぐさまブラウ司令の元へ向かった。

執務室に入るとブラウ司令はアルマンに満面の笑みで声を掛けてきた。

「おお、奇跡の男が見事に復帰したか！ いやあ、退院おめでとう！」

アルマンはそう言われると司令に軽く敬礼した。しかし、その表情は硬かった。

そんなアルマンを気にもせず司令は話を続けた。

「アルマン、君に伝えなければならないことがある。いや、君は非常に有能な兵士だよ。これは君がもらうに相応しいものだ。受け取りたまえ」

ブラウ司令は机の引き出しから木箱を取り出すとそれをあけて見せた。中には階級を表すバッジが入っていた。色は銀色で三つの横線の上に星が三つ存在した。

「アルマン・ギルガネス、本日付をもって貴公はドライアス山岳地帯国境警備の任を解かれ明日よりアルフォード軍本部への転任を命

ず。また、貴公のこれまでの軍に対する貢献とその忠誠心を評しここに大尉の階級を送る」

そう言い終えるとブラウ司令は木箱をアルマンに渡した。アルマンは木箱を受け取ると中の階級バッチを取り出し、軍服の襟元にある少尉バッチと付け替えた。

「うむ、よく似合っているぞ、大尉。私の意見を素直に言えば君を失うのは大変痛い。だがこれは君の力を軍が認めた証拠だ。それを否定するわけにはいかん。本部でも君の活躍を期待している」

ブラウ司令は手を差し伸べるアルマンの手を力強く握った。それはほんの数秒の握手ではあったが彼にとってはとても長く感じられた。

——アルフォード軍本部基地——

明日、アルマンは軍本部へと足を踏み入れていた。彼が配属されたのはアルフォード軍の兵士の中でも精鋭が集まったエリート集団、『フォークス』だった。彼には今後、一人前のフォークスの隊員になるための地獄のような厳しい訓練が待っている。

彼は自分がああフォークスの一員になったことで胸がいっぱいだった。いつのまにかレギオスやそして彼女の記憶は薄れていった。一ヶ月が経過した。アルマンは以前に増して更なる高みに到達していた。彼は今やフォークスで最も強い兵士へと成り上がっていた。それはアルフォード軍で最強ということを意味した。また彼は自分の身体にリミッターを掛ける必要もなくなっていた。もはや彼は完

全にギルガネスの力を制御できるようになっていた。

よく見ると彼の首からは不思議な光を放つ首飾りが掛けられてあり、また左胸のナイフフォルダーには銀色に光る刃に模様の入ったナイフが収められていた。どちらもギルガネス一族で最強の者だけが持つことを許される代物だ。彼はアルフォード軍一の兵士だけでなく、ギルガネス一の戦士にもなっていた。

——アルフォード軍本部兵士墓地——

アルマンは一日の訓練を終えると即座にこの場所へと向かった。別に彼は墓地が好きといった変わった趣味は持ち合わせていない。彼には行かなければならない理由があったのだ。

途中、町の花屋によって注文していた花束をとりに行くと彼は早歩きで墓地へと向かった。兵士墓地はその名の通り、様々な理由で殉職された兵士たちの墓がある場所だ。何故アルマンはこの場所へと足を運ばなければならなかったか？ それは今日、ある者の墓が新たに加わったためだ。

彼は目的の墓の前に来ると花を静かにその前へと置いた。彼は花を供え終えると一時の間、墓を見つめた。そこにはこう記されていた。

《リース・ザルバン少尉、ここに眠る 1308～1326》

ふとアルマンは背後に気配を感じた。アルマンは気配の感じたほうへと向く。そこには一人の軍用コートに身を包んだ男が立っていた。

「私に御用ですか？」

アルマンはその見知らぬ男性に不信感を抱きつつ声を掛けた。(彼が敬語で話したのはその男性が彼よりも年上に見えたというのもあるが階級バッチが少佐を示していたためである。)

「ああ、そうだ。実は君に伝えたいことがあつてね」

アルマンはいったい何のことだろうと考えた。だが彼と自分とに何の接点もなかったので考えるのを諦めた。

「ふっ、その様子じゃ分からないといったところだな。いいだろう
単刀直入に尋ねよう。君はその墓の下で眠る兵士の死因を知っているかい？」

「……どうのことですか？」

少佐と思われるその男はアルマンの質問を無視し、話を続けた。

「彼女の死に至らしめたのは心臓に打ち込まれた一発の銃弾だ。その銃弾を調べてみたところとんでもない事実が発覚した」

男はそういうとニヤリと笑みを浮かべた。アルマンの胸の鼓動は何故か徐々に速くなっていた。彼はとてつもなく嫌な予感がした。

「銃弾には線条痕という肉眼では見ることの出来ないものがあつてね。それは指紋と同じで全く同じものはないんだよ。つまり、銃弾が放たれた銃の識別が可能というわけだ。そこで調査班の者が調べた結果アルフォード軍に登録されている銃の一つと一致した……」

アルマンは自分の内側から何か悪寒のようなものが湧き出てくるのを感じた。アルマンはこの場から立ち去りたかった。だが、体はこの場所に留まろうとして動かない。

そして少佐と思われる男の口から一言述べられた。

「その銃の名はジーク……、そう君が最も信頼を寄せている愛銃だ。彼女を撃ったのは君なんだよ」

アルマンは凍りついた。リースを殺したのは自分？ 最愛の女性を銃弾で撃ち殺した？ 辺りを沈黙の闇が覆った。アルマンはこのまま沈黙が続けば確実に発狂してしまうだろうと感じた。だが沈黙の闇は少佐と名乗る男によって終焉を迎える。

「この事実を君が知らないのは無理がない。軍はこの事実を隠蔽しているのだから。だってそうだろう？ そんなことが公になったら国民に対する軍のイメージが悪くなってしまふ。ごく自然的措置さ。だけど私はそれが気に入らなくてね。せめて関係者には伝えようと思つてここに来たというわけさ」

アルマンはあまりに衝撃的な事実を前に、ただその男の話を聞くことしか出来なかった。

「己が仕出かした罪は決して消えることはない。その罪は死ぬまで付きまとうことだろう。だが、それも仕方がない。何故なら、君は罪を犯したのだから……」

男はそう言い終えるとその場を去っていった。アルマンはただ果然と墓の前に立ちすくんでいた。もはや彼は何も考えることができなかった。

——数日後——

結局、あの男が何者だったのかは分からないが報告者には確かに彼が言ったとおりのことが書かれていた。

彼はいつもの通りに訓練に励んでいたがそれでも彼の心には何重もの鎖が絡まっていた。今や新たな出発点としようとしたリースの墓は一転して彼の懺悔場と化した。

彼は一生消えることのない罪を背負いながら生きていかなければならなかった。彼は何度も死のうと考えた。しかし、その考えを踏み止めたのは赤いバンダナだった。そのバンダナは彼に死ぬことは罪からの逃避行に過ぎないと訴えてきた。

彼は誓った、生きると、生きて罪を一生背負い続けると、そして二度と同じ惨劇は繰り返さないといふ。

新たな決意の元訓練に励んでいると上官が来るようにと促された。

いったいなんだろうと思いつつ彼の元へやってくると上官はアルマンに聞こえる程度の声で話し出した。

「実はこれは上層部のものでも何人かしか知らないことなのだがお前には深く関係のあることなので心して聞いてくれ」

アルマンは、今度は何だと思いつつもそれを表情には出さずに聞いていた。

「レギオス・ザルバンが昨日、第四大隊基地より脱走。すぐさま捜索隊を出したそうだが結局見つけることはできなかったそうだ」

リースの件がつい先日知らされて間もないというのに今度は友の脱走。アルマンは胸が重たくなるのを感じた。頭はほとんど回転していない。

「彼の部屋には手紙が置いてあり、あて先はお前宛だったそうだ。俺が持っているのがその手紙だ。読んでみる。まだ、誰も読んでいないんだ」

恐る恐るアルマンは手紙を封筒から出し、手紙をゆっくりと開いた。

そこには一言こう書かれていた。

貴様だけは許さない、我が最愛なる女性を奪った罪は重い。その代償、貴様の血で払ってもらおう

アルマンは悟った。あいつだ、あの少佐と名乗る男が彼におれがリースの命を奪ったことを話したに違いない。そしてそれを軍が隠蔽しようとしているという事実も……。

彼はたった一人の肉親である妹を殺した自分とその事実を隠そうとするアルフォードに復習するために軍を脱走したのだ……。

アルマンとレギオスがその後、再び出会うことになるのは戦場であった。

一方は【アルフォードの戦神】として一方は【デীবベルクの赤鬼】として……………

——オルフィス・アルマンの部屋——

「これが、おれが長年の間心の中に閉まっておいたレギオスとの関係だ」

話が終わったと同時に辺りには非常に重い空気が立ち込めていた。アルマンの話した内容はそれほどのものだということだ。誰も口を開こうとはしない。再びアルマンは話を続けた。

「おれはレギオスに復讐されて当然だ。あいつには復讐する権利がある。そしておれにはその復讐を受ける義務がある。まあ、仕方がないがな」

再び沈黙が続いた。今度もまたアルマンが口を開いた。

「すまないが一人にしてくれないだろうか。話し終えて色々と思いつ出したことがあってね、その余韻に浸りたいんだ」

そういわれるとケンたちは即座にアルマンの部屋を後にした。ケンたちは帰る途中自分たちの考えを述べ合った。

「まさか、隊長にあんな過去があるなんて思いもしなかったよ」

「ケン、人には一つや二つ、心の中に秘めていること何ぞあ誰にでもあることだぜ」

ケンの驚いたという意見にマックがすかさず大人らしいことを述べた。

「ふーん、なら聞くが、あんさんにも一つや二つ、心に秘めるもんがあるつちゅんか？」

ケネスがすかさずマックに追求した。予想通りマックは何も言うことはできなかった。

「今度からものを言うときはよく考えてから言いやあ。口は災いの元ともいうしな」

「うぐぐっ…」

今回の口ゲンカもケネスの圧勝のようだ。（おそらく今後もマックが勝つことはないだろう。もし、あるとすればそれは天地がひっくり返った時だろう…）

「うん」

「どうしたの、レオン。悩んだ顔して。何か引つかることでもあったの？」

レイナはレオンに質問したのは彼が悩んでいたのもあったが様子がいつものレオンにもどっていたからだ。

「少々、気になることがありますね…。何、たいしたことではありませんよ……」

レオンは意味深な発言を言い終わるとスタスタと自室のほうへと帰っていった。他のメンバーも次々に自室へと戻っていき、ケンはリリスと二人きりになっていた。ケンは自室につくまでアルマンが話した内容を振り返りながらリリスと議論した。そのひとは何故か安らぐとケンは感じた。ケンの自室の扉が見えたとリリスはそれじゃ、といった感じで帰ろうとした。しかし、ケンは彼女を引きと

め、リリスの部屋までお見送りをすると言い出した。

リリスはそれがとても驚いた様子であった。また非常にうれしかったのだろう満面の笑みでケンに笑って見せた。リリスを部屋まで送るとケンは彼女にまた明日と言って返ろうとした。今度はリリスが彼を止め、一言ケンに述べた。

「ありがとう、うれしい。優しいのね、ケン」

その一言にケンは思わず頬を赤らめてしまった。それが見られるのが恥ずかしかったのでケンは手を振りながら即座にその場を後にした。

——ケンの部屋——

ケンは再びベッドに横になった。そしてアルマンの話思い出していた。最愛の女性と親友を失ってしまった男、アルマン・ギルガネス。彼は未だに背中に罪を背負いながら生きているんだとケンは深々と感じた。そして悲惨な過去を持ち合わせているのは自分だけではないんだ、と感じアルマンに一種のつながりのようなものを感じた。

意識はもうろうとし始めケンは深い闇へと落ちていった。

——アルマンの部屋——

アルマンは先ほどと同様にベッドの上に座っていた。しかし、その手には何かが持たれていた。赤い色をしたバンダナ…そう、それは紛れもなくリースのバンダナだった。彼女の遺品でもあるこのバンダナは結局レギオスの元へ渡らなかったのだ。

レギオスはバンダナを手で握り締めながらポツリと独り言を放った。

「リース、君への罪は償うよ。そして約束しよう、もう二度と仲間を死なせたりはしないと！」

戦士たちの夜は永きに渡り続いた。夜明けはまだ来ない……。

アルマン 【四】（後書き）

一部主な登場人物の紹介

くアルフォード王国く

―特殊戦略部隊―

ケン・シュナイダー：第一部の主人公：16歳：男性：紅色の短髪：
黒色の瞳：アルフォード王国の機動歩兵として前線でその自慢の剣
術を巧みに使って活躍していた。その腕が買われアルフォード国王
直属の部隊で特殊戦略部隊、通称『特戦』に配属される。彼が軍に
入隊したのには悲しい過去が関わっている。彼が使用する剣術は天
魔無双流と呼ばれるものでそのあまりに巨大な力のために神にも魔
にもなれると言われている。またその所持する剣もこの世界で流通
している両刃の剣ではなく、片刃の剣、刀である。情に熱い男でこ
の情こそが彼の長所でもあり短所でもある。

アルマン・ギルガネス：隊長：26歳：男性：黒色の中髪：茶色の
瞳：人柄がよく誰にでも好かれる人物。任務のために冷酷になろう
と努力しているがいざとなると人命を優先してしまう。ギルガネス
家の人間で超人的な運動能力を持つ。その運動能力は発射された弾
丸を簡単に避けられるほど。刃物から銃までありとあらゆる武器
を使いこなすエキスパートでもある。【アルフォードの戦神】（も
しくは戦神）という二つ名でディーベルクの兵士に恐れられている。
以前、リースというレギオスの妹と恋人関係にあったが任務中誤っ
て彼女を殺害。これによってレギオスの恨みを買い、親友から敵へ
と変わってしまう。

レイナ・フランク：副隊長：25歳：女性：紫色の長髪：緑色の瞳：隊の中では頼れるお姐さんの存在。狙撃の名手でその集中力は三日間、同じ射撃体勢でいられるらしい。

マック・エイガー：ムードメーカー：20歳：男性：茶色の短髪：青色の瞳。大柄で長身。細かいことは気にしない豪快な性格。基本的にバルカン砲などの重火器を使用して戦うが他にも白兵戦用に大薙刀を使用する。

レオン・マッケイン：天才：17歳：男性：水色の中髪：銀色の瞳：IQ200を超える超天才。言葉数が少なく、無愛想。その頭と魔法で数々の戦いを勝利へと導いてきた。また、ハッキングを得意とし、セキュリティ解除や、情報の奪取なども行う。

ケネス・フロイド：曲者：20歳：男性：黄土色の中髪：黒色の瞳：妙な言葉遣いをするお調子者だが任務の時には隠れた冷酷さを見せることがある。爆弾に関しては確かな腕を持つ。特戦の曲者的存在。

リリス・クラフト：オペレーター：16歳：女性：朱色の中髪：水色の瞳：性格は非常に明るく、特戦のマスコットの存在。彼女の存在が隊員の戦場で受けた心の傷を癒しているのは疑いようがないだろう。オペレーターとしての腕も確かなものを持っている。

―その他の人物―

リース・ザルバン：亡者：18歳：女性：金色の中髪：茶色の瞳：
レギオスの妹にしてアルマンの元恋人。アルマンからもらった赤い
バンダナを常に身に付けている。任務中、誤ってアルマンに射殺さ
れた悲劇の女性。彼女の存在はアルマンとレギオスの関係に多大な
影響を与えている。

↳デューベルク王国↳

―ツイン・バルベルト―

レギオス・ザルバン：赤鬼：26歳：男性：金色の長髪：茶色の瞳：
バルベルトと呼ばれる槍と両刃の斧を合わせたような武器を巧みに
扱う者。性格は非常に冷静でどんな窮地に陥ろうとも理性を失うこ
とはない。唯一、アルマンのことになると感情を表に出す。通称、
【赤鬼】と呼ばれアルフォードの兵士から恐れられている。リース
とは兄妹関係にある。妹を殺したアルマンに復讐心を燃やしている。

安らぎ 【壱】

—— オルフィス・作戦会議室 ——

ツイン・トマホークによる補給部隊強襲を阻止した特戦は、その後も数多くの任務をこなしていた。敵拠点基地への強襲、または潜入。前線における敵防衛ラインへの強行突破。情報操作による敵部隊のかく乱。その他もろもろ……。

そんな多忙な彼らをノリス司令は急ぎよ招集した。何でも大事な話があるとかないとか……その全容はメンバーの誰しもが知らされていないかった。

「司令、今回我々を急遽、招集したのはいかなる理由からでしょうか？何か急を要する任務でも入ったのでありますか？」

皆を代表してアルマンが質問する。司令は一瞬空けるとメンバーの顔を見ながら話し出した。

「まあ、そうせかすな。オッホン、諸君よく聞いてくれ。今から君たちに、とある方からのメッセージを見せる。心して見るように」

ノリスはそういうと懷から一枚のディスクを取り出し、それを中央にあるテーブルに設置してある読取装置にセットした。するとホログラムディスプレイが作動し、立体映像が映し出された。そこには一人の男性が映し出されていた。

「特殊戦略部隊の諸君。始めまして、というべきかな？」

テーブル上に映し出された男を見て彼らは啞然とした。目の前に映し出された男、それはこの国の長にして全ての国民に崇められる者。

現アルフォード王国国王、アルフォー？世その人であった。

「諸君らの活躍は大いに聞かされておる。いや、実にすばらしい。心より感謝する。さて、そんな諸君に私は何らかの形で恩恵を与えたいと思っておったのだが、なかなか思いつかなくてなあ。考えた末、諸君らに一週間の特別休暇を与えることにした。快く受け取ってくれたまえ。では、今後の諸君らの活躍に期待している！」

そついい終わると映像の中のアルフォード国王は彼らの目の前から消えてしまった。

メンバーは予想だになかった人物の登場に気が動転して内容をよく理解していなかった。

その様子を見たノリスはもう一度、彼らに国王からの休暇手当の件を説明した。ケンたちはようやく内容を理解したようで一斉に歓喜した。特に喜んでいたのはマックで、その喜び様はまるで小学生が突如、学校が休校になったという知らせを聞いてはしゃいでいるのと同じ感じだった。

「オッシャアアッ！ 久々の休暇だぜ」

「こら、マック。そんなにはしゃぐんじゃない」

マックのあまりのはしゃぎぶりにアルマンは半ば呆れた様子で苦笑した。しかし、マックほどではなかったがアルマンも一週間という異例の休暇が取れるのを有難く思っていた。

「…一週間も休みをいただけるということはそれなりに何か意味す

ることがあるということですよな？」

メンバーが休暇の知らせに浮かれているとき、レオンが水を指すようにノリスに質問した。彼自身、休暇が取れることに不服はなかったがあまりの異例さに何かある、と感じたのだ。

「さすがだな、レオン。鋭いな。そうだ、この休暇には今後の戦況にかかわる重大な意味がこもっている」

司令が話し出すと同時にメンバーの表情が変わった。司令の表情から見るにどうやらこの休暇が意味する重大さが大きいと判断したためだ。（まあ、小学生気分の大男を除いてだが…）

「この休暇には二つの意味が隠されている。一つは軍内部に於ける我々の明確な位置をはっきりと示すということである。この休暇によって我々はアルフォード軍で特別な存在であり、重宝視されているということを他のアルフォードの兵士に示すことができる。こうすることで今後、我々が任務をこなしていく上で内部からの妨害を防ぐことができ、よりスムーズに任務が果たせる。そしてもう一つはディーベルクに対し、我々の存在を重く見せることにある。そうすることによって我々はディーベルクの兵士に威圧感を与えることができる、特戦という存在そのものが彼らの士気に影響を与えることになる」

司令の説明が終わるとレオンは分かりました、という感じで頭を縦に振った。他のメンバーも内容を理解できたようではや先ほどの浮かれた気分は消え去っていた。（それでもマックだけは現状を維持したままだった…）

説明を終えた後、司令は再度質問がないか彼らに尋ねた。ケンたちは何もありません、といった感じで黙っていた。司令は質問がない

と判断すると会議を終了させ、解散させた。

司令が会議室を後にしようとした時、ケンは思い出したかのように司令に声をかけた。

「司令は休暇をどのように過ごすのですか？ご家族の方とゆっくりされるのですか？」

その質問に対し、司令は少し間をおくと苦笑しながらケンに答えた。

「私は妻も子も持たない一人身だ。何、別に気にしてはおらんよ。それに休暇は国王にフィルス（チェスや将棋のようなもの）の相手をするよう頼まれていてな、暇は持て余してはおらんさ」

そういい終えると司令はケンに背を向け、会議室を後にした。どうやら予約は今日から入っているようだ。歴戦の将ともなれば国王とフィルスをやるほど親密になれるものなのか…ケンは改めて司令のすごさに驚かされた。

「ところでみんなはどうやって休暇を過ごす？」

司令が会議室を後にしたあと、レイナが皆に質問した。彼女は休暇が入ったことはうれしかったのだが突然伝えられたこともあり、どうやって過ごすのか全く考えが浮かばなかったためだ。

その質問に対して真っ先に答えたのは元気一杯の小学生…ではなく二十代にもなって純粋な気持ちを持つお方、マックだった。

「俺はこうパ〱ツと日頃の憂さを晴らすように一週間を過ごすつもりでさあ、姐さんも一緒にどうです？」

その返答に対して即座に口を開いたのはレイナ、ではなく、今やマツクの相方的存在のケネスだった。

「ほーう、パーツとねえ、確かに響きはええがあんさんのことや、要は酒場を転々としながら飲んだくれるっちゅうこっちゃろ？」

ケネスからの強襲にマツクは反撃にでようとしたが返答があまりに彼の考えを射抜いていたため、言葉にならない声を放っていた。

「くだらんなあ、そげん無駄な過ごし方するんやったら、わいを手伝ってくれへんか？」

そういうとケネスはマツクの襟をつかむと強引に引つ張りながら部屋から出て行った。廊下からはマツクが噛み付くような声で叫ぶ声が聞こえてくる。その声は徐々に小さくなり最後は聞こえなくなった。

「レオンはどうする？」

今度はケンがレオンに質問した。彼はどのように休暇を過ごすかについての会議の輪に加わっていなかったが、ゆっくりと本を閉じると立ち上がり、ケンたちのほうへやってきた。

「…そうだな、少し調べたいことがあるからこの機会に済ませておこうかな……」

そう言い終わるとレオンもまた会議室を後にした。残るは4人、そんな中、今度はアルマンが口を開いた。

「おれは少し、行かなければならないところがあるからな。そこに

行つてゆつくり過すよ」

「あら、そう。ならば隊長さん、ワタシも一緒に連れてつてくださる？ 同じ指揮官として色々と話したいこともあるしね」

レイナはそう言うと言アルマンの賛同を聞かずにアルマンの背中を押しながらとつと出て行つてしまった。

会議室にはケンとリリスだけが取り残されていた。

二人だけになった会議室で今度はリリスがケンに休暇の過ごし方を尋ねた。ケンは一瞬考えるようなすぶりを見せたがすぐさま思い出したようにリリスに答えた。

「そうだな。オレは一度、師匠の下へ行つてみようと思う」

「師匠？」

リリスはそのケンの返答を聞いて頭を傾けた。ケンの口から師匠という単語を今まで一度も聞いたことがないからだ。いったい誰のことなのか、とリリスは尋ねるとケンはその師匠について話し出した。

「ああ、師匠というのはオレに剣術を教えてくれた人のことだよ。話したことなかったけ？ 彼はナルミダに住んでいてね。ちょうど刀が傷ついてしまったことだし一度、顔を見せにいいかな、てね」

ケンの説明を聞き終えたリリスはその師匠が住んでいる場所を聞いて驚いた。何故ならその都市に彼女の両親が住んでいたからだ。そこでリリスはちょうど良かった、という感じでケンと一緒にナルミダに連れてつてもらふようお願いした。彼女も今両親に会いに行こうかと考えていたところだったのだ。

リリスの頼みに断る理由がなかったケンは彼女の頼みを承諾し、一時間後に寄宿舍の前に集合することにした。（なお、この寄宿舍というのは彼ら特戦専用の寄宿舍を指す）

——アルフォード軍兵器開発局——

軍本部の司令部がある建物を出て東に2キロほど行ったところに巨大な白い建物が存在する。建物は4階建てで上空から見ると十字を切ったような形をしている。周りには格納庫が4つほど存在し、その中には様々な戦闘機や、機動戦車の試作機が並べてある。

ここはアルフォード軍管轄の兵器開発局である。ここでは日々、ディーベルクに対抗するための新兵器が多く開発されている。アルフォードの兵器の原型は全てここで生まれ、北に数キロ離れた兵器工場で大量生産されるのだ。

その開発局の前に一台のジープが停まった。中には二人の男が乗っている。ケネスとマックその二人である。

彼らは窓から顔をだし、開発局の建物を見上げるとジープを再び発進させ、駐車場へと向かった。

二人は車から降りるとすぐさま入り口へと向かった。中に入るとケネスは行き先を知っているかのようにテクテク歩いていく。

その途中、マックがここに来る前から言いたくてたまらなかった質問を前に行くケネスにぶつけた。

「おいおい、待て待て。何も教えずにここまで連れてきやつて。そもそもいつたい何なんだここは？ 何しにここへ来たんだ？」

マックの率直な質問に対し、ケネスはいつものニコニコ顔でマッ

クのほうを振り向くと少し、彼を小ばかにするように答えた。

「あんさん、さっき表札見らんかったんか？ここは兵器開発局や。こげなところ来たんやから新兵器造るに決まっとるやないか」

その答えに対し、マツクはプチツときたらしく、怒鳴り散らかすように言い放った。

「てめあが勝手に連れてきたんだろが！んなこと知るかよ！」

「あつ、そでしたね。こりゃ失敬」

そういうとケネスはセンスで自分の頭をコツく素振りを見せた。そしてマツクの怒りを口先で丸く治めると彼をとある一室へと案内した。中に入ってみると部屋には様々な材料と工具が置かれていた。奥行きは広く、その奥にはもう一つの部屋へとつながる扉がある。その扉の向こうには実際に造った兵器をすぐに試せる、広さにして百平方メートルの実験室があった。

「どやツ、すごいやろ？わいらの権限で一週間この部屋は貸切や。好きなだけ材料使つてええらしいで。ほな、早速始めようか」

ケネスはそう言うときささと作業に取り掛かった。マツクも内容をはつきりとは理解していなかったが仕方なく作業を手伝おうことにした。

「で、具体的に何を造るんだ？」

ケネスはその部屋にあるPCに持ってきたディスクを入れるとマツクにこれから造ろうとするものの設計図を見せた。だがそれを見

ても本人は分かった様子ではなかったので仕方なく説明してやることにした。

「ほんまにあんさんのバカさ加減には驚かされるはあ…まあ、無理もないじゃないけどな。こいつはわいが使用する特殊弾を遠くまで射出するためのシューターや」

そついい終えるとケネスはマツクに分かったんやったらさつさと作業にかかろうや、といった具合にマツクと作業を始めた。その光景はゴリラに曲芸を教えている調教師とそのゴリラのようだった。

安らぎ 【弐】

—— 寄宿舍前 ——

「ごめん、待った？」

ほんわかした声がケンの背中から聞こえた。振り向いてみるとリスが自分の部屋からポーチを片手に急いで駆け出てきたようだ。その額からは少々、汗が浮かんできていた。

「いや、オレもさっきここに来たばかりさ。そんなに急ぐことなかったのに」

ケンは笑いながら息を切らすリスを見る。

彼ら二人私服姿であった。ケンは、上は白シャツに革ジャン、下はジーンズにブーツといった感じだ。その首には銀色の竜の形をした首飾りを下げていた。

一方のリスは、上はノースリーブのセーター、下はスカートにスニーカーといった感じだ。

初めて見るリスの私服姿にケンは新鮮さを感じた。いつもは軍服に身を固めている彼女もまだ十六の女の子なんだとケンは改めて思い知らされた。

「ん？ 何か私の顔についている？」

リスの問いかけにはととするケン。どうやら自分が思っている以上に彼女を見つめていたらしい。少し、頬を赤らめながらケンは照れ笑いをしてごまかした。

ケン は彼女を近くにある格納庫へと連れて行った。その格納庫の片隅には真っ赤なエアバイクが置いてあった。それはケンの所有物だった。ずっと乗っていなかった割にはほこりなどがかかっている。それもそうだろう、ケンは暇を見つけてはこのエアバイクを整備していたのだから。

ケンはエアバイクのハンドルを握るとエンジンをかけた。どうやら現役の時と全く変わっていないようだ、いい音を出している。

ケンはリリスに乗るように促すと彼女は後部座席に座り、腕を彼の腹元に回した。

けたたましいエンジン音が鳴ると同時エアバイクは疾走し出した。

——デルミアのとある墓地——

死者が眠る場所だというのに辺りは緑一色に染まっていた。芝生を踏みながら一人の男と女が現れる。男は上下、黒のスーツに黒の革靴を履いている。男の左手には白の花束が持たれている。対する女のほうはベージュのベルトの付いた白のワンピースに白のハイヒールといった感じだ。彼らは目的の墓の前まで来ると立ち止まり、男は持つてきた花をささげた。そして手に胸を当てると目を閉じ、祈りをささげた。一時のあいだ沈黙が続いた。

アルマンは祈りを終えると目を開くと、連れの女性が彼に声をかけた。

「アルマン、この墓がそうなの？」

「ああ、そうだよ、レイナ。この下におれが殺した女性が眠っている。以前は兵士墓地の下に眠っていたのだが、やはり故郷の土で眠

るのが良いと思ってね。一年前にこちらへ移したのさ」

そう話すアルマンの表情はどこか暗い。それは墓地が持つ独特の雰囲気もあったかもしれないがやはり、自分が殺してしまった人の墓の前にいるということが彼の心を暗くしているに違いない。彼女はそんなアルマンがどこかかわいそうで、何とかしてやりたいと思い、自分もその墓に祈りをささげることにした。

レイナが祈り終わると二人はその墓を後にした。墓を後にする前にアルマンは独り言をいうようにしてその墓に向かって言葉を投げかけていた。

「リースよ、お前はまだおれを恨んでいるのか？ おれがお前の兄に殺されるのを望んでいるのか？ 確かにお前を殺したのはおれの罪だ。だが、もう少し待ってくれ。おれにはやらなければならないことができたんだ……」

レイナたちが去っていった後も墓は誰を待っているのでもなくただ沈黙を守り続けていた。死者は何も語りはしない……。

——中立国家ナミル・解放都市ナルミダ——

荒野を駆け抜けること一時間。荒野にたたずむ一つの都市がケンたちの目の前に現れた。その名は解放都市ナルミダ。このミラム大陸に存在する第三の国家、ナミル。この国家の歴史は最も古いとされかつ、その領地面積や人口、軍事力といった情報が一切不明という謎めいた国である。しかし、彼らは昔から中立国家を名乗り、他二国に干渉しないことを条件に二国の自国への干渉も禁じている。

その代わり特例として三国間の境界線に位置するナルミダを開放都市とし、ナミルの国民でないものでも自由に行き来することを許可した。（これを理由にアルフォードとディーベルクはこの都市から半径五十キロメートルの土地では一切交戦しないことを約束した。）ミラムの歴史はかなり長いものであるが今でアルフォードとディーベルクが約束を守りナミルに一切干渉しなかったのにはれっきとした理由が存在する。まず一つはこのナミルという国の力が未だに判明していないということである。そしてもう一つの理由にして最大の理由がこの解放都市を見て取って分かることにある。ナミルの文明レベルが他二国より断然高いのである。このナルミダは山と山の間に存在する都市でナミルへの侵入を防ぐための防壁の役割も持つ。都市は円形の防壁で囲まれており、その高さは百メートル以上である。アルフォードもそれと同じほどの高さを持つ防壁の備わった基地は存在するがそれは元々、超文明が造ったとされるもので彼らの文明の力量では難しいところである。その上、その防壁からは目に見えないバリアが出ており、そのバリアが空からの攻撃を防ぐ役割を持っている。ちなみにバリアという技術は他二国で未だに研究中ではあるが実現には至っていない。

ケンたちは防壁のゲートに近づくとそこに女性ののような機械声の指示を受け、身分証明書を取り付けてあるカメラに向けて見せた。一応、誰でも行き来することはできるといったが中に入るためにはゲートで身分を証明しなければならない。

身分を確認し終わるとケンたちの目の前でゲートがゆっくりと開きだした。

ケンたちは中に入るとそこにはたくさん的高層ビルなどの様々な建物がたたずんでいた。一見人工物が多いように見えるが木々などの自然も多く見られ、人工物と自然が見事に調和を保っていた。

「相変わらずだけど、この町並みはすごいなあ。今、戦争が合っているなんて驚きだぜ」

ケンは久しぶりに見るこの都市の風景に思わず感動を覚えた。彼が出て行ってからこの都市の風景がそれほど変わったわけではなかったが、ナルミダはそれほど他の都市とは一線を引くほど発展していたのだ。

ナルミダの風景を見て感動しているケンをコツくようにしてリリースは早く自分の家に連れて行くように促した。リリースも久しぶりに見るナルミダの景色には感動したが昔からこの都市に住んでいた彼女はケンほど感動を覚えなかった。ケンはそんなリリースにせかされる様にしてリリースの実家へとエアバイクを走らせた。

数分後——ケンはリリースの道案内の下、無事にリリースの両親が住む家へとたどり着いた。家は全体的に白を基調としており、周りの家同様、角ばった近未来的な形をしていた。

リリースは玄関にあるインターホンを押すと誰かが応答した。そして数秒後、玄関の扉が開くと中から彼女の両親と思われる二人の男女が出てきた。

「お帰り、リリース。元気にしていたかい？」

「ただいま、パパ、ママ。会いたかったよー！」

そういうとリリースは声を掛けた父へ駆け寄ると彼の胸元に抱きついた。そんなリリースをご両親は笑いながら彼女の頭を撫でている。その光景を見たケンはとてもアットホームな家族だと感じた。リリースの行動は少し、大げさに見られるかもしれないが実はそれほどもない。ナミル王国は先ほども言ったが他二国との干渉を禁じている。それはこの解放都市も例外でない。ナルミダの空を覆うバリアは外からの攻撃を防ぐためのものでもあるが外部との連絡を妨害する働きもしているため、リリースは今まで両親と連絡をすることができなかったのだ。この説明を聞けば穴がちに彼女の行動が大げさで

ないことは理解できることだろう。

両親とのハグを終えたリリスは大分落ち着いたらしく、両親の目は娘のほうからケンのほうへ向けられた。

「ところで遅くなってしまったが君は…どちら様かな？　もしかして娘の彼氏かい？」

「ちっ違うわよ！？　彼はケン・シュナイダー。同じ部隊で働く仲間よ」

ケンが彼の発言を訂正しようとする前に即座に反論したのは父親の腕をつかんでいるリリスだった。

彼女は頬を赤らめながら必死に彼氏という単語を否定している。あまりに必死に否定するのでケンは少々ショックを受けていた。

（そんなに否定しなくても……）

ケンの彼氏疑惑が無事（？）解決するとご両親は彼らを家の中に招き、昼食をご馳走してくれた。どうやらリリスパパの手製の料理であるらしく、何の連絡も入れてはいなかったというのに一時間もしないうちにケンたちの目の前にフルコースが出てきた。その味はどことなく温かみを感じるものだった。まさにおふくろの味ならぬ、おやじの味だった。

食事を終わるとケンはご両親にお礼を言い、リリスとともに家の後にした。

向かうは自分に剣を教えてくれた人の下へ。ケンはリリスが乗ったことを確認するとエアバイクのエンジンを吹かし、師匠の家へと向かった。

「ところでケンの師匠ってどんな人なの？」

師匠の家へと向かう途中、リリスが声を張りながらケンに尋ねた。ケンは苦笑すると一言でその質問の答えを返した。

「会えば分かるさ」

リリスはその答えになっっていない返事に対して述べようと思っていたがケンの意味ありげな表情を読み取ってそれ以上は何も尋ねなかった。

（まあ、ケンがそう言うのなら会うまでのお楽しみってことにしておこう…）

ケンは住宅街を抜けると、更にエアバイクを加速させ、山のほうへと向かった。

——アルフォード軍・情報局——

メンバーと別れたあとレオンはとある所へ足を運ばせていた。彼のいるところは軍本部と一本の廊下で繋がっている建物、情報局だ。その名の通り、ここには国内における全ての情報や、諜報員が命をかけて手に入れてきた敵国の情報が管理されている。

そんなところにレオンはいったい何をしにきたのか？それは彼が先ほど述べていた調べ物にある。

レオンは建物内の目的の情報員が働く部署までたどり着くと、彼のいる机の前まで足を進めた。

男はレオンに向かってくるレオンに気づいておらず、黙々と机に

山積みされている書類をまとめていた。

「あいかわらず多忙そうだな…久しぶり、リット」

リットと呼ばれた男はやっとレオンの気配に気づき、声のしたほうへ体を向けた。リット・ケンバース――階級は少尉でこの情報局で働く、丸渕メガネが特徴のデスクワークな軍人だ。体形はやや痩せており、目の下には徹夜付けであることが分かるクマができている。彼はレオンと同期で、その付き合いは軍事学校時から続いている。最近はこちらも忙しく、顔を合わすことがなかったがこの機会を利用してレオンはこの親友に顔出しに来ていたのだ。

「お前がわざわざ顔を見せに来るとは…はは、ん、さては何かやっかいごとを持ってきたな？」

そういう彼はレオンの顔を見ながら微笑んでいる。どうやら彼も久々にレオンに会えてうれしいようだ。リットはレオンに用件を尋ねようとすると、レオンは場所を移そうと提案した。その言葉でまますます彼が持ってきたやつかいごとは相当なものだと内心、判断していた。

彼らは同じ階にある誰も使っていない資料室に入るとレオンは扉に鍵を掛け、ゆっくりと口を開いた。

「実は君を信じて頼みたいことがあるんだ。このファイルに載っている兵士の死因について書かれたカルテと彼女が死んだとされる事件の記録書類が欲しい…」

そう言いながらレオンはファイルをリットに渡すと彼はその中から一枚の資料を取り出した。そこには“リース・ザルバン少尉”と記されていた。

安らぎ 【参】

——アルベルト山脈——

ナルミダの市街を抜け、向かうこと数分、森林の中に一軒の屋敷が現れた。

屋敷の構造は、柱は木造、屋根はわらぶき屋根というまるで自分たちが何百年も前にタイムスリップしたかのような錯覚を感じさせるものだった。

屋敷の前にケンはエアバイクを停めると屋敷の玄関へと向かった。玄関には鍵が掛かっておらず、中に人の気配は感じられなかった。念のため、「ごめんください」と叫んでみたがやはり返事はなかった。

仕方なく、ケンたちは屋敷の裏側へと向かった。裏側へと回ってみるとそこには大きな庭があった。庭は広さにしてテニスコート四つ分といった感じだ。庭の左側にはわらと竹でできた力カシが何体もあり、中央には巨大な岩の塊が置いてある。そして右側には何故このようなものがあるのか、風景にまったく溶け込めていない機関銃がおいてある。奥のほうには森への入り口があった。

ケンたちは師匠を探しにその森へと向かおうと足を運ばせた。

突然、ケンは後方からの殺気を感じた。すぐさま体を殺気のほうへと向けると何か光るものがケン目掛けて飛んできた。それは三本の短刀だった。ケンはすかさず腰に挿した刀の柄に手を掛けるとすばやく抜刀し、向かってくる短刀を地面へと叩き落した。その時間、たったの二秒。

リリスは目の前で起きた出来事を全く理解できないでいた。ケンがいきなり後ろへ振り返ったかと思うと、突然、金属同士がぶつかり合う音がして気がつくとケンが刀を手に持っていて、彼の足元に

は短刀が落ちていた、といった感じだ。別に彼女は格別にトロいというわけではない。それだけこの出来事が凡人にとってもものすごく速い出来事なのだ。

「全く、全て急所を狙って投げるなんて、愛弟子を殺す気ですか？」

「ほほ、腕は落ちとらんようじゃの」

屋敷の影から現れたその老人はとても愉快そうに笑いながらケンたちの方へ杖をつきながら近づいてきた。

「お久しぶりです。全く相変わらずですね」

ケンはその老人を見ると苦笑しながら挨拶を交わした。どうやらこの老人が例の師匠のようだ。彼の名はゴン・クリスト——ケンに剣術を教えた師にして最強の剣技、天魔無双流の生みの親でもある。その腕は確かなもので五十八歳となった今でもその腕は衰えておらず、髪は真っ白ではあるが心身ともに健康体である。しかし、そのほんわかした表情からはどう見てもどこにでもいそうな優しいおじいちゃんという感じである。

彼はニコニコしながらケンの顔を見ると、「まあ、茶でも飲まなかね」と言って彼らを家の中へと誘導した。

また玄関へと戻ってきたケンたちは老人に勧められるまま中へ上がろうとした。すると突然、ケンの顔の前にゴンの杖が飛んできた。ケンはすかさず頭を動かして杖を回避する。しかし、ゴンの手にはまだ杖が持たれている。すかさず彼はケンのわき腹目掛けて杖を横に振る。

ガキーンッ！

金属と金属がぶつかり合う、鈍い音が響き渡る。よく見るとケンが抜刀してゴンの杖がわき腹に当たるのを防いでいた。しかし、何故金属音が聞こえたのか。よく見ると老人の持つ杖は柄の部分から下が刃と化している。そう、彼の杖は仕込みだったのだ。

間一髪のところでもゴンの刃を止めたケンは冷や汗を掻きながらあきれた様子で我が師を見て言い放った。

「だ・か・ら…本当にシャレになりませんで…これ…」

「ほほ、いかなる時でも油断は禁物と教えたはずじゃよ、ケン。チャメ氣じゃよ、チャメ氣」

老人は笑いながら地面に落ちた鞘の部分拾うと刃を収めた。そして愉快そうに家へと入っていった。

（チャメ氣、て…本気で胴体真つ二つにしようとしていたくせに…）

ケンは内心で先ほどのことを愚痴りながら渋々と家の中へと入っていった。そんなケンを見てリリスは彼に悪いと思いながらもクスクスと笑っていた。

屋敷の中は外よりも涼しく、木々の匂いが心を落ち着かせていた。床は前面、畳張りで扉は全てふすまで障子が張られていた。冬は部屋を仕切るふすまは閉じられているのだろうが今はそろそろ夏が来ようとしているので全て開かれていた。そのため内部は開放的で、実際の大きさよりも大きく感じられた。

今へと連れて来られたケンたちは少し待つように言われ、ちゃぶ台の周りに腰を下ろした。ゴンが台所から戻ってくるとその手にはお盆が持たれ、その上にはお茶の入った湯飲みと菓子の入った皿が置かれていた。

老人はちやぶ台の中央に菓子置き、湯飲みをケンたちに配った。そして自分もやぶ台の前に腰を下ろすと自分の茶をすすり、一息ついた。そして客である彼らに勧める前に中央の皿から砂糖菓子を取って口へと放り込んだ。どう見ても彼が最もくつろいでいる。（まあ、二度も奇襲されたのであれば、くつろがないで当然だろう…）

「ところでケン、お前はどのようにして戻ってきたのじゃ？　今は戦時中じゃろ？」

老人は素朴な疑問を彼にぶつけると再び中央の皿へと手をのばした。そして二度目にしてやっとリリースたちに菓子を勧めた。

ケンはその質問に対し、事情を説明すると刀の件を思い出し、ゴンに修理を頼んだ。すると彼はケンに刀を見せるように言い、彼からハガネを受け取った。そして刀を鞘から抜くとまじまじと刃を眺めた。彼の表情が曇る。ゴンはハガネを鞘に戻すとそれを自分の右側に置くとゆっくりと口を開いた。

「残念じゃが…こいつは難しいなあ。芯にひびが入っておる。こいつはもはや瀕死の状態じゃ」

その言葉にケンは耳を疑った。ハガネの芯にひびがある？　瀕死の状態で修復は難しい？　彼は事の重大さに気づかされ、緊迫した赴きで師を見つめた。だがゴンはそんなケンの心配をよそに次のように切り出した。

「まあ、どの道そろそろこいつとはお別れしないといけないとは思っていたのじゃがな…今のお前さんの腕じゃ、もはやこいつは付いていけんよ。ほほ、安心せえ…実はちょうどお前に新しい刀を譲ろうと思っていたところなのじゃよ」

その言葉にケンは安堵のため息をついた。ケンは一瞬にして自分が十歳老けた気がした。それほど刀を失うということは彼にとっては大いなのだ。だが、ゴンはそんな彼をまた老けさせるような一言を放った。

「じゃが…タダでやるというわけにはいかん」

「はっ？」

ケンはまたしても自分の耳を疑った。そして自分の師がいったい何を言い出すのか、と不安でいっぱいになった。

ゴンは笑みを浮かべながら湯のみに残ったお茶を飲み干すと再び口を開いた。

「なぐに、大したことじゃない。ケン、お前はまだ修行の途中じゃったなあ、竜の太刀を完成させておらんじやろ。そこでだ、一週間でお前が残りの【火竜】と【風竜】を習得できたら新しい刀をくれてやろう…」

ケンはその内容にあっけにと取られていた。一つはあまりに以外な条件だったため、もう一つは竜の太刀にまだ自分が覚えていない技があったこと、である。

ようやく頭の整理が終わるとケンは喜びの気持ちでいっぱいだった。その中には新たな刀が手に入ることともあったが、やはり一番の喜びは新しい技を身に付けることができるということだ。新技を習得するということはそれだけ自分自身も強くなることを意味する。

強さは彼が最も欲しいものであり、また必要なものでもあった。何故なら強さがなければ何も護ることができないということを『ミスバルの悲劇』で十分に思い知らされたからである。

ケンは勢いよく立ち上がると師匠にすぐに始めるように頼んだ。ゴンはやれやれ、といった感じではあったがゴンの強い決心の表情を見ると裏庭に来るように言った。

ケンたちはゴンに言われた通り彼の後ろに付いていきながら裏庭へと向かった。

裏庭に到着すると老人はまず今まで覚えた技のおさらいをするといった。そして中央にある岩へと向かうとまず初めに【地竜】の復習から始めるといった。

ケンは修行の間、ゴンに貸してもらった刀を抜くと、巨大な岩のほうに体を向け、刃を後方に向け、刀を腰の位置へと持ってきた。そして深く深呼吸をすると精神を刃先へと集中させた。

次の瞬間、ケンは思い切り地面に踏み込むと、岩目掛けて刀を上へと振り上げた。すると巨大な岩はあたかも発泡スチロールで出来ているかのように上空へと吹き飛んだ。岩は高さにして十メートルまで上昇し、再び地面へと落ちてきた。

リリースは目の前で起きた現象に自分の目を疑った。人の力でこんなに大きな岩が浮いた。しかも十メートルも、だ。リリースは必死に今起きたことを理解しようとした。がすぐに無理だと思い深く考えるのをやめた。

そんなリリースの気など気にもせず、ゴンは次に【水竜】の確認に入るといい、何故か機関銃のほうへと彼らを連れて行った。そしてケンは機関銃からさらに奥へと向かい、森林の前で足を止めた。そして機関銃と向き合うようにして刀を中段に構えた。

「準備のほうはよいな…では始めるぞ」

そういうとゴンは座席に座り、機関銃の標準をケンに合わせた。そして何の躊躇もなく引き金を引いた。

ズガガガガガ………！！

機関銃の銃口から無数の弾が次々に放たれていく。リリースはそのけたたましい騒音に、たまらず手で耳を押さえた。しかし、そんな騒音も目の前にある光景によって一瞬にして掻き消されてしまった。弾は確かにケンのほうへと向かっていった。だが彼の体に触れる前に刀によって払い落とされている。その動きは水が流れるようにならから美しく、見るものを圧倒するものだった。リリースは改めてケンという人物が只ならぬ剣士であることを認識するとともに一層、彼への思いを強めていた。

全ての弾を撃ち終えるころにはケンの周りには無数の弾の山が出来るようになっていた。

ケンが全ての弾を払い落として戻ってくるとゴンは彼に森へと向かうよう指示した。ケンはその意図が読めなかったが次の修行へと移るということは分かっていたので黙って森へと向かった。

しばらく森の中を進むとケンたちは広葉樹が広がる景色の中に竹林紛れ込んでいることに気づいた。竹林は森の道の延長線上にあり、そこで道は閉ざされていた。

竹林の前までたどり着くと、ゴンはケンが質問する前に修行の内容を説明し出した。

「では修行に入りたいと思う。まずは【火竜】からじゃ。火竜は地竜と水竜を合わせたような技でなあ。その攻撃は燃え盛る炎のように熱く、激しい。要は地竜のように威力があり、水竜のように素早いということじゃ。まあ、見ておれ」

そういうと老人は竹林のほうに体を向け、抜刀し、中段に構えた。そして精神を研ぎ澄ますと竹林目掛けて突進した。

一瞬の出来事だった。彼が突っ込んだ竹林は次々と切り倒され、老人の進んだ道を形成していた。それは何とも見事な早業であった。リリースは思わず拍手せずにはいられなかった。それほどまでにゴ

ンの放った火竜はすごいものだったのだ。

ケンもリリスほどではなかったがその表情は驚愕の色に染まっていた。そして改めて師匠の凄さに感銘を覚えていた。ケンは自分もいち早く火竜を習得したいと思い、ゴンに修行の内容を尋ねた。するとゴンはケンの眼を見ながらニヤリと笑い、その内容を告げた。

「ケン、お前はこの十キロに及ぶ竹林を全て切り倒し、三日以内に道を切り開いておいてくれ。それが修行の内容だ」

「はいはい分かりました、道を開けば……って、え、エエエ……
ー?!」

彼の地獄の日々はまだ始まったばかりである……………。

安らぎ 【四】

――兵器開発局・研究室――

「ん、あかん。どうしても上手くいかん」

ケネスは製作中の兵器と睨めっこしながら頭を抱えていた。製作に入って早五時間、順調かに見えた兵器開発に突如、問題が発生したのだ。

彼が製作しているシューターの形はグレネードランチャーにそっくりであった。その仕組みは兵器内の空気を圧縮して特殊弾を遠くへ飛ばすというものであった。問題はその圧縮装置にあった。装置が上手く安定せず、弾がまともに飛ばないのだ。

ケネスはあれやこれやと考えてはみたがやはり名案は浮かばず、途方に暮れていた。

そんな彼の耳元にやかましくいびきが聞こえてきた。よく見ると隣にいたはずのマックがパイプイスに掛けたまま気持ちよさそうに寝ている。ケネスはやれやれといった様子でマックの頭上に試作品の特殊弾を放り投げた。弾はマックの頭上で豪快に破裂すると中から黄色い粘液が出てきた。粘液は見事、マックの顔面にかかった。

数秒後、マックは勢いよく起き上がるともがき苦しむように悲鳴を上げた。

「ギャアアア！ 何か顔にネバネバしたものがくっついてやがる
！！ しかも全く取れねえ！！」

「お、やっと起きなはったか。ああ、そいつを無理にはがさんぼうがええで。皮膚ごと持っていかれるさかい」

マツクは犯人がケネスと分かると顔を真っ赤にしてすぐに顔に付着したものを取るように命令した。しかし、ケネスは意地悪くわざとその申し出を無視し、作業を続けた。そしてふと思いついたかのように次のように忠告した。

「あ、そや。そいつ、はよ取ったほうがええで。十分以内にこの液体を使って取らないと一生付いたままになるから。ま、別にそのままでも良いんならワイは一向に構わんのやけどな」

その一言に先ほどまで怒り狂っていたマツクは一瞬にして小さくなり、ケネスの前に土下座した。

ケネスはその様子を面白がりながらマツクに中和液を渡した。マツクはそれを強引に取ると急いで洗面台へと向かった。

「ふう、危ういところだったぜ…。おい、ケネス、この野郎。てめえ、あと少して俺の美貌な顔が醜くなるところじゃねえか！」

「いや、そんなに大差ないやろ。むしろ、あのままのほうがマシだったかもしれへんで」

全くといって反省したように見えないケネスにマツクは再び怒りだし、研究室内で追いかけあつこを始めたその時、たまたま通りかかった研究員の女性が中から聞こえてくる騒音に何事かと思い、扉を開けた。

彼女の眼にその光景は男が二人、楽しそうに追いかけていているという危ないものに見えた。彼女は見てはいけないものを見てしまったと勘違いし、勢いよく扉を閉めると即座にその場を去っていった。

「ん？　今、誰か扉のところにおらんやったか？」

「あ？　んなわけねえだろ！　話をそらすんじゃない！」

その後、兵器開発局にて「二人の男が研究室を貸し切ってイチヤついていた」という噂が広まったことなどこの時の彼らは知る由もない……。

——ゴンの屋敷——

ケンが修行を始めるとゴンはリリスを連れてさつさと屋敷へと戻り、再び居間で茶菓子を食べながらくつろいでいた。外の森からは鳥たちのさえずる声が心地よい風とともに部屋へと流れてくる。それはなんとも風情があり、心が癒されるものだった。

そんな空間で彼らはお茶をすすりながら、昔話に花を咲かせていた。もはや、二人の頭の中にはケンのことなどこれっぽっちも入っていないかった。

「…それで、ゴンさんはどうやって相手を打ち負かしたのですか？」

リリスはゴンが語る武勇伝に心が惹かれていた。くどいようだが彼女の頭の中にはケンへの心配などこれっぽっちもない、というかその存在そのものが消え去っている。

リリスが関心そうに聞くもので、ゴンも調子に乗って手取り足取りを使いながら話を盛り上げていた。何度もいうが彼もまた、愛弟子が今、地獄を見ていることなどすっかり忘れてしまっている。

彼の武勇伝は陽が落ちるまで続いた……。

一方そのころ、ケンはというと相変わらず竹林と格闘をしていた。この数時間というもののケンは眼のあたりにする竹を斬って斬って斬りまくっていた。ふと空を見てみると既に陽は沈みかけている。ケンは少し、休憩しようと思い、大の字に寝転がった。体の疲労は思った以上のもので、汗は体のいたるところから噴出している。ケンはその状態のまま今まで斬り倒した竹の数を数えてみた。その数、ざっと三百といったところだ。しかし、距離に換算すると彼はまだ一キロも進んでいないことになる。

ケンは深々と深呼吸をしながら呼吸を整えつつ、このままでは、とてもじゃないが三日で全ての竹を斬り倒すなど不可能だと感じた。

「はあ、はあ。いったいどうすりやいいんだ？」

ケンは必死に考えようとしたがあまりの疲労感に思考が回らなかった。

少し、落ち着くと彼は師匠から修行に関する詳細が書かれた紙を渡されていることに気づく。彼はズボンの後ろポケットからその紙を取り出すとさっそく内容を見てみることにした。そこには次のように書かれていた。

修行における三つの約束

一、修行には正々堂々と望むこと。

一、上手くいかなくても刀のせいにはしないこと。

一、修行が一段落尽くまで屋敷には戻ってこないこと。

尚、これら一つでも守れなかった場合、失格と見なし、リリスちゃんにお前の人には知られたくない恥づかしい

秘密（例えばお前が大事に机の引き出しに入れていたちよつと過激な雑誌を夜な夜な愛読していたこととか）を

バラすのでそのつもりで♪^^

「……何だつてええー！ー！！」

ケンは修行が終わるまで森で自給自足の生活をしなければならぬということにも衝撃を受けたが、師匠が当時、自分がばれないように必死に隠していた雑誌のことを知っていたという事実には彼の頭は一杯になっていた。

（ということはあのことも当然ばれているということ……）

ケンは色々と頭の中を模索しながら他にも何かばれていないか確認してみた。そうするとほとんどのことが確実にばれていることが判明した。ケンはその事実には愕然とし、もう少しちゃんと隠しておけばよかったと心底、後悔した。

ケンは上体を起こす気力も起きず、ただただ深くため息をつくばかりであった。

そんな彼の気なども知らずにゴンとリリスは夜空に浮かぶ満天の星空を眺めながら優雅に食事を取っていた。

こうして休暇の初日目はさまざまな思いと共に過ぎ去っていくのであった……………。

——デルミア・国立公園——

木々は生い茂り、心地よい風にその枝を揺らしている。一面には芝生が広がっており、何組もの家族連れが和気藹々と昼食を取って

いる。

中央にある噴水近くのベンチからその光景を眺めていたアルマンは一瞬、今が戦時中であることを忘れてしまった。

今日は休暇の三日目。時間帯にしてちょうど昼ごろであり、辺りに家族連れが多いのは今日が国民にとっても休日だからである。

アルマンたちは初日と二日目は町で買い物を楽しんだので（といっても実際のところはレイナだけが買い物を楽しみ、アルマンはそのレイナの買った品を持たされていたのだが…）今日は公園でのんびりすることにした。

今日の空は雲ひとつなく、まさにピクニック日和だ。アルマンは大きく背伸びをしながら、こんなのかな時間過ごしたのはいい、たい何年ぶりだろうかと考えた。それだけ今までの彼の人生は切羽詰ったものだったのだ。

「それにしてもここは良い町ね。とても心が癒えるわ」

平和な光景を眺めながら言うレイナの表情はとても澄んでいて、いつも以上に美しく見えた。アルマンはそんな彼女を見ながら今の時、何千何万という男がこんなにも美しい女性という自分を妬んでいるんだなあ、と深く感じていた。

彼女はそのアダルトチックな風格から軍内でも年上、年下問わず人気があり、話しによれば彼女は月に十回以上は男性からのお誘いがあったそうだ。（全て丁重に断ったそうだが…）それほどまでにレイナという女性は魅力的なのだ。

「この町はね、昔から争いごとがない平和な町だった。今でも大きな事件が起きたりしないのどかな町さ。あいつらも幼いころはよくこの公園に来て遊んでいたそうだ」

アルマンは何気なくこの町の説明をしようとした。だが、その言

葉の中には必ず彼らザルバン兄妹が出てくる。レイナはそのことを心の底から心配した。彼は未だに過去に囚われた人なのだ、何とかしてやりたい……。彼女の気持ちはこの町に来てますます強くなる一方だった。思えば、これほどまで他人のことで悩んだことはあつただろうか？レイナはふとそんなことを考えた。その答えはノー、だった。彼女はいつのまにかこのアルマンという男性に惹かれていたのだ。人として、女として……。だが、当の本人はそのことに気がついていなかった。今の彼女はただ、彼のことが心配でならないという気持ちで一杯だった。

二人の男と女が惹かれるにはまだ時間が必要だった……………。

——ゴンの屋敷——

修行を始めて三日目の朝、ゴンとリリスはケンの様子を見に行くことにした。

朝の空気は一段と新鮮で、まだ眠気の残っていた体を起こしてくれる。さて竹林のあるところまでたどり着くとリリスたちは三日前と今日とでは全く景色が違ふことに気がついた。竹林によって途絶えていた道が真つ直ぐ奥へと伸びていたのだ。

リリスたちはその新しい道を進むことにした。道といつても足元にはまだ竹の根元が残っており、リリスはそれに何回か足を取られそうになった。

進むこと約一時間、目の前に出口が見えてきた。するとそこには一人の青年が彼らのほうに手を振りながら立っていた。ケンだった。彼は見事、三日以内で全ての竹林を斬り倒して見せたのだ。その姿は朝陽によって輝いており、人一倍たくましくなったような気がした。

リリスはケンの元へと駆け寄ると彼の手を取って共に修行を達成したことを喜び合った。

そんな二人のはしゃいでいる姿を見て、ゴンは若いつていうのは良いねえ、としみじみと思いながら微笑んだ。

ケンたちはようやく気持ちの高揚が収まると自分たちを羨ましそうに眺める老人の眼に気づき、頬を赤らめながらお互いの顔を見合い、笑った。

ケンはゴン師匠の下へ駆け寄ると彼に修行の成果を見てくれるよう頼んだ。

ケンは早速、横に倒れている竹の山から一本の竹を手にとるとそれを三十センチほどの大きさに切り分け、上空へと放り投げた。そして手を刀の柄にやると精神を刀身へと集中させた。放り投げられた竹は見る見るうちに降下してきてケンの頭の位置まで降りてきた。

「天魔無双流く竜の太刀く奥義、火竜！！」

それは一瞬の出来事だった。ケンの掛け声が聞こえたかと思うと竹の割れる音が聞こえ、地面に落ちるときには竹は全て縦に割れていた。

リリスは目をパチクリとさせながら今一度目の前で起きた現象を何度も再生していた。しかし、それでもやはり何が起きたのかさっぱりであった。

ゴンはケンと目を合わせると軽くうなずいてみせた。どうやら合格のようだ。ケンは再びリリスの手を取ると体全体で喜びを表した。今度のリリスは目の前で起こったことが理解できなかったので動揺していた。ケンはそんなリリスにお構いなしといった感じ」で飛び跳ねていた。

「ほほ、はしゃぐにはまだ早いぞ、ケン。まだ、お前さんには【風竜】が残されているのじゃよ」

その言葉に我を思い出したケンはすぐに元の平常心へと戻した。そう、修行はまだ半分しか終了していないのだ。ケンは再び気を引き締めるとゴンに次の修行の内容を尋ねる。老人はいつものようににこやかな表情でケンを見つめると、付いてくるように言った。ケンたちはそこから更に山へと足を進めた。そして歩くこと半刻、目的の場所へとたどり着いた。

突然、前方から突風が吹き込んできた。その風はとてつもなく強く、踏ん張らないと飛ばされてしまいそうなほどだった。ケンたちの目の前には高さ二十メートルほどの絶壁が存在する。その絶壁には一筋の太い亀裂が入っており、そこから突風は吹き出していた。

「では次の修行内容を説明する。この崖の隙間から吹き込む突風を刀の風圧で見事、逆流させてみよ」

ケンはまたまたとんでもないことを言う師に対し、驚きを通り越し、正直あきれ返っていた。しかし、逆らうわけにもいかず、しぶしぶ納得した。

（本当にこんな突風を跳ね返せるのかよ……だが、うだうだ言っている時間はない。ここは自分の腕を信じることにしますか……）

ケンは刀を構えると突風に逆らうように刀を振りぬいた……。

安らぎ 【五】

——アルフォード軍本部——

蒼天の空の下、レオンは一人、木陰で本を読んでいた。

今日で休暇は三日目。太陽は活気に燃え盛ってはいるがそれほど暑くなく、時折吹く風でむしろ過ごしやすい一日だ。

彼がいるのは司令部の近くにある通りのベンチで、この通りはよく軍関係者の者が休憩を取りにやってくる。ただ、今はまだ午前中であり、この通りのベンチに座っているのは彼一人であった。

「午前中から優雅に本を読んでいるとは、たいそうなご身分なことだよ」

情報局の方からやってきた男はレオンを見るなり、声を掛けてきた。その表情は彼を妬むようなものではなく、むしろ友好的な感じだ。

「リット、君こそこんな時間にブラブラしていて良いのかい？」

レオンは本を閉じると微笑しながら、中指でメガネを上げる彼を見上げた。リットはレオンと目が合うと仕事を放り出してきたことを笑ってごまかしながら、彼の隣に腰を下ろした。

「頼まれていた件だが、こちらも忙しくてね。全ての情報を手に入れるのに早くても三ヶ月はかかりそうだ」

レオンはその報にさして驚いた様子はなく、仕方がないといった

感じた。彼はリットにできるだけ早く手に入れるように頼むと再び本を開いた。一見、彼の態度はマナーがなっていないように思われるがレオンとは付き合いの長いリットにとって、それは別に気に障るようなことではない。

リットは用件も済ましたことだし仕事に戻るかと考えたが、せっかく抜けてきたのだからもう少し、この場にしようと思いい腰を上げるのをやめた。

「そういえばお前、いつも同じ本を読んでいるな？ えーっと、確か超文明の遺跡から見つかった古文書、だっただけ？」

リットがした何気ない質問にレオンは一瞬、ピタリと止まった。だが彼はすぐにいつもの調子に戻ると本に目を向けたまま、彼の質問に答えた。

「この本はね、実際は超文明の物じゃないんだ。超文明の時代に存在した別の文明か、もしくはそれ以前の文明だと僕は推測している……」

その答えにリットは思わず、大げさに驚いてしまった。彼がそのように驚くのも無理がない。今現在、超文明以外の古代文明が存在していたなどという事実は何の文献にも載っていない。つまり、もしレオンの言うことが正しいければ、彼は歴史的にとっても貴重な証拠物件を何食わぬ顔であたかもそこいらの古本屋で買った安物の中古本を読んでいるかのように扱っているということになる。

レオンは隣で手をあたふたとさせながら驚いている友人に目もくれず、説明を続けた。

「……まず、超文明は紙を使う文化を持ち合わせていない。彼らは全ての情報をデジタル化していたからね。そして、この古文書に書か

れている文字が我々の文明のものとも、超文明のものとも一致しないことから、この本が超文明ではない、別の高度な文明のものであるということが分かる」

「ちよつと、待ってくれ。どうしてその本が高度な文明のものだと分かるんだ？ 普通、紙を使用しているのなら我々と同レベルか、またはそれ以下と考えるのが妥当だろ？」

レオンは彼の質問をすでに予測していたかのように、間を空けずに答えだした。レオンの説明によれば、この古文書の素材は正確には紙ではないらしく、我々の文明には存在しない、科学物資によって製造されたものであるという。しかも、この古文書のすごいところはこれ以外にもあるらしい。何と書かれている内容が開く度に違うのだという。

リットは説明を聞き終えると、今まで聞かされた内容を整理するためにしばし沈黙を続けた。そしてようやく作業を終えると最後に何故、レオンはその文字が読めるのかと尋ねた。レオンは少し考える素振りをみせると本を閉じ、リットの目を見て答えた。

「…その答は僕にも分からない。不思議なことに理解できるんだ。今まで話したことはなかったけど、僕には君と出会う二年前からの記憶しか残っていないんだ。それ以前の記憶はどこかに置いてきてしまったらしい」

レオンが言うには彼はアルフォード王国の東側に位置するバスラ砂漠のど真ん中で倒れていたらしい。彼の記憶はそこから始まり、そのとき彼が手に持っていたのがこの古文書なのだそうだ。

リットはただただその説明を耳に傾けた。レオンが自分から自身のことについて話すというのは珍しい。いや、珍しいというものじゃない。彼がそのようなことを話すのはこれが初めてだ。リットは

レオンが積極的に話すことに驚く一方、自分に話してくれていることに喜びを感じていた。

レオンは元々内気な性格で自分のことを話したがない。彼に自身のことを話してくれたということはそれだけ彼のことを信頼してくれているという証だ。

リットはレオンの説明が終わると、何と返せばよいのか分からず、とにかく話したいことがあればいつでも話してくれ、と言ってその場を後にした。

レオンは彼を見送った後、再び本を開き、読み始めた。しかし、その表情は先ほどとは異なり、何かが吹っ切れた様子だった。

彼の記憶は戻るのか、それは神のみぞが知ることだろう……。

——アルベルト山脈・風神の門——

「うわああー！！！」

突風によって刀を弾かれ、青年はそのまま地面に倒される。ケンはすぐに立ち上がると再び、突風の流れに逆らって刀を水平に振った。しかし、またもや刀は正面に来たところで風に負け、彼の体は地面に叩き付けられる。

特訓を始めてからかれこれ六時間が過ぎようとしていた。その間、ケンはひたすら突風に向かって刀を振り続けていた。しかし、彼は突風を押し戻すどころか、依然として刀を振り切ることさえできないでいた。ケンは上体を上げるとしばし、考えることにした。このままやっても無駄だと考えたためである。考えること数分、ケンは再び仰向けの状態になった。どうやら良い考えが浮かばなかったらしい。

考えるのをやめたケンは特訓を再開することもなく、その状態のまま、何気に空を眺めることにした。

「空はいつ見ても和むなあ・・・、おかげで頭をリセットできる。そういえば、昔はよくあいつとこの空を眺めていたなあ」

ケンは雲ひとつない大空を眺めながら一時の間、修行を忘れて友と暮らした思い出に耽りだした。

「…ケンの親友ですか？」

リリスは皮を剥かれて切り分けられた果実を食べながらゴンに尋ねた。彼女は裏庭に面した廊下に腰掛けながら、老人が話すケンの昔話に耳を傾けている。老人はそんな彼女を眺めながら質問に沿うような形で話を続けた。

「そうじゃ、あいつがここに来たのは六歳の頃でのお、そのとき同じくやってきたのがそやつじゃ。あいつらは最初に合った時から意気投合してお、共に競って刀を振り、飯を食べ、同じ屋根の下で寝る…そんな仲良しぶりじゃった」

gonは当時の映像を頭の中に思い描きながら懐かしそうに語っている。その表情は普段以上に柔らかく、知らず知らずのうちに笑みを浮かべていた。

そんなうれしそうに語る老人の姿を見てリリスは、ああ、この人はケンとその友人を我が子のように思っ接してきたのだらうと感じた。そして自分自身もいつのまにかに笑みをこぼしていたことに気づいた。それほどまでに老人の話は詳細で、誰が聞いてもその光景が浮かぶようなものだった。

老人はしばらくの間、当時のケンと彼の親友との生活ぶりを黙々と話した。ケンが最初に素振り千回を成し遂げたこと、技の上達は親友のほうで優れていたこと、食事当番を賭けて崖登りに挑んで危うくケンが落ちそうになったこと……。

ゴンは大分満足したようで今度は話をケンという人物像に移した。彼が語る、ケンという人物は非常に純粋な心を持ち、負けん気の強い青年だとのこと。リリスはそうだなあ、と同意するかのようにウンウンとうなずきながら話を聞いていた。

「リリスちゃん、いっちょ面白い話をしてやろう。これはあいつが八歳のころの話じゃ」

老人はそう言うとき、ケンが魔獣に遭遇した話について語りだした。

ケンが八歳のとき、彼はいつものように森に山菜を探しにやってくる。彼は三十分ほどでその日の夕食に必要な分を採り終えて帰ろうとしたそう。ところが奥のほうから異様な殺気を感じたらしく、彼はそのまま帰らず、殺気のする方向へと足を進めた。

歩くこと数分、陽はまだ高いはずなのに辺りは異様なほど暗くなり、空気は濁っていた。それでもケンは足を止めることなく、殺気のする方向へと向かった。そしてケンは一つの洞窟にたどり着いた。彼は一度、足を止めたがすぐに中へと入っていった。すると中には五匹の魔獣がいて、ケンと目が合うと一斉に飛び掛ってきた。普通、そのぐらいの歳の子なら恐怖のあまり背を向けて逃げるものなのだが彼はそうしなかった。彼は逃げるところか、魔獣を睨み、腰に差した刀を抜くと何のためらいもなしに斬りかかったのだ。

だが勝敗は見えていた。いくらあがいても八歳の子供が魔獣に敵うはずはない。ケンは刀を振り回しながらなんとか抵抗していたがついに魔獣に囲まれてしまった。絶体絶命のピンチだ。

ところがケンは助けを乞うたり、泣き叫んだりしなかった。彼は呼吸を整えながらじつと魔獣たちを睨み、隙あらば斬りかかるとい

うかのように刀を構えていた。

そのとき、ちょうどケンの帰りが遅いことを心配したゴンがやってきたらしく、魔獣を斬り倒して見事倒したそうだった。

ゴンはケンを連れて帰ると、何故、助けを乞わず、逃げたりせずに魔獣たちに挑んだのかと彼に尋ねた。すると彼は意外なことを述べたそうだった。

「助けを乞うことや、逃げることは簡単にできますが、自分の誇りが傷つきそうだったのではありません」

リリスはその答えに呆気に取られてしまった。ケンは自分の誇りが傷つくのが嫌で自分の命を捨てようとしたのか？

老人はそんな彼女を見ながら声を上げて笑うと次のように語った。

「な、面白い男じゃろ？ あいつに取っては自分の命なんかより、戦士としての誇りのほうが大切なんじゃないよ。だが、それがあいつを今の強さまで持ってきたというのも事実なんじゃない」

ゴンはそう言うのと果実に手を伸ばし、口へと投げ入れた。

リリスはその話を聞いてケンという人物が以前より何となく分かったような気がした。

老人は果実を呑み込むと最後にこうリリスに告げた。

「あいつはのお、一人でいると無理も承知で突っ込んでいく奴じゃない。だからお前さんがしっかりあいつを支えてやってくれ」

彼女はその頼みに黙ってうなずくとケンのいる方角をじっと見つめた。

（支えてやってくれか……。むしろ、私のほうが支えられている気がする）

するな……)

リリスはそうに考えながら、果実へと手を差し伸べた。
その味は先ほどよりも増して甘く感じられた……。

——デルミア・酒場——

「それでね、私には歳の離れた弟がいてね……」

レイナは先ほどから自分の身内の話をしながらアルマンと酒を交わしている。

この酒場は偶然、通りかかった場所でレイナが彼を誘った。室内は四人制のテーブルが三つに八人は座れるカウンターが一つあるというそれほど広くない古風な店で、ジュークボックスからはムードのある曲が流れている。

彼ら二人以外には客は五人しかおらず、それぞれテーブルで酒を交わしている。カウンターにはアルマンたち以外に誰も座っていない。

レイナは器に入ったカクテルを一口飲むと再び、アルマンに彼女と九歳歳の離れた弟の話を始めた。

「名前はクリスって言うんだけど、私が十四歳の時に父が家を出て行ってしまってたね。その時に弟も一緒に連れて行かれたのよ。だから彼は十一年間、クリスとは会っていないわ」

そう語るレイナの表情は少し、哀しそうだ。彼女は俯いたまましばらく黙っていた。

彼女の話によると母方のフランク家は代々、名だたる銃士を世に出してきた名門の家系であり、彼女の父親は婿入りという形でやってきたそうだ。父方のレヴァン家も銃士の世界では有名な家系でその結婚は所謂、許婚であった。

そういうこともあってか、彼らの縁はレイナが十四歳の時に突如として切り裂かれ、幼い弟とも離れ離れになってしまったそうだ。

その時、彼女の父親は代々、フランク家に伝わる二丁の銃のうち一丁を持ち去ってしまったそうで、そのことがフランク家の怒りを買い、その怒りを恐れたレヴァン家は彼女の父親を追放してしまったのだという。最も、彼女の父親は七歳の弟を引き連れて本家に戻らず、どこかに行方をくらましたそうだが…。

「そのもう一つの銃というのが私の使用する“ディパルサー”なんだけどね。この銃は父が持っていたりボルバー銃、“マルクス”と合わせて代々、フランク家一の銃士に受け継がれる銃なのよ。つまり、私はフランク家一の銃士ってわけなの。驚いた？」

レイナは酒が回ったらしく、少々、ハイなテンションになっていた。アルマンはそんな彼女に苦笑いしながらもじつと彼女の顔を見つめながら相槌を打っていた。彼自身、レイナの話に興味があったからだ。

アルマンが彼女とこれほどまでに話すのは初めてだった。また、彼女が彼に自分自身のことを深く話してくれるのもこれが初めてだった。アルマンはレイナが自分に気を使ってわざわざ誘ってくれたことに薄々感づいていた。彼はそんな彼女の気持ちに非常にありがたく感じていた。

実際、彼自身、この町に訪れることは気が気でなかった。この町に来てからというもの、心の奥底にある罪の意識がじわじわと表面に出てきていたのだ。言わば、彼にとってこの町は一種の懺悔室なのだ。

しかし、レイナと話しているうちに罪の意識は次第に弱まり、今では再び彼の心の奥底で静かに眠っている。

彼女と話しているとき、彼の気持ちは罪の意識を忘れさせるほどの何かが存在していた。彼自身それが何なのかは、はっきりとは理解していなかったが、その気持ちは依然持ったことがあるような気がしていた。

（何だったかな、この気持ち…この何ともいえない高揚感、そういえば鼓動が少し速くなった気がする……）

アルマンは依然として彼女の話に耳を傾けながら心の中で起きている変化を理解しようとしていた。彼は水割りを飲み干すと再び、同じものを注文した。

結局、考えるうちに夜が更けてしまい、彼はその間にコップ十杯以上ものアルコールを摂取していた。隣ではレイナが酔いつぶれて熟睡しており、その寝顔があまりに気持ちよさそうだったので起こすのは可哀想だと思い、アルマンは彼女をそつと背中に抱えた。マスターに御代を支払い、彼女を背負ったまま、店の扉を開いて外に出る。陽はまだ上っておらず、上着を脱いでいるためか、少々肌寒く感じた。

アルマンは自分の背中で熟睡しているレイナを羨ましく思いながら自分たちの宿へと足を運んだ。

その背中はとても温かく心地のよいものだった…。

安らぎ 【六】

——アルベルト山脈・風神の門——

休暇もとうとう最終日を迎えた。太陽は天高く上り、青年を頭上から見下ろしている。

ケン は風神の門と呼ばれる絶壁に出来た縦状の亀裂に体を向け仁王立ちし、目を閉じてその時が来るのを待っていた。

一分、二分、三分……十分が経過しようとした。すると後方より足音が聞こえてきた。その数二つ、ゆつくりとではありが確かに彼の方へと足を進めている。

その時が来た。ケンはゆつくりとまぶたを上げると体を反転させ、足音のする方へと向けた。彼の衣服は土塗れで全体的に黄土色掛かっており、また所々に破れて出来た穴からは擦りむけや、打撲の痕が見られる。その姿はまるで何十年という月日の間、荒野を旅してきた流離人を思わせる。その眼差しは依然に増して鋭くなっていたが、それ以上に温かみが備わっていた。

「ふむ、その目つき——何かを勝ち得たようじゃの。よかるう、お前が得たもの見せるが良い」

ゴンは顎鬚を撫でながら目の前の青年をまじまじと眺めていた。その表情はいつも通りの恵比須顔であったが、目には力強さが加わっていた。

老人の隣にいるリリスもゴンほど彼の変貌振りには気がついていなかったが、ケンの表情が今までの中で最も輝いていると感じていた。

ケンはリリスに笑みを送ると背を向け、再び風神の門へと体を向

けた。ゆつくりと、ではあるが一步一步確実に絶壁へと足を運ぶ。そして、亀裂から十メートルのところで足を止めると、腰に手をやる。右足を前に出し、姿勢を低く構えて目を閉じ、精神を研ぎ澄ませながら、その時が来るのを待った。

ケンはその状態のまま、ピクリとも動かない。彼の周りには張り詰めた雰囲気漂い、それはゴンやリリスにも伝わり、彼らが呼吸するのをやめさせた。

辺りは静まり返り、リリスが喉を鳴らす音がはっきりとゴンの耳元へと伝わる。依然、ケンは動こうとせず、突風が吹くのを待ち構えている。その姿はまるで獲物の姿を捉えて機会をじっと待つ獣そのものだった。

そしてその時はやってきた。溜めに溜めた息を噴出すような突風がケン目掛けて勢いよく突っ込んでくる。彼はぱつと、目を見開くと全神経を切っ先へと集中させた。辺りの空気は煮えたぎった水のごとく、どつと震え上がる。

「天魔無双流、竜の太刀、奥義、風竜！」

鞘から勢いよく飛び出した刃は音の領域を超え、触れる空気を斬り裂いた。すると横に振られた刀身からは巨大な波動が生まれ、彼目掛けて襲い掛かってくる突風へと放たれる。波動は突風にぶつかると軽くあしらうようにして突風を掻き消し、勢いを落とすことなくそのまま、絶壁へと衝突した。

ドゴオオオオンッ！

けたたましい衝突音と共に辺りを砂埃が覆いかぶさる。崖からはパラパラと何かの欠片が崩れ落ちるような音が聞こえてくる。砂埃が落ち着き、視界が回復してくるとリリスは目の前に広がる光景に驚かされた。

ケンの放った衝撃波がぶつかった崖には横に一筋の溝が出来上がつていた。それが縦に入った亀裂と重なって巨大な十字を形成している。それは一種の芸術作品のようにも思えた。

ケンは目の前の光景に満足するとともにゆっくりと刀身を鞘へと納めた。そして師匠の下へと足を運び、やり遂げた表情で彼の顔を見つめた。

老人は一時の間、崖にできた十字をまじまじと眺めながら顎鬚をなでていた。そしてケンの方へと体を向けると彼のやりとげた表情に笑顔で返した。

「ほほ、やりおったわこの若造め。うむ、あっぱれ。合格じゃ！」

ケンはその言葉を聴くと全身の力が抜けたかのようにその場に崩れ落ちた。どうやら今までの修行で溜まった疲れが気を緩めたことで一気に彼の体を襲ったようだ。

リリースは彼の元へと駆け寄ると彼の上体を抱え、その頭を自分の膝元へとやった。

「ケン、しつかりして！大丈夫！？」

一瞬、彼女はケンが力尽きたかと心配したがすぐにその感情は打ち消された。彼女の耳元にとても気持ちよさそうな寝息が聞こえてきた。どうやらケンは単に眠ってしまったようだ。ゴンはやれやれといった感じでケンを起こそうとしたが彼女はこのまま寝かせてあげようと目で合図した。リリースは自分の膝元で眠るケンの寝顔を見ながらその表情があまりにかわいらしかったので、先ほどどでかい衝撃波を放ち、崖に溝を作った張本人と同一人物とはとても思えなかった。

彼女は心地よさそうに眠るケンを眺めながらクスリと笑みを浮かべた。風神の門からは先ほどのような突風は吹き出ず、荒行を達成

した青年を祝うかのように爽やかなそよ風が吹き出ていた。

——兵器開発局・研究室——

「ついに完成や〜！」

満面の笑みで喜ぶその男はゴロンと研究室の床に倒れこむ。その顔には疲労が浮かび上がっていたが、彼自身は全く気にしていない様子だ。その男の隣でイスにもたれ掛かっている大柄の男は全く笑っておらず、疲労が完全に表に出ていた。

そんなマツクに目もくれず、ケネスは体を起こすと出来上がった完成品の数々を眺めだした。何度も頭を抱えてやつとの思いで造り上げた特殊弾シューター。ケネス自作の特殊弾を正確に且つ遠方へと飛ばすこの兵器は空気を圧縮して飛ばすという簡素な仕組みで、またリボルバー式になっているため、異なった特殊弾を装填することでどの弾を放つか自由に選択することが可能になっている。

その他にも様々な任務を考慮して造られた装備があり、これらは特戦のメンバー分製作されてある。

「しかし、まあ、あんさんがここまで役に立つとは思ってもせえへんかったがな」

ケネスは隣のマツクを見ながらしみじみと感心した。意外にもマツクの頭は柔軟でその柔軟さが兵器開発に多いに貢献したためだ。

「思ってたのかよ！ 誘ったのはてめえのほうだろ…」

マックはケネスの言葉にムカつきを覚えたがあまりに疲れていたため、それ以上は言葉にならなかった。初めの頃は全く乗り気でなかったマックだったがしぶしぶ作業を手伝う内に次第にのめり込んでいき、終いには自分から率先して作業を行うようになっていた。彼は何故自分がそのような行動に走ったのか不思議に思いつながら、自分の性分に合わないことをしてしまったと大変後悔していた。

「さて、ほな残りの分の製作に取り掛かりましょうか」

マックは勢いよくイスから崩れ落ちると物凄い形相でケネスの方を向いた。残りの分って何だ？ 彼はてっきりこれで作業が終了したと思っていた。そんな彼にケネスの言葉は正に地獄への片道切符を渡されるようなものだった。

「ちくしょう！ こんなことなら来るんじゃないぜ……」

マックはこの時ほど心底後悔し、泣きそうになったことはないだろう。その場に崩れ落ち固まった彼はケネスに無理やり立ち上げられると観念して残り三分の一の作業へと取りかかった。結局彼らは研究室で翌日の朝日を拝むことになり、マックが精神崩壊を起こしかけていたということは言うまでもない。あはれ、マック……。

——ゴンの屋敷——

ケンは風呂場で体にこびり付いた汗と汚れを流すと替えの服に着替えて居間へと向かった。居間に向かうとそこにはリリースが一人、ちゃぶ台に置いてあるお菓子を食べていた。彼女はケンと目が合う

と頬を赤らめて顔を下に向けてモジモジとし出した。彼はそんなにお菓子を食べられているところを見られるのが恥ずかしいのだろうかと思議に思いながらリリスと向かい合うように腰を下ろし、ゴンが来るのを待った。

リリスは未だにモジモジとしていたが時折、顔を上げてケンの方をチラチラと見ている。そんな彼女の行動を不審に思っていたケンだがゴンが現れたことにより、そちらのほうに意識を回すことにした。

老人の手には細長い木箱が抱えられており、老人は腰を下ろすと、ちゃぶ台の上に木箱を置いた。ゴンが木箱のフタを取ると中から一振りの刀が現れた。

刀は全身純白で、うつすらと光沢を発している。鞘には楕円形の紅い宝石が埋め込まれており、その輝きは何ともいえず、人の心を奪うほど魅力的だ。 gon は刀を木箱から取り出すと、鞘から刀を抜いて見せた。中からは銀色に光る刃が現れ、ケンの心をぐつつかんだ。刃には傷一つないのだが決して真新しい印象を与えず、むしろ年代物の印象を与えた。そして妖しく光る刃先を見るかぎりではこの刀は何千、何万もの戦士たちの血を吸ってきたと言っている。ケンはこの刀には人を魅了する何かがあると本能的に感じていた。

「こいつは《グラデイス》と言つてな、製造されたのは何千年も前とされている。こいつに使われている金属は特殊なもので我々の文明には存在しないものじゃ。それでいて錆びず、傷一つなく輝いているとは大した技術じゃよ。まあ、そのためか、この刀をめぐって多くの血が流されてきたんじゃないかな」

gon は意味深な発言をしながらもその表情はいつものように笑っている。彼は刀を鞘に納めるとケンの目を見つめながらグラデイスを彼へと差し出した。

ケンはそつと新たな刀を受け取るとゴンに頭を下げてお礼を言っ

た。そして、借りていた刀を老人に返し、グラデイスを腰に差した。

「これがオレの新しい力…グラデイス……」

ケンは自分の腰に差された刀をまじまじと見つめると再び、ゴンに頭を下げた。リリスはそんな彼をじっと見つめていた。ケンの表情につられてか、何故か彼女もうれしそうに笑っていた。

それからゴンとしばらく雑談をして時を過ごし、夕暮れ前を向かえると彼らは私物を片付け帰る支度をした。

玄関から外に出るとケンはお別れの挨拶を師匠と交わし、エアバイクへと跨った。同じくリリスも挨拶を交わしてケンの後ろに腰を下ろすとしつかりと彼の腰に手を回した。

「師匠、お世話になりました。また、機会がありましたら会いにきますので！」

「ほほ、またいつでも来い。あ、リリスちゃんも大歓迎じゃから、達者でな！」

老人の手を振る姿に見送られながらケンはエアバイクで駆け出し、師匠の下を後にした。目指すは彼らのホームへ、ケンは胸高らかにエアバイクのエンジンを吹かすと風を切りながらオルフィスのある本部へと疾走した。

ケンとリリスが帰っていく姿を老人は笑顔で見送った。しかし、彼らの姿が遠のいていくとその表情は寂しい表情へと変わった。

「また、一人ぼっちか。さみしいのお……」

老人は彼らの姿が視界から完全に消えるまで見つめていた。そして視界から消えると残念そうに家へと足を進めていった。

ゴンが家の中に入ろうとした時、後方に人の気配を感じ、彼は振り返った。よく見ると誰かがこちらに歩いてやってきている。老人は目を細めながらこちら側にやってくる人影に目をやった。そして人影の輪郭がはっきりした時、再び彼の表情に笑顔が戻った。そして杖を突きながら早歩きでその人影のほうへと足を運んだ。

「なんとまあ奇遇な、ケンが帰ったかと思えば今度はお前がやってくるとは……」

老人は満面の笑みでその青年を迎えると彼を家の中へ誘った。

「おじゃまします……」

青年は笑みを老人に返すと一礼して中へと入った。この後、この青年もゴンによる暖かい（？）通行儀礼を受けることになるのだが今の彼がそのようなことを知るはずもないのは言うまでもない。非常に礼儀正しいこの青年は全身黒のスーツに身を纏い、これまた黒いサングラスを掛けていた。

その髪はケンと対を成すように大空のような“蒼色”をしていた……。

安らぎ 【六】（後書き）

一部主な登場人物の紹介

くアルフォード王国く

―特殊戦略部隊―

ケン・シュナイダー：第一部の主人公：16歳：男性：紅色の短髪：
黒色の瞳：アルフォード王国の機動歩兵として前線でその自慢の剣
術を巧みに使って活躍していた。その腕が買われアルフォード国王
直属の部隊で特殊戦略部隊、通称『特戦』に配属される。彼が軍に
入隊したのには悲しい過去が関わっている。彼が使用する剣術は天
魔無双流と呼ばれるものでそのあまりに巨大な力のために神にも魔
にもなれると言われている。またその所持する剣もこの世界で流通
している両刃の剣ではなく、片刃の剣、刀である。情に熱い男でこ
の情こそが彼の長所でもあり短所でもある。新たな刀、《グラディ
ス》を手に入れる。

アルマン・ギルガネス：隊長：26歳：男性：黒色の中髪：茶色の
瞳：人柄がよく誰にでも好かれる人物。任務のために冷酷になろう
と努力しているがいざとなると人命を優先してしまう。ギルガネス
家の人間で超人的な運動能力を持つ。その運動能力は発射された弾
丸を簡単に避けられるほど。刃物から銃までありとあらゆる武器
を使いこなすエキスパートでもある。【アルフォードの戦神】（も
しくは戦神）という二つ名でディーベルクの兵士から恐れられてい
る。以前、リースというレギオスの妹と恋人関係にあったが任務中
誤って彼女を殺害。これによってレギオスの恨みを買ひ、親友から

敵へと変わってしまう。レイナに特別な感情を抱き始めている。

レイナ・フランク：副隊長：25歳：女性：紫色の長髪：緑色の瞳：隊の中では頼れるお姐さんの存在。狙撃の名手でその集中力は三日間、同じ射撃体勢でいられるらしい。アルマンに特別な感情を抱き始めている。

マック・エイガー：ムードメーカー：20歳：男性：茶色の短髪：青色の瞳。大柄で長身。細かいことは気にしない豪快な性格。基本的にバルカン砲などの重火器を使用して戦うが他にも白兵戦用に大薙刀を使用する。ケネスによく振り回される悲しい人。

レオン・マッケイン：天才：17歳：男性：水色の中髪：銀色の瞳：IQ200を超える超天才。言葉数が少なく、無愛想。その頭と魔法で数々の戦いを勝利へと導いてきた。また、ハッキングを得意とし、セキュリティ解除や、情報の奪取なども行う。いつも読んでいる古文書は唯一自分の記憶を辿る手がかり。

ケネス・フロイド：曲者：20歳：男性：黄土色の中髪：黒色の瞳：妙な言葉遣いをするお調子者だが任務の時には隠れた冷酷さを見せることがある。爆弾に関しては確かな腕を持つ。特戦の曲者的存在。新兵器の開発に成功。マックをからかうのが得意。

リリス・クラフト：オペレーター：16歳：女性：朱色の中髪：水色の瞳：性格は非常に明るく、特戦のマスコットの存在。彼女の存

在が隊員の戦場で受けた心の傷を癒しているのは疑いようがないだろう。オペレーターとしての腕も確かなものを持っている。ケンに対して特別な感情を抱き始めている。

ノリス・ヒッター：司令官：56歳：男性：灰色の短髪：茶色の瞳：若かりし頃は【戦場の稲妻】という二つ名で恐れられていた。今でもそのたくましい体つきは衰えておらず、また歳を取ったことでより一層その風格は増している。人としても戦士としても隊員達に影響を与える人物。ちなみに【戦場の稲妻】という二つ名は彼が使用するガントレットが電撃を流すことが由来。国王とはフィリスをやるほど親しい仲。

―その他の人物―

アルフォードⅤ世：国王：45歳：男性：黒色の中髪：黒色の瞳：現、アルフォード王国の最高権力者として王座に座る者。国は民あつてのものと考えており、常に民の事を考えている。この戦争を終わらすために特戦を設立することを決意する。暇さへ見つかればノリスとフィリスをやっている。勝率は五割らしい。

リース・ザルバン：亡者：18歳：女性：金色の中髪：茶色の瞳：レギオスの妹にしてアルマンの元恋人。アルマンからもらった赤いバンダナを常に身に付けている。任務中、誤ってアルマンに射殺された悲劇の女性。彼女の存在はアルマンとレギオスの関係に多大な影響を与えている。

潜入【壱】

——とある基地にて——

ドゴオオンッ！

ケンがとつさに後ろに跳んで真上からやってくるものを回避するや否や、凄まじい衝撃音と共に先ほどまで彼が立っていたコンクリートの地面に穴があく。穴には一本の鋼の柱が突き刺さっており、ゆっくりとその先端が穴から顔を出す。鋼の柱を上へと辿るとそこには巨大な鋼の塊が存在した。いや、塊という表現は間違いだ。そいつは二本の足と四本の爪がある手を生やしている。

ロボットだ。こいつは機動戦車という名のこの世界で主流の兵器だ。全長は二十メートルほどあり、形状は人型をしている。

頭部の中央に付いた三つの光学センサーがこちらをすくなく睨みつけている。ケンは一呼吸も入れずに走り出し機動戦車から遠ざかるうとする。しかし、むこうもそのまま立ち尽くしているはずがなく、ケンの方へ体を向けるとゆっくりではあるが巨大な一歩で彼の後ろを追いかけた。一歩前進する度に地面は重々しい音と共に揺れ、前方を走るケンに迫り来る恐怖を与える。彼と機動戦車の間合いは徐々にではあるが縮まっていき、等々射程範囲にケンを捉えるとアームの先端の爪を広げて収納されてある機銃を引き出し、銃口を彼へと向ける。

ズガガガガガガッ！

迫りくる銃弾を避けきれないと判断したケンは方向転換すると同時にすかさず抜刀し、水竜を使用して被弾するであろう銃弾を全て

払い落とした。そして再び方向転換すると身を隠せそうな倉庫郡へと走り出した。

ケンたち特戦のメンバーは今、二機の機動戦車に苦戦を強いられていた。しかもこの機動戦車、ただの機動戦車ではない。ディーベルクが極秘の裏で開発していた新型機動戦車なのだ。

何故このようなことになったのか？ どうしてケンは必死に逃げ回っているのか？ 話はこれより数時間前にさかのぼる。

—— オルフィス・会議室 ——

「敵基地への潜入……ですか？」

ケンは今度の任務を説明する白髪混じりのノリスに独り言のように呟いた。ケンの隣に座るマックも頭を斜めに傾けている。そんな様子の彼らを見るや司令はもう一度確認の意味を込めてノリスに任務の詳細を説明するよう促した。彼女は司令と目が合うと軽く頷き、目の前のパネルを操作してホログラムを起動させた。すると、テールブルの中央に今回潜入すると思われる基地周辺の立体映像が浮かび上がった。

「今回の任務は先ほど司令がおっしゃったように敵基地への潜入が目的です。この基地は一見すると補給基地のように見えますが、情報局の情報によりますとこの基地では新型機動戦車の開発が極秘裏に行われているそうです。その新型は何でも今までの機動戦車を軽く凌駕する兵器であるらしいのですが形状や、武装については一切の情報がありません。今回、我々に下された任務はその新型機動戦車の情報の奪取です」

リリスが説明を一通り終わると、待つてましたとばかりにすかさずケンが質問の意思を表すために手を挙げた。彼女と目が合うとケンはニツ、と笑ってみせ質問の内容を話し出した。

「その機動戦車は具体的に基地のどこにあるかは分かっているのかい？」

「残念ながらこの基地にあるというところまでしか分かっていないというのが現状で、実際に基地のどこにあるかは現地に行かないかぎり分からないわ」

リリスの返答にそうか、と答えると再びリリスに向かって笑みを飛ばした。リリスはその度に頬を赤らめて少し動揺していた。だがケンはそんな様子のリリスを不思議がるだけであつた。

それから一通りの潜入ルートを確認すると一同は準備のために会議室を後にした。ケンは自室に戻るとロッカーを開き、中にある装備一式に着替え始めた。今度から新たに追加された装備があるのでケンはそれらを確認するために一通り作動してみせた。そして確認を済ませると装備を腕や腰などに装着し、最後に壁にかかった新たな相棒、グラデイスを手に取り部屋を後にした。

—— 小型船マージ ——

「ほな、今回から追加される装備について説明させてもらいますわ」

皆の注目を浴びる中、ケネスが自慢気な表情で自ら開発した装置を手に取り、説明を始める。その説明は製作者としての視点から述

べたためか非常に過剰な表現が含まれていたため実際のところどこまで役に立つ代物なのかあまり分からなかった。彼が述べた説明を簡略化すると次のようになる。

開発NO・1、《蜘蛛の糸》 この装置は厚さ一ミリ、全長二百メートルの極細ワイヤーを射出する銃の形をしたもので主に壁を登る時に使用する。一ミリ程度の厚みしかないワイヤーではあるがケネスが独自に開発した特殊繊維を使用しているため最大十トンの重さまで耐えられるという。

開発NO・2、《忍び足》 これは一見すると単なるブーツのように見えるが地面に触れる靴底に特殊なゴムを使用しており、歩くときに出る足音を消してくれるという代物。またクッション製も備わっているため足にかかる衝撃も和らげてくれる。

そして次に説明するものこそ彼が最も自慢したい(?) スペシャルな代物らしい。

「さあて今から紹介しますのは本日のお目玉、先ほどの二品を合わせてもお釣りがぎょうさん出てしまうという脅威の代物! さあ、観客の皆さん、心の準備はよろしいですか!? 開発NO・3、《蛸肌》だあ!」

「『たこはだ』?」

ケンたちは通販のコメンテーターのように非常に大げさな感じで不思議がっていた。(むろん、この中にレオンは含まれていない。彼はケネスの説明などお構いなしに黙って古文書に目を通していている) その期待していた反応に大いに満足したケネスは我が子を自慢する親ばかのようなハイテンションでべらべらとその詳細を語りだし

た。

「ふふふ、まだ驚くには早すぎまつせ。この蛸肌、実は皆さんが今装着しているバトルスーツのことなんですわ。こいつがこれまたどれくらい優秀な代物でしてなあ、何とその場の背景によって色彩と材質を変化させるうちゅうやつなんですわ。これによってほぼ百パーセントのカモフラージュ率を確保できまして、敵の目を欺くことができますねん！」

ケネスの語りが終了すると同時にケンたちから一斉に驚きの声と拍手が飛んできた。彼はその反応に大いに満足した様子でいつもの三倍の笑みを浮かべている。彼のテンションはまさに有頂天に到達していた。

ケネスの開発した新しい装置によって今回の潜入任務は飛躍的に楽なものになったわけだが、ここで彼からそんな精神的に安堵しきっている彼らを谷底に突き落とすかのような重要な発言が放たれることになる。

「あ、言い忘れてましたけど蛸肌の効力はもって三分ですから♪」

「……えっ?」「……」

「カモフラージュするための変化には莫大なエネルギーを消費しますねん。もし、一時間以上持たせようとすれば巨大なバッテリーを背負わないかんはめになりますき、そこんとは妥協して三分にしました♪」

非常に気楽に言い放ったケネスであつたが他の隊員達はすっかり彼に騙された気になっていた。やはり、世の中そんなに上手い話なんてあるわけない。レオンはケネスの発言には耳を傾けていたので

オチを聞くや否や、やっぱりね、といった具合で下に俯きながら軽くため息を付いた。この男の話することには必ずオチがある。ケネスという男はそういう男なのだ。

「てめえ、人の気持ちを散々持ち上げておいて結局そういうオチだよ！」

「勝手にあんさんが勘違いただけやろ。わいのせいにされても困るがな」

「そもそもネーミングセンスがなってねえんだよ！ 特に蛸肌って何だよ！？」

「むむ、わいのネーミングセンスにイチャモン付ける気かい？ ええ度胸してまんなあ？」

マックとケネスの口喧嘩はヒートアップし、仕舞いには狭い機内で取っ組み合いを始めてしまう始末。一時はその光景を面白そうに眺めていたケンたちだったが五分経っても終わる様子が見えなかったため、仕方なくレイナが仲裁に入った。

ドガッ！ ゴスッ！

いったいどこに持ち合わせていたのか、レイナの手には巨大な木製のこん棒が握られている。こん棒が後頭部にクリーンヒットした二人の男は両手で頭を押さえて声にならない叫び声を出しながら半泣き状態で床に転がり回っている。

「いいかげんにしなさい、二人とも。作戦前なんだからもう少し落ち着きなさい。それとも何？ もう一発、お見舞いされたい？」

レイナは不適な笑みを浮かべながら床でもがいているケネスとマツクを睨みつける。両者は上から感じる鋭い殺気によって強制的に停戦させられた。

（姐さん、めっちゃめっちゃ怖いがな……。ちゅうかキャラ変わりすぎや！）

（やべえよ……。次、逆鱗に触れたら確実に殺られる！）

ケネスとマツクは未だに割れるように痛む頭を押さえながら心の中で、自分たちを今見下している女性に対する対応について改めようと誓っていた。他のメンバーも目の前に広がる殺人未遂な光景を見せ付けられて軽く言葉を失っている。ケンとアルマンは目を合わせると気の抜けた笑みを浮かべながら、今後二度と彼女を怒らしてはならないと訴えあった。レオンはただただ、ため息を付くばかりであった。

後に【不動の女神】という二つ名で敵兵から恐れられるレイナであるが、仲間たちからは既にこの時を境に恐れられるのであった。（ちなみにこれらの装置は後ほど彼女の手によって改名され、以下のようになる。蜘蛛の糸↓ヴェイヤー 忍び足↓シャルト 蛸肌↓オクトル）

潜入【貳】

——アーマイ洞窟——

目的の基地、バビル基地から十キロ離れた地点でマージから降りたケンたちはとある洞窟に足を運ばせていた。

洞窟の名はアーマイ。レオンの説明によるとこの洞窟は全長百キロにも及ぶ洞窟でこの地帯全域に無数に枝分かれして伸びているらしい。そんな洞窟に何故彼らがいるのかというと、どうやら枝分かれた道の一つがバビル基地の下を通っているらしく、彼らは今その地点を目指して進行している。

洞窟を進むこと数分、すっかり光は差し込まなくなり辺りを暗黒が支配している。

ケンたちは暗視ゴーグルを装着して何とか視界を確保していた。洞窟の壁は全体的に湿っていて時折、雫が肩や頭に落ちてくる。

分岐点に差し掛かるたびに彼らは一度足を止め、レオンが彼の持つ万能コンピューター、ハグノーンのディスプレイに映し出されているマップを見て進行方向を確認する。分岐点はしょっちゅう現れケンは二十回目を通った後、もはや数えるのをあきらめていた。彼は決して方向音痴な方ではなかったが五十回目と思われる分岐点を通過する頃にはすっかり自分がどの辺りにいるのか分からなくなっていた。

そして洞窟を進むこと一時間と半刻。レオンの足がピタリと止まった。どうやら目的の地点に到達したようだ。レオンは壁の方へと足を運ぶと壁に耳を当て軽くノックし始めた。

コンコンコン

壁を叩く音は沈黙が覆うこの洞窟の中で驚くほどよく響いた。レオンは確認をし終えた様子で壁から離れるとケネスの方へとやってきた。

「どうやらこの壁の向こう側に空洞があるみたいだ。基地の敷地内に位置することから考えて基地施設に繋がっているとみて間違いないだろう…。ケネス、爆破を頼む」

「了解ッ」

ケネスは腰に取り付けてあるポーチから円形の物を六個取り出した。それは直径五センチほどの大きさで、材質は互いにぶつかり合ったときに聞こえた重く響きの良い音から金属のようだ。

彼はレオンから指定された壁に近寄ると手を当てながら位置を確認し円形物を一個一個慎重に取り付けていく。全てが取り付け終わるとケネスは隊員たちに壁から五メートルほど離れるよう指示した。ケンは円形物を取り付けてある壁をよく見てみた。するとそれらを線で結ぶことによつて巨大な円が形成されることに気が付いた。

「ほな、いきまっせ。あ、暗視ゴーグルのスイッチ切るの忘れんといってくださいな」

ケネスが右手に持つスイッチを押すと共に真っ暗な洞窟が一瞬にして光に飲み込まれる。すると洞窟の壁は崩れ落ちていき、きれいな円形状にくりぬかれた入り口からは薄っすらとした光が差し込んできた。

「すごいでっしゃろ？ これはわいが開発した万能小型爆弾、《マール》や！ いかなるところにも設置可能で小型にも拘らず厚さ三十センチの鉄板に軽く穴を空けることができる優れものや」

小型爆弾が思うように機能してくれたことにケネスは心の底から満足していた。そんな彼を無視して空洞へと真っ先に潜入したレオンは目の前に広がる光景からここがまさしく基地施設の一角であると判断した。

空洞は大きな筒状になっており、中央には川が流れている。川の水はひどく濁っており、これまた強烈な悪臭を放っている。

「どうやら基地施設の排水路に出たようですね…」

レオンはハグノーンのディスプレイを眺めながら現在の位置を確認し出した。そしてこの排水路を左に向かえば基地の建物に潜入できることを確認し終えると、再びケンたちを先導しながら歩みだした。

排水路にはケンたちの進行を妨げるセキュリティやトラップが全く存在せず、彼らは順調に排水路の出口に近づいていた。

「どうやら出口のようですね…」

歩くこと数刻、彼らは排水の源泉が出るところにたどり着いた。この空間は先ほどの排水路より大分明るく、ケンたちは一瞬、目がつぶされるかと思った。奥行きもかなりあり、出口らしきものは見当たらない。この空間の壁からは様々なパイプが出ており、それらは一つの大きな装置につながっていてその装置からまた排水が流れ出ている。どうやらここは基地内で出た排水を処理するための施設のようなのだ。

さすがにこのような場所に基地のメインコンピュータにつながっている端末などないのでケンたちは取り合えずセキュリティがないか警戒しながら前に進むことにした。

彼らの行く手にはパイプや排水を処理するための装置ぐらいしか

障害物はなく、侵入を防ぐトラップなどは一切存在しない。ただあまりにパイプが至る所に通っているので、三メートル先までしか視界を得ることが出来ない。そのため万が一のことを考えて彼らは武器を構えた状態で前へと進んだ。

しかしケンたちの行動は全くの意味を果たさずに彼らは当等出口らしきところまでたどり着いてしまった。

「どうやら敵は地下からの侵入対策について全く考えていなかったようです。さっさとこの階段を上って出口らしき扉まで向かいましょう……」

彼らはケンを先頭にしながら階段を上り始めた。階段はジグザグ状になっており出口らしき扉はその階段の頂上に位置していた。高さになるとビルの三階ほどになるであろうか、彼らは全く苦にすることもなく階段を上り終えていた。真っ先にたどり着いたケンは扉に近づくと耳を当て、向こう側に人がいないかを確認する。向こう側から何の音も聞こえないのを確認し終わると彼は慎重にドアノブに手をかける。カチャツという鍵のかかっていることを表す音が聞こえたドアはギギギツと音を立てながらゆっくりと開いていく。

扉の向こうには三人が横一列になっても通れるほどの広さの廊下が一直線に通っていた。今度の出口は目視で確認できるほどの先に存在した。廊下の長さはだいたい十メートルぐらいだ。しかし、今度はその出口の天井部の両端にそれぞれ一つずつ監視カメラが設置されていた。

やっとそれらしいセキュリティに出くわしたケンたちであったがいきなり足を止めねばならぬ状況に陥ってしまった。もし監視カメラが一台であったのならカメラが設置されている側の壁に背中をくっつけて沿うようにして進めばカメラの死角を通るので敵に気づかれることはない。だが目の先にある出口に存在する監視カメラは両端に二台ある。これではお互いの死角を補うことになるので壁に

沿って進んでも見つかってしまう。

ケンはどうしようかと頭を悩ませていたが、ケネスが彼の肩を叩きながらニヤリとした表情で解決策を語りかけてきた。

「ふふふ、皆さんもうお忘れですか？ わいがこういうシチュレーションがあるのと踏んで開発したわいの頭ん中にある様々な知識によって生み出された史上最強にして最高傑作のたこは…ブヘナッ！」

最後に何かを言おうとしたケネスであつたが突然顔面に繰り出された鉄拳によつて最も言いたかつた言葉を言えずにもろくもその場に崩れ落ちた。

そんな彼の隣には今回鉄拳を下した張本人でもあり後ほど【不動の女神】として敵兵から恐れられるが実は既にメンバーからはとくに恐れられているお方が崩れ落ちたケネスを華麗な笑みで見下している。

「何か幻聴みたいなのが聞こえたけど《オクトル》の聞き間違いよね？」

もしこれが普通ならアルフォード軍でその美貌を知らない者はいないと言われたレイナからされた笑みなだから正直ドキツとするだろう。しかし、今のケネスにはその華麗なる美女の笑みが残酷なる魔王の笑み以外の何にも見えなかった。

「…はいそうです。姐さんのおっしゃるとおりですわ……」

もはや逆らうという言葉が頭の中から消えてしまったケネスは弱々しい声を出しながらガクリと力尽きた。その場にいた他のメンバーも目の前に佇む魔王から発せられる負のオーラに恐怖を感じていた。その恐怖は百キロ程離れたところにいて、現場のやり取りをほ

とんど把握しきれていない リリスや司令にさえも感じるほどであった。そして改めて彼らは全員合致で彼女の逆鱗に触れてはならないと誓ったのであった。

——バビル基地・地下一階——

任務が開始されて間もないというのに隊員一名が女神の逆鱗に触れたことにより重傷を負ってしまった特戦であつたが、最初の難関を何とか潜り抜けることに成功した。扉を抜けた彼らの前には紺色一色に染まつた廊下が現れた。廊下はちょうど彼らがいる位置を中心に丁字状に枝分かれしている。取り合えず基地内のマップがないことには目的地を目指せない所以他们は端末を探すため三班に分かれて各廊下を進むことにした。アルマンとケン は前方の廊下を、レイナとマツクは右側の廊下を、最後に残つたレオンとケネスが左側の廊下を進むことになった。

ケンたちは前方の廊下を歩き出してすぐに一つの扉を発見した。扉は電子ロック式のものであつたが運良くロックは掛かつていなかった。ゆっくりと扉を開けながら中の様子を見してみる。どうやらこの部屋は倉庫の役目をしているらしく、部屋の大半を山積みになされた段ボール箱が占めている。

ケンは音を立てないようにゆっくりと扉を閉めるとアルマンの後をついていく。彼はふと壁のように立ち尽くすダンボール箱のラベルを見てみるとそこには《火気厳禁》のマークが描かれていた。こつそりとダンボールの壁から一つ取り出して中を開けてみると中から大量の弾丸が現れた。大きさから見るにどうやら突撃銃用の弾丸のようだ。

ダンボールの中身に興味を持っていたケンは次に別のダンボール

も調べようと手をかけた。

「おい、ケン。何やってんだ？ あいにくおれらは弾丸泥棒しに忍び込んだんじゃないぞ」

アルマンから一括されて我に返ったケンは苦笑しながら軽く自分の頭を叩くと本来の目的である端末を探すことにした。だが、いくら探してもそれらしく物は見つからなかったため彼らはこの場を後にし、次の部屋へと向かうことにした。

次の部屋はすぐ隣にありこちらも電子ロック式の扉であった。残念なことに幸運は二度も続かず、こちらの扉にはしっかりとロックがかかってあった。一瞬、この扉を無理やり開けようと考えたアルマンであったが音を立てて敵兵にバレるとやっかいと考え別の部屋を探すことにした。

ズバズバズババ——ンッ！

ガラガラガラガラドシャ——ンッ！！

「……………」

突然後方から聞こえた騒音に耳を疑ったアルマンは恐る恐る立ち去ろうとした扉のほうへと振り返る。するとそこには一仕事終えて大変満足気な青年が刀を鞘へ戻そうとしていた。そしてこちらの視線に気が付くとちっとも罪悪感のない表情でむしろ誇らしげに笑ってみせた。

「ささ、扉も開けたことですし、とつと中に入りましょう！」

「……ケン、扉を刀でぶった斬ることは世間一般的に開けるとは言

わない」

アルマンは今すぐにでも目の前の青年を半殺しの目に合わせたかったが怒り以外にも呆れや虚しさ、その他様々な感情が強く湧いたため自分でも訳が分からなくなり取り合えずため息を吐くしかなかった。

そんなアルマンを無視するかのようにケンはさっさと部屋の中へと入っていった。中は先ほどとは違い様々な銃器や佇んでいる。その種類は豊富でオートマチック式拳銃や突撃銃、散弾銃、さらにはバルカン砲やロケットランチャーといったものまで存在した。ここは一種の銃器博覧会のようなだとケンは興味深くそれらの銃器をまじまじと眺めていた。

そんな彼の後方では先ほどの騒音で敵が来ないかを緊迫した様子で確かめる隊長の姿があった。幸運にも敵兵に気づかれた様子はなくアルマンは再び今度は安堵の意味を込めてため息を吐いた。すると彼の通信機にレイナとケネスの両方からコールが掛かってきた。どうやら先ほどの音は彼らにはしっかりと聞こえたらしい。

アルマンはしぶしぶ通信機の回線を開いた。

『ねえ、さっきものすごい音が聞こえたんだけど何かあったの?』

『こちらもばつちし聞こえましたがな。で、どないしたんですか? トランプでつか?』

「……いや、大したことではない。ちょっとハプニングが起きただけだ。気にせず任務に当たってくれ」

そう言い終わるとアルマンは向こう側の返答が帰ってくる前に通信の回線を切ってしまった。そして気持ちを落ち着かせるために二、三回深呼吸するとすっかり扉を失った部屋へと入っていった。

中へ入るとすぐ目の前にそこいらに並べてある銃器を眺めているケンを発見する。アルマンは軽くケンの頭をコツくとすぐに端末探しに取り掛かるよう促した。

探すこと数分、ここにも端末らしきものは見つからずケンたちは仕方なく別の部屋を探すことにした。

銃器の部屋を後にしようとした彼らであったが、突如入った通信により足を止められた。通信の相手はどうかやらレオンのようだ。早速、ケンたちは通信回線を開く。

『皆さん聞こえますか？ 端末を発見しましたのでマップの情報を送信したいと思います。作業に数分掛かりますのでしばらくお待ちください…』

数分後、彼の予告通りケンたちの手元にはバビル基地のマップ情報が届いていた。彼らは地下一階の階段のところで待ち合わせることにし、各々そこへと向かった。

ケンたちが向かってみると既に他のメンバーは集合していた。他のメンバーから話を聞いてみたがやはりこの階に敵兵はいないらしい。目的地はここより更に地下のフロアのようながどうか一階にある専用エレベーターを使用しないとそこへは行けないらしい。取り合えず一階に行ってみないことには話にならないので彼らは一階へ向かうことにした。

一階へと向かうとした時、レイナがアルマンに声を掛けてきた。どうかやら先ほどの件が絡んでいるらしい。

「ところであの時訊きそびれちゃったけど、結局何があったの？」

「いやあ、何といいいますか…そのお、ケンがね……いや、本当に大したことじゃないんだよ」

非常に曖昧な返答で事の事実をつやむやにしようと努力しているアルマンであつたがその努力をあつさと崩す発言がこれまた事の原因である張本人から発せられた。

「あ、それたぶんオレですね。扉が開かなかつたもんでちよいとぶつた斬つてやつたんですよ！」

あつさりと自白したケンはちつとも事の重大性に気づいておらず、隣で青白くなっているアルマンや啞然としている他のメンバーの表情を見て不思議がつている。すると突如辺りの空気が重くなり、濃厚な殺気がとある方向から放たれ出した。その異様な雰囲気になすがに本能的恐怖を感じたのか、ケンは恐る恐る殺気の放たれる方向へと体を向ける。

そこには絶大な美貌を誇る、恐怖の大王が満面の笑みで彼を口ツクオンしていた。

「ケン、ちよつとお姉さんの方にいらつしゃい」

「え？ な、何ですか？ オレは別に悪いこつイブラハツ！」

ここに本日二人目の尊い犠牲者が葬り去られるのであつた…。

潜入【参】（前書き）

どうも武竜です。「TSUWAMONO」をご覧になられている皆様。大変長らくお待たせしました。私自身スランプに陥ってしまい、上手く筆を進めることができませんでしたがようやく本編を更新することができました。まだまだ本調子ではありませんが少しでも筆を動かそうと努力しておりますのでどうぞ長い目でご覧になれてください。では潜入【参】を楽しまれてください。^^

潜入【参】

——バビル基地・一階——

「では後ほど会おう」

アルマンはレイナの肩を軽く叩くとケンとケネスを引き連れて彼女の元を去っていった。

地下一階の階段を使い、地上一階へとやってきたケンたちは辺りに人の気配がないことを確認すると、目指すべきエレベーターの位置を確認した。

「ふむ、それにしても目的のエレベーターまで大分あるなあ……」

「はい。それに先ほど基地内の地図を得るついでに監視カメラの映像を覗いてみたのですがかなりの兵士が巡回しています……。それに目的のエレベーターの前には常時二人の兵士が見張っているので一筋縄にはいかないでしょう……」

ざっと地上一階の地図を見たアルマンの発言にすかさず現時点の状況を報告するレオン。その仕事振りはさすがと言える。

彼が言うようにこの地上一階は先ほどの地下一階とは比べものにならないくらい敵兵の警戒が厳しい。巡回の兵士は大体二十人ほどで絶えず二人一組で行動し、決められたルートをしっかりと警戒している。しかもこのフロアは先ほどの地下一階より広いだけでなく通路がまっすぐに伸びているため見通しが非常に良い、つまり死角がないのだ。一応、監視カメラはレオンの手によって封じこめたが

それでも巡回している兵士たちの警備は侮りがたい。

「とにかくこの大人数で行動するのは無謀といってもいいわね。チームを二組に分けるべきだわ」

確かにレイナの言う通り今の人数で行動すれば間違いなくて敵兵に見つかるだろう。ケンたちは彼女の提案の通り、部隊を二つに分けることにした。

「よし、では部隊はおれとレイナを隊長とした二班に分けようと思う。おれの方にはケンとケネス、レイナの方にはマックとレオンだ」

アルマンの意見に異議を述べるものはおらず、ケンたちは彼が述べた案を呑むことにした。そして出来るだけ敵兵にばれないように言い聞かせるとアルマンはケンとケネスを引き連れて左側通路へと去っていった。程なくしてレイナたちも階段から身を掲げ辺りを確認しながら彼らとは反対方向の右側通路へと足を進めた。

双方が分かれて数分もしないうちに、アルマンたちは足止めを食らっていた。巡回の兵士が互い違いにやってきて思うように進めなためだ。

ケンはこの状況を切り抜ける最適な方法を考えながらアルマンからの指示を待っている。しかし、中々敵にばれずにこの場を通り抜ける方法など思いつかず彼は頻繁にアルマンの顔を窺っていた。だがアルマンはただ黙っているだけでケンと同じく考えが浮かばない様子だ。

そんな時だった。ケネスが今思い出したかのようにある案を投げかけてきたのである。

「隊長、すっかり忘れておったんですがいいこんなもん持ってきて

ますねん」

ケネスはそういうとある一つの筒状の物を目の前に差し出した。それはケネスが使用する特殊弾であった。その弾は全身海のような深い色合いをしており、中心には花ちようちんのドクロマークが描かれてある。

ケネスは壁沿いで伺いながら敵兵がやってくるのを待った。コツコツと壁に反響させながら敵兵の靴音が近づいてくる。そしてケネスたちがいる角の一つ先に現れた瞬間、ケネスは静かにその筒を敵兵の下へ静かに転がした。

そして筒は見事敵兵の足に当たりその場に止まった。

「ん！？ 何だこれは。うわっ、煙が出やがった。うう、何だか意識がもうろうと……」

煙が噴射されてからまもなくして重い何かが倒れる音がした。そととケンたちは角から覗いてみると見事、敵兵は夢の世界へと旅立っていた。

そうケネスが使用したものは《催眠弾》と呼ばれるものであった。安全ピンを抜いてから一定時間後に筒から催眠ガスを噴射するという代物でケネスはこれを敵兵の重要人などを無傷で捕獲するために開発した。だから今回のような潜入任務に決して必要なものではなかったのであるが彼は何となくこの特殊弾を持ってきたのだ。まさに運命のいたずらとは恐ろしい。

「よし、これでこの先まで進むことができるな。つとその前にケン、ケネス、おねんね中の敵兵さんを他の巡回の兵士に見つからないところに隠すぞ」

アルマンは彼らに敵兵を待ち上げさせると眠りから覚まさせない

に慎重に移動しながら先ほどまでいた角のところへと運んだ。ケネスの話では強力な催眠ガスが使用されているのでちよつとやそつとでは起きないという。(ためにケンは眠る兵士の顔をいじくりまわしてみたが全く起きる様子はなかった。最もケンとケネスはあまりのおかしさに笑いそうになっていたため声が出ないよう必死に口を塞いで堪えていたためそのようなことを確認する余裕は微塵もなかった)。アルマンはそのような二人を眺めながらヤレヤレといった様子で軽くため息をついたことは言うまでもない)

必死に笑いを堪えていたケネスであつたがようやく波も収まつたようでその表情はいつもの読めない笑顔に戻っている。彼は視線を気持ちよさそうに寝ている兵士からアルマンのほうへと移すとその読めない表情のままある提案を投げかけた。

「隊長、わいええ案思いつきましたわ」

「ん？ どういった案だ」

隊長の返答に対し、ケネスは先ほどより更に口元を緩めその視線を再び足元で眠りこけている兵士へと向けた。

——時を同じくしてレイナ班——

「困ったわねえ、これじゃあ進むにも進めないじゃない」

レイナは壁沿いから一つ先の通路にいる敵兵を眺めながら困った様子でばやいた。敵兵の行動を監視してから彼は五分。敵兵の警戒は依然崩れる様子はなく、彼女らは途方に暮れていた。何とかこの

状況を切り抜けようと己が持つ全ての知識を搾り出して考えるも名案は浮かばない。マックが時折案を出すのだが彼女に言わせれば処刑ものだ。（ちなみにレイナは心の内で三回マックを処刑していた）ちなみにその彼が出した案というのが次の通りである。

マック案その一。敵が気づく前に先制攻撃。↓潜入任務を根本から否定するので却下。

マック案その二。自分たちの進行を妨げる敵を排除しつつ、目的のエレベーターまで突撃。↓その一とさほど変わらないので却下。マック案その三。巡回の兵士などはなからいないと自分に言い聞かせる。↓却下、理由は説明するのも面倒なので省略。

このように全く役に立つ案は出ず、レイナはため息を付かずにはいられなかった。ふと彼女は先ほどからやけに静かなレオンに視線を向ける。こういう時ほど役に立つはずの彼が意外にも一度も出していないことに彼女は不満を感じると共に不思議に思っていた。そんなレオンはいつも以上に黙り込み、どこから出したのかあの古文書を黙々と読んでいる。

レイナは任務中に本を読むなどいったいどういう神経をしているのかと彼を怒鳴りたくなったが魔術師であり策略家でもある彼が何の考えもなしに本など読むはずがないと瞬時に悟り、彼女は彼がこの状況を打ち破る解答を見つけるのを待つことにした。

しばらくしてレオンは静かに本を閉じた。どうやらそれ相応の打開策を閃いたらしい。彼はレイナと目を合わせると三人にしか聞かない囁くような且つ、くつきりとした声でその名案を語りだした。

「うーん、いいんじゃないかしら。ワタシはそれに賛成よ。マックはどう？」

「俺は姐さんがいいんでしたら一向に構いませんぜ。まあ、レオン

の考えよりまともな案が浮かびやせんし」

両者の賛同を得たレオンは少し頬を緩めるとすぐさま彼の言う名案を実行することにした。

彼は静かに意識を集中させるとゆっくりとある言葉を口ずさみだした。彼の口から発せられる言葉はまるで木で出来た笛の音色のように柔らかく、またそれらは呼吸をしているかのように生命を感じさせた。

レオンの右手が徐々に光を放ちだす。光は見る見るうちに大きくなりまたその輝きも強くなる。そしてゆっくりと右手を掲げると仕上げる詠唱を口にする。

「絶対なる虚にして心奪いし幻影よ、その妖気を持つて心弱き者に一時の幻を… トリージュ！」

レオンの詠唱が終わると共に彼の右手に集いし光は目の先にいる敵兵目掛けて勢いよく飛んでいく。敵兵は飛んでくる光に気づき驚きの声を上げるが光が彼の体を包み込むと彼はその場に崩れ落ちた。敵兵が倒れこんだのを確認するとマックは恐る恐るその兵士に近づいた。するとどうだろう。その兵士はとても満足げな顔で寝ているではないか。マックは軽く敵兵の顔を叩いてみたが起きる様子は全くない。

巡回の兵士が起きないことを確認するとマックのほうにレイナたちも歩みよる。そして彼らの足元ですこやかに眠る兵士を他の敵兵から見えないところまで運び、彼らは再び、目的のエレベーターに向かって進行を始めた。

「それにしてもすげえなあ、魔法ってのは。あの野郎、無様に眠りこけていたぜ！」

足を進める中、マックは先ほどの出来事に無邪気な子供のように興奮していた。

彼は魔法を間近で見るのが初めてなのだ。この世界において魔法というものは非常に珍しく、滅多に見れるものではない。それは魔法を使用できる者が非常に少ないためである。そもそも魔法というものには誰にでも使用できる技ではない。この世界において魔法とは大気中に漂う《フェイン》と呼ばれるエネルギーを詠唱によって具現化させるものを指す。このフェインなるエネルギーは常人には見ることすらもまた感じることもできないが魔法使いと呼ばれる者たちはこれを感じることができる。

人間は脳を半分も使用せずに死んでいくといわれるように常人の脳には眠る部位が多く存在する。時折、普通の人より特異な能力を持つ者が誕生するがそれはその眠れる部位の一部を使用できることが要因であると考えられている。魔法使いはその眠れる部位の全てを使用できる者たちなのだ。つまり本来人間が持つ脳の力を100%引き出すことができる者たちなのである。

とある学者の考えによると彼ら魔法使いが魔法を使用できるのは、我々の体内に流れるかすかな超文明の血が運良く開化したためだという。それは超文明の遺跡から見つかった彼らの生活が記された記録によつて彼らは誰しもが魔法を使用でき生活の中に取り入れていることが判明しているためだ。つまり現在、ルフィスに住む人々と超文明の人々は血が繋がってはいるが、何千年という時を経て彼らの血は日に日に薄れていったため今では魔法を使用できる者が少数になってしまったという。よつてマックの反応は決して過度なものではないのだ。

マックほどではないがレイナもまた内心興奮気味であつた。そしてより一層自分の隣にいる少年とも思える若僧が頼もしく見えた。それからレオンは二度同じように巡回の兵士に幻惑の魔法を使用し、彼らはエレベーターを肉眼で捉えることができる角までやってきた。エレベーター前には二人の兵士が持ち場を離れずに見張つて

おり、彼らは隙を見せる様子はない。

しかし今度もまた同じようにレオンに活躍してもらえばいいのだとマックは考えていたが、当本人は黙り込んでおり、魔法を使用する動作を見せない。不思議に思ったマックは何の考えもなしに、沈黙を続ける銀色の眼の青年に質問した。

「おい、今度もまたあの幻惑の魔法を使用すればいいんじゃないのか？」

するとレオンは軽くため息を付き、マックを軽蔑するかのような眼差しで彼の質問に答えた。

「魔法を何か超絶したものみたいに思っているみたいだけどそんなに都合の良いものではないんだ。そもそも魔法には対象というものがあり、各魔法によって異なる。僕が先ほど使用したトリージュの対象は一人。だからあの魔法はここでは通用しないんだよ……」

その返答に対し、マックはあまり理解していないようで先ほどから首を傾げている。その様子を見てレイナは呆れた様子でレオンに代わって彼に説明をしてやった。

「つまり、敵は二人いるのに一人にしか効かない魔法を使用してももう一方が詠唱で発せられる光でこちらに気づいちゃうでしょ。そうすれば応援を呼ばれて私たちはその場で射殺されるか、捕まって拷問されるかどちらかの運命を辿るというわけ」

彼女の説明によってようやく現状を理解したマックは心の内に秘めた“突撃”という案を即座にやぶり捨てた。しかし、現状を理解したといっても状況が厳しいのが変わるわけではない。マックは潜入任務ということではいつもの装備の内一つの機関銃を置いてきたこ

とを少し後悔した。

彼女らが打開策を考えながらエレベーターのほうを監視していると、状況を更に悪くする事態が起きた。エレベーター前の兵士が五人に増えたのだ。これではもはや任務を遂行するのは至難の業だ。彼女らは一先ずアルマン班と合流しようと考えた。レイナは通信機の回線を開き、アルマンへとコールした。しかし、アルマンからの応答はない。

（どういうこと？ まさかアルマンたちの身に何かが！？）

レイナはアルマンへのコールを止めると、これからどうするかレオンとマツクに相談しようとした。今の厳しい状況と自分の精神状態では的確な判断はできないと考えたためだ。

「おい、あそこに誰がいるぞッ！」

突然、エレベーター前の兵士が怒鳴るような声を上げた。しまった、ばれた！ レイナのあせりは益々強くなった。彼女らはすぐさま肩に掛けていた銃を構え戦闘態勢を取った。

「うつそ〜ん」

エレベーターの方角から拍子の抜けた声がしたと思うと次に二つの重く倒れるような音がした。

レイナは恐る恐る顔をエレベーター前へとやった。するとどうだろう。先ほどまでエレベーター前の警備に当たっていた二人の兵士が倒れているではないか。彼女は一瞬いったい何が起きたのか理解できなかった。ふと残りの三人の兵士の一人と目が合う。レイナはすぐさま顔を引っ込めたが明らかにばれてしまった。彼女は自分のしてしまった失態を心の中でひどくののしったが今はそれどころで

はない。恐らく敵はすぐにもこの角から現れるに違いない。レイナは再びすぐにでも反撃できるよう身構えた。しかし、角からやってきたのは敵兵ではなく先ほどの拍子抜けした声であった。

「姐さん、もう隠れてへんでええでっせ」

レイナはその声を聞いて再び顔を角から覗かせた。するとそこにはこちらに向かつて手を振る三人の兵士がいるではないか。レイナは今度は全身をさらけ出すと慎重に彼らのほうへと歩みを向けた。レオンとマックも彼女に続いた。

兵士たちはまだ彼女らの緊張が解けていないのを感じ、ヘルメットを外した。

するとそこには彼女らが見覚えのある顔が現れた。

そう、三人の兵士とは敵兵に成りすましたケンたちだったのだ。

「いやあ、驚かせてすみまへんなあ。それにしても他の兵士と見分けがつかんほどの変装ぶりでっしやる？」

「すみません、驚かせてしまつて。でもオレ、刀差したまんまでしたから結構気づけたと思いますけど」

よく見ると確かにケンの腰には刀が差されてあつた。それによく考えてみるとあのような独特なしゃべり方をするのはケネス以外にありえない。レイナは自分もまだまだ半人前だなと深く感じてしまった。

「よし、これで全員が揃つたな。では、新兵器を拝みに行くとするか」

「そうね、それにもたもたしていると我々の侵入が敵兵にばれてし

まっわ。ちゃっちゃと終わらせましょう」

彼らはエレベーターへと乗り込むと謎の新兵器のある地下倉庫へと向かった。彼らが後にしたエレベーター前には二人の気絶した兵士と三着の脱ぎ捨てられた軍服が残されていた。

潜入【四】（前書き）

ほぼ半年ぶりの投稿です。読者のみなさん大変お待たせしました！
そして半年も待たせてしまい申し訳ありません。^^；今後このようなことがないよう気をつけたいと思います。m（__）m

潜入【四】

——とある場所、ある男の独り言——

「まさかここまで上手くいくとは……」

飾り気のないほろ暗い小さな個室で一人の男がブツブツとつぶやいている。その表情は小学生が教室の扉に仕掛けた黒板消しの罠に先生が見事引つかかるのを待ちわびているかのようにニヤニヤと笑っている。ただ、違うところは彼は子供でもましてや小学生でもないという点だ。男はどうみても成人であり、もうそろそろ初老を迎えてもおかしくない外見だ。男は先ほどから目の前にある光を放つ物体を見つめながらうれしそうに笑っている。光の正体は無数のディスプレイであり、それが唯一の部屋の照明になっている。画面には黒い点が六つ、固まって動いている。その点の延長線には何やら巨大な人が立っている。

「ふ、今に見ているがいい。アルフォードの犬め。最後に笑うのはこの私だ！ ふふふ、ハハハハハッ！」

男の笑い声は幾重にも壁にぶつかり不気味にこだまするのであった。まるでこれから起こることを誇示しているかのように……。

——バビル基地・地下格納庫——

そこは思ったよりも大きな空間だった。実際にどれほど降りたのかは分からないが確実に日の光が届かないところであるのは確実だ。格納庫の天井には大量の照明が地下であると感じさせないほどの光を放出している。

ケンたちはエレベーターを出れば何人かの敵兵と戦闘になるだろうと予測していた。しかし、結果は全く正反対なものであった。

全く人がいないのだ。監視の兵も、整備員も、科学者も、人っ子一人その空間には存在しなかった。それは異常な光景であり、余計にその空間を巨大なものに感じさせた。

「これはどういうことだ…。まさかオレたちの侵入がばれたのでは！？」

「いや、それはないだろう。もしそうであつたらとつくの昔に敵兵に囲まれているはずだ。しかし、確かに妙だ。各員、周囲の警戒を怠らずに進むぞ」

アルマンの合図とともにケンたちは弧を描くように隊形を組んだ。しばらくすると次の格納庫へとつながる扉が見えてきた。扉には嚴重なロックが掛かっていたがレオンはそれをものの数秒で解除してしまった。天才ハッカーにとってこの嚴重なロックも軽いパズルに過ぎないのだろう。

扉を通り次の空間へと入るとそこには先ほどの空っぽな空間とは打って変わって様々な機材がひしめき合っていた。そしてその奥に一体の巨大な人の形をしたものが威厳たつぷりに佇んでいる。

「これが例の新兵器ですか？ 何と云うか今までの機動戦車とあまり変わらないような気がするのですが？」

「確かにそうだな…。どうやら詳しく調べる必要がありそうだな」

ケンの述べたとおり、その機動戦車は外装が少々異なるだけで従来のものとさほど変わらないように見える。アルマンが言うようにシステム面におけるデータをみないことにはその違いを発見することはできないようだ。

隊長の指示の下、ケンたちは各々の調査目標へと向かった。ケンとアルマン、レイナとマツクは機体の外装を詳しく調査。レオンとケネスはシステムデータを調べるため北東にある制御コンピューターへ。

周囲の外装をくまなく見渡したケンたちであつたが結果は思ったとおり、収穫なしであつた。ただ、背面に巨大な翼状の形をしたブースターがあつたことと通常の機動戦車に比べ胸部が異様に厚いことが気に掛かった。

その答えはすぐに分かることになる。

「隊長、みなはん、至急わいのところに来てくれまへんか？ 大変おもしろいもん見つけましたがな！」

ケネスの気の抜けた声が制御コンピューターの方から聞こえてきた。しかしその声はいつもとは違い、若干ハリがあつた。

急いで向かつてみると画面には目の前にある機動戦車の設計図が表示されていた。

「…簡潔に述べます。この機体は自由に空を飛ぶことができます…」

「ん？ そのどこがすげえんだ？ 飛行能力を持つ兵器なんて山ほどあるじゃねえか？」

「はあ、これやから頭悪いんは面倒なんや」

「なんだと〜!？」

レオンの説明する意味がまるで理解できていないマックはケネスが言うほど頭が悪いわけではない。確かに彼が言うように現在の技術で飛行能力を持つ兵器はたくさん存在するのだ。しかし、肝心なのはその飛行能力を現在の戦争で主戦力となっている機動戦車に搭載したということにある。

「まあまあ、落ち着きいやあ〜。わいは今からあんたのためを思つてやさしく説明してやろうと思つとるんやから」 ええか、現在において戦争の左右するんは機動戦車や。しかしこの機動戦車は単独で飛行ができたため運送に当たっては専用の輸送機が必要になつてくるつちゆうわけや」

「なるほど…。つまりこの機体は単独での行動範囲が急激的に広くなるというわけだな」

「それだけじゃないわ、現在の機動戦車は機動戦車同士が戦うことを想定して設計されているため空からの攻撃に対して防御手段がないわ。つまり、もしこの機体に空から攻撃されたらワタシたちの機動戦車はいともたやすく蜂の巣にされてしまうわ」

「さすがは隊長に姐さん〜」 どこかのアホとはえらい違いやなあ〜」

「へっ、どうせ俺はアホだつてんだ!」

「…そんなことよりもっと重要なことがあります。これを見てく
ださい……」

レオンの一言に引かれて皆、モニターに注目する。そこには飛行能力の事実が吹き飛ぶようなものが映し出されていた。

「こ、これは……！？ ま、まさかつ！」

モニターに映し出されたものにケンは自分の目を疑ってしまった。いや疑いたかったというべきだろうか……。そこには彼にとって最も衝撃的な兵器の名が記されてあった。

「【オーバー・デス】……！ オレの町を…家族を奪ったあの兵器が、こいつに！？」

「…疑いたくなる気持ちは分かるけどこれは紛れもない事実だよ、ケン。この戦車は胸部にオーバー・デスを搭載している……。しかもケンの町に放たれたものより更に威力が強くなっている。これが量産されてしまったらアルフォードは…、地図から消えてなくなってしまう……」

この事実にはケン以外の者たちも心の底から恐怖が湧き出てくるのを感じた。何せその兵器は紛れもなく今自分たちの目の前に存在するのだ。

動揺を隠し切れない隊員たちにアルマンは隊長としてまず落ち着くよう促した。本当は自分も動揺していたわけだがここで隊長までも冷静さを失っては任務の遂行に支障をきたし更には隊員の生存にもかかわってしまう恐れがあると考えたためである。

彼は一通り皆が落ち着いたので見計らうと次にレオンに何か対処法がないか訊ねた。

「…あるとすればまずコンピューター内にあるこの戦車のデータを

全て消去し、ここにある完成品も破壊することです。今のところ製造されているのはこの一機だけのようですから恐らくこれで対処することが出来るはずです……」

「よしレオンは早速データの消去を始めてくれ。他の者はおれと一緒にこの戦車を破壊するぞ」

アルマンの掛け声と共に一同は行動を開始しようとした。その時である。四方から不気味な笑い声がひびいてきた。

ケンたちはすぐさま構えたが辺りには誰もいない。しかし未だに笑い声は聞こえている。

「ふふふ、はははははっ！ 無駄だ、アルフォードの犬ども！ どこを見渡そうが私は貴様らのいる格納庫にはおらん」

「っということはスピーカーか……。どこからおれたちを監視しながら放送しているようだな」

すると声の主は先ほどよりも大きく笑ってみせた。どうやらアルマンの推測は正しいようだ。

「その通りだ、戦神よ。貴様らには見えなだろうが私からはお前たちの姿がはっきりと見える。さてさて貴様ら行動はこの基地に潜入してから拝見させてもらっていたわけだがよくぞこの格納庫までたどり着いたものだ。誇りに思っているぞ！」

「なんかわいら褒められてる？」

「馬鹿、ナメられてんだよ！」

「んなこと分かってますがな。全くこれだから頭固いやつは」

「いちいちカンにさわるやつだな、お前は！」

ケネスとマツクの漫才を見ていたかどうかはよく分からないが声の主はそのやり取りがなかったかのように話を続けた。

「そんな貴様らに褒美をやろうと思っている。是非とも受け取ってくれたまえ。ちなみに拒否権はないぞ」

「ずいぶん一方的なプレゼントね。それじゃ女の子にモテないわよ？」

「ふふ、ご忠告ありがとう。だがいつまでその余裕が続くか楽しみなものだ…」

レイナの挑発に全く乗ることもなくむしろ更に余裕を感じている声の主はその後ぶつとりと返事をしてこなくなった。

皆が不思議がっている時、突如床の下からはつきりと聞こえる金属音が聞こえた。その音に続けとばかりに今度は格納庫が揺れ始めた。

「いったい何が起ころうとしているんだ！？」

「……！？ ……隊長大変です。何者かによってデータの削除を中断させられました。再度アクセスしましたが…拒否されました」

レオンの発言が大きな意味を示していることは分かっていたがアルマンは先ほどの揺れに気を取られていた。

今度は天井が中央から左右にゆっくりと別れ、次第に彼らに近づ

いてくる。いや実際のところは彼らのほうが天井に近づいているのだ。彼らに乗せた床は先ほどまで天井があつたところを通過すると更に勢いを増し上に向かって上昇していく。何枚目かのプレートが開け放たれた時、頭上より閃光が迸る。

そして戦いの場は彼らの意思に関係なく地上へと向かうのであつた。

——戦艦オルフィス・ブリッジ——

「それにしても遅いですね…。大丈夫でしょうか？」

ケンたちの帰りを待つリリスは予定通りなら既に帰還している彼らから未だに連絡がないことに不安を隠せないでいた。

「確かに…、いくらなんでも予定より遅れているのに連絡の一つも寄越さんのは変だな。恐らく連絡を寄越す余裕がないほどの状況が彼らを覆っているのだろう」

困惑するリリスとは逆にヒッターは冷静に彼らの状況を推測した。そんな冷静な司令の言葉にリリスは余計に不安を積もらせていた。

「そんな！？ それじゃ、すぐに救援にいかないと！」

手足をあたふたとさせながら叫び声に近い声を出すリリスを取り合えず落ち着けと言わんばかりにヒッターは彼女を手で制した。

「取り合えず落ち着け、リリス君。何も彼らが死ぬと決まっただけ

ではない。それに今すぐに向かったところで彼らの助けにはならん
だろう。とにかく十分ほど待ってそれでも連絡が来ない場合は救援
に向かうとしよう」

ヒッターの言葉に取り合えず落ち着きを取り戻したりリスは艦内
クルーに発進の準備をするよう艦内アナウンスの準備に取りかかっ
た。

一方ヒッターは、隊員たちの無事を信じ、ただじつと先を見据え
ていた。

潜入【五】

——バベル基地・地上——

ケンたちを乗せた床は最後の防壁を通過すると地上へと到達した。太陽は西へと傾き、空は紅色に染まっている。

辺りには障害物と呼べるようなものはほとんどなく、滑走路のように思えた。ただ先のほうに目をやると倉庫や建物らしきものもあり、どうやら機動戦車の動作をチェックするためのスペースなのだろう。

隊員たちが周囲に意識を回していた時、先ほどまでプツリと聞こえてこなくなつた声が再びスピーカーを伝って響いてきた。

「どうだね、貴様らの死に場所としては大層な場所だろ？　ありがたき思いたまえ」

「そいつはどうも。だが肝心の執行人を忘れているのでは？」

アルマンの言うとおり周辺には彼ら以外の誰もいなかった。隠れているということも考えられたが辺りには隠れるような場所はなくそれは不可能であつた。

するとその返答を待っていたかのように声の主は再びその不気味な笑い声を響き渡らせた。

「ふふふ、ははははははははははっ！　貴様らの目は節穴か？　いいだろう、そんなに死にたいならさっさと殺してやる。起動せよ、ユーファング！」

男の掛け声とほぼ同時に突如、目の前の機動戦車から低く重いうなり声のような音が響きだした。そして機体の装甲が小刻みに振動し始め、頭部にある三つのカメラアイ不気味に点灯した。それは機動戦車の起動を意味していた。

「う、動いた！？ オレたちが来る前から既に搭乗していたのか！？」

ケンたちの意表を完全に突いた機動戦車はその狂気の目で彼らを睨みつけると、腕部に備えられたアームガトリング砲の銃口を彼らに向けた。

「やばい、皆散れ！」

アルマンの掛け声と同時にアームガトリング砲は火を噴いた。間一髪、ケンたちはその健全な体を穴だらけにせずに済んだ。しかし、機動戦車の銃撃音はまだ続いており、彼らは全速力でその場から立ち去った。その時、部隊はちょうど二手に分かれる形になってしまいいケン、アルマン、ケネスはちょうど機動戦車に追われる形に、レイナ、マック、レオンの三人はその魔の手から一応逃れるという形になってしまう。

ユーファングの搭乗者もそのことを意識することなくアルマン班を追跡しだした。

突然の危機を何とか回避できたレイナたちはケンたちを心配しながらも少しほっとした。しかし、それもほんの一瞬の出来事であった。

再び、今度は別の地面が割れたかと思うとそこから新たなユーファングが飛び出してきた。型には02と記されておりどうやら二号機のようなようだ。

「げえ、もう一機あつたのかよ!? 反則だぜそりゃあ!」

マツクの批判の声を気にすることなく、ユーファング二号機は彼らの姿を捉えた。こうしてレイナ班も狂気に満ちた新兵器に追われることになる。

とにかく現状のような障害物のない場所での戦闘は不利と判断した彼らは目先にある障害物の群へと逃げ込むことにした。アルマンたちは模擬戦闘用の市街地へ、レイナたちはコンテナ群へと。

二機の機動戦車はそんな彼らを追い込もうとはせず、一定の距離を保ちながら当たるか当たらないかの瀬戸際に無数の銃弾を放つのであった。その姿はまるで野うさぎを追いかけるライオンのようであった。

——アルマン班——

追跡する速度を落とすことなく追ってくる一号機にアルマンとケネスは逃亡しながらも銃弾を浴びせた。銃弾は的確に機動戦車の装甲にヒットするのであったが一つとしてその厚い装甲を傷つけることはなかった。

「くっ、予想はしていたがやはりこの銃ではあの装甲を貫くことは難しいか…」

アルマンは他にも打開策を考え出してはいたがやはりそのどれもが決定打となるものではなかった。一瞬、彼は自らにかけられたリミッターを外そうと考えたがすぐにその考えを振り払った。彼の頭の中にはあの時の惨劇の画がはつきりと残っているのだ。

ふとアルマンはケンの姿が見られないことに気づいた。隣のケネスも気づいたようでお互いに顔を見合わせる。そしてどうやら同じ考えを浮かべたらしく。同時に後ろを振り返った。そこには追撃してくる機動戦車を向かえ撃つべく、仁王立ちでユーファングと向き合うケンの姿があった。

「ケ、ケン!?」

「ありやまゝ!?」

予想が的中したらしく二人はそれぞれの言葉を漏らした。当本人のケンは二人の視線に気づいたらしくアルマンらのほうへ顔を振り向けると確実に何かをしでかすつもりである表情で笑ってみせた。

「隊長、ケネス、ここはオレに任せてください!」

ケンはそのように言い放つと迫ってくる機動戦車のほうへと視線を戻し、手を腰の刀へと回す。そして一度深呼吸をすると足元に力を集中させ、目を閉じる。

精神を集中させ、中から湧き出る力をぎりぎりのところで体内に押し止め、機動戦車が間合いに入ってくるのを待った。

そんなケンをモニター越しで見ていた敵搭乗者は笑い飛ばし、何の警戒もせずにケンへと迫った。

そしてついにユーファングがケンの間合いに入った。

「天魔無双流奥義ゝ竜の太刀ゝ奥義：火竜!」

ケンは追撃してくるユーファングの脚部に急加速で突進すると、激しい連撃を放った。それは燃え盛る炎のように強く、激しい連撃であり、ケンは相手に反撃の隙を与えないほどにひたすら刃を喰わ

せ続けた。

するとユーファングの足は急に止まってしまった。装甲には傷はついていなかったがどうやらケンの放った連続斬りが効いたようだ。しかしケンの表情は喜んでおらずむしろ起こった出来事に信じられないようで啞然としている。

「火竜を食らって無傷だって!?　なんて装甲だ!」

その言葉を聴いたアルマンとケネスは至極当然の結果であるかのような目でケンを見つめた。

「あいつ、機動戦車の装甲を斬ろうと考えていたのか……。それにしてもまずいな……。あの戦車とまともにやりあっても勝ち目はないぞ。かといってこのまま逃げ続けても先は見えている。何か知恵はないか、ケネス?」

「うーん、そうですねー。もし基本構造が従来の機動戦車と変わらないのなら方法はありまっせ」

ケネスは先導してケンたちを狭い路地に誘い、機動戦車をかく乱すると手ごころな建物に身を潜め、ささやくようにケンたちに策について話した。

「なるほど……。確かに理屈としては成り立つな。よし、やってみよう。おれとケンはやつをひきつけるぞ!」

アルマンとケンは建物から飛び出すとユーファング目掛けて威嚇攻撃を始めた。後ろにいるケンたちに気づいた搭乗者は機体を方向転換させ、彼ら目掛けて反撃を行った。しかし、さすがはケンとアルマン、自らに向かってくる弾丸を刀で弾いたり、すれすれのこ

ろでかわしながら相手を自分たちに集中させた。
その隙にケネスは建物の屋上へと向かうのであった。

——レイナ班——

「おわつと！？ あの野郎、コンテナごと俺たちを踏み潰すつもりかよ！」

当然、マツクの罵声など敵搭乗者に届くはずもなくレイナたちは依然追撃の足を止めない機動戦車を背に迷路のようなコンテナ群を駆け回っていた。

「それにしてもこう逃げ続けていただけじゃワタシたちの体力がもたないわ。ねえレオンあの機体について何か分かったことはないの？」

レイナの言葉は冷静さをまもっていたがその表情には疲れが見え始めていた。マツクはまだ罵声を投げれるほどの余裕はあたが彼女に質問を投げかけられたレオンに至ってはそろそろ限界といった感じである。

それでもレオンは残りわずかなエネルギーの一部を脳へと回すとフル回転で頭の回路を回し始めた。そしてものの数秒で一つの案を導き出した。

「…先ほど邪魔が入って50%ほどしか手に入りませんでしたがいこれらの情報から考えるに上級魔法ならあの機体を破壊することができるかもしれません。ですが上級魔法を発動させるためにはかなり

の時間が必要です。その時間をどうにかして作らなければ僕らが生きて帰ることはできません……」

レオンの返答にレイナはしばらく黙り込む。そしてその案が今考えられる中で最も有効な方法であると判断した。

「分かったわ、その案でいきましょう。ワタシとマックでやつを引きつけるわ。レオンはその間に上級魔法を発動できるようにしておいて。マック、行くわよっ！」

直後、レイナとマックは90度転回し、後ろから追撃してくるユーファングの股下を上手く駆け抜けた。完全に不意をつかれたユーファングの搭乗者はどちらの敵を狙えばよいのか判断に迷った。その間にレオンは機動戦車の死角へと隠れ、更にレイナたちが威嚇射撃を放ち、完全に搭乗者の意識を自分たちへと向けさせる。レオンの姿を見失ってしまったユーファングは仕方なくレイナたちに標準を合わせた。

無数に放たれる銃弾、間一髪のところではレイナたちはコンテナに身を伏せることができた。休む間ものなく、コンテナから身を乗り出すと再び威嚇射撃を行う。

「くっ、なんと撃つても同じことを！」

彼らの挑発に見事にかかった敵搭乗者は自らが敵の罠にはまっていることなど思いもせず、彼らのシナリオの上を駆け走る。

レイナたちが機動戦車を追いかけていている時、レオンは上級魔法発動のための詠唱を唱え始めていた。不気味に響くそのつぶやきのような詠唱は周囲の温度を急激に下げ始める。空気は重くなり、まるで全てを拒絶する壁がレオンを取り囲んでいるようである。

黙々と詠唱を唱える彼の額からは無数の汗が噴出し、ダラダラと

その繊細な頼を通りながら足元へと落ちていく。上級魔法がどれほど発動者に負担をかけるのかが正に見て取れる状況であった。呼吸も荒くなり、その目は虚ろになりつつあったがそれでもレオンは気力で意識を保たせ、詠唱を続けた。

全ては自分を信頼し、命をはってしてくれる仲間のために…。

潜入【六】

——アルマン班——

「ちょこまかとすばっしこい奴らめっ！」

直後、ユーファングのするどい爪先がケン目掛けて垂直降下してくる。ケンは自分の頭上からやってくる攻撃に半呼吸気づくのが遅れ、すぐ目の前までやってきているその巨大な鉄の柱に見とれてしまふ。

「おわつと！？ 間一髪！」

すぐに思考を切り替え回避に全神経を集中させたため何とか回避に成功はできたものの回避するだけで精一杯だったため受身が全くできず、ほぼ地面に激突するかのように転んでしまふ。

そんな自分を惨めに思ったケンであつたが先ほどまで自分のいたところに巨大な鉄槌が突き刺さっているのを目の当たりにするとそんなことがどうでもよくなってしまった。

「ケン、何をしている！？ しつかりしろ！ 敵の動きを体で追うな、目で追うんだ！」

ケン自身の心の際を見て取ったかのようにアルマンはすかさず彼に釘を刺した。ケンは確かに今回は運良く回避することができたが下手をすれば確実に死んでいたのだ。戦場で運を味方につけることは大切ではあるが運命の女神は常に心変わりが激しい。よって彼女に身を委ねることは命を縮めることにつながる。

アルマンは以前、命の危険を見事回避してきたと自慢する何人もの兵士に会ったことがある。彼らは、自分には運命の女神がついていると述べ、そこに自分の判断ミスがあることなど気にもしていなかった。そんな彼らは案の定、次の戦闘で命を落とした。そのような兵士を見てきた彼だからこそ、ケンには彼らと同じ運命を辿ってほしくないと思い、あえて彼に厳しい言葉を放ったのだ。

ケンもアルマンの述べたいことに気づいたらしく、すぐさま気を引き締めなおした。

「了解です！ それにしてもケネスはまだですかね？」

ケネスが単独行動を取り始めて数分が経つが一向にユーファングの動きが止まることはない。ケンは彼を疑ったわけではないが内心不安を感じていた。

「おれたちがあいつを信じなくて誰が信じる？ 安心しろ、ケネスなら必ずやってくれる。だからおれたちもこいつの攻撃を避け続けるんだ」

一方のアルマンは完全にケネスを信用していたようだ。いや、実際には少し違う。アルマンはケネスが失敗した時の対処も考えていたため、彼を信じることができたのだ。

それはケネスを全く信じていないとも取れる彼の内心ではあるが、アルマンは隊長である。隊員たちを危険から守らなければならない責任があるのだ。そのためには幾多にも考えられるパターンを考慮しなければならぬ。ケネスが失敗した場合も所詮、彼の中にあるパターンの一つにすぎないのだ。

ある意味、非情にみえる考え方ではあるがこれが隊員たちの命を預かる隊長というもののなのだ。（最も、アルマンはやはり心のどこかでケネスは確実に成功してくれるという根拠のない確信を抱いて

いたわけだが…)

「何を企てているか知らんが所詮生身、このユーファングの敵ではないわっ！」

先ほどから反撃も逃げることもしない彼らの行動に何らかの疑問を覚えた敵搭乗者ではあったが、彼自身、ユーファングに妄信とも呼べるほどの信頼をおいていたため生身の彼らが勝つことなどありえないと感じていた。

ユーファングの攻撃は更に勢いを増し、またケンたちも次第に息を挙げはじめ、刻一刻と体力の限界に近づいていた。

一方、そのケンたちの命を託されたケネスはというと……。

「ゼッ、ゼッ、ふーっ、流石に五階建てビルの階段を一気に駆け上がるのは堪えるわ。っと休憩しとる余裕もなかったんやった、早速準備に取り掛からんと」

ようやく何十にも及ぶ階段を上りきり、障害物として造られたビルの屋上へとたどり着いた。

ケネスは一度深呼吸をして気持ちを落ち着かせるとすぐさま、ケンたちと交戦するユーファングが一望できるポイントに向かう。そしてバックパックの中から何点かの部品を取り出すとそれを組み立て始めた。

「これをこうして…っと、あとはこいつを装填してと…よし準備完了やっ」

出来上がったものは全体的に緑色の迷彩が施されているグレネードランチャーと呼ばれるものであった。これは以前、ケネスが休暇を利用した自分専用の武器であり、自らが作った特殊弾をより遠く

へそしてより正確に放出する代物である。またリボルバー構造にな
っているため最大六つの特殊弾を連射可能である。

しかし、今回ケネスは自作の特殊弾を一発しか装填しなかった。
そして何より重要なことはこの特殊弾を撃つのはこれが始めてであ
るということだ。つまり実際にどのような結果を生むのが正直分
からないのである。

「はゝ、こげなことになるんやったら事前に時間を取ってでも試し
撃ちしとけばよかったなあゝ。まっ、理屈的には大丈夫なんや、何
とかなるやろゝ ほな頼むでゝ《グレネス》！」

グレネスと呼ばれた特殊グレネードランチャーの標準をユーファ
ングの背部に定めるとケネスは思いつきトリガーを引いた。

次の瞬間、特殊弾は激しい音とともにグレネスから射出されると
ユーファングの背部目掛けて猛突撃した。撃った当本人であるケネ
スはというあまりの強力な反動に耐え切れず、二、三回おもいつ
きり後転している。

勢いよくユーファングの背部に突撃した特殊弾はその勢いを止め
ることなく機動戦車の装甲を突破、そのまま敵搭乗者のいるコック
ピットへ到達した。

「ん？ 何だこれは……っ！！！！！！」

敵搭乗者が上から落ちてきた特殊弾に気づいた直後、特殊弾は激
しい閃光とともに爆発した。その爆発の威力は激しく、ユーファ
ングの表面積を膨れ上がらせると内部から勢いよく吹っ飛ばした。

「爆発した…。ケネスがやったんだ！ ほっ、ギリギリセーフ」

「やるやつだとは思っていたがまさか本当に機動戦車を生身で破壊

してしまうとは…、正に曲者といったところだな」

ケンとアルマンは目の前で起こったユーファングの内爆発を見てようやく張り巡らせていた緊張の糸を解いた。ケンに至ってはその場に座り込んでしまっている。どうやら本人が述べたように限界だったようだ。

そんな二人の上空からケネスが蜘蛛の糸…もといヴェイヤーを使ってゆっくりと降りてくる。

「よつと、ふゝ間一髪というところでしたな。まっ、わいの言うた通りにことが進んでなによりですわ」

いつものような気の抜けた調子で述べるケネスであったがその表情はどこか違っていた。

ケネスの異変に真っ先に気づいたのはアルマンであった。

「!? おい、ケネス！ おまえ左腕が……」

そうなのだ。アルマンが述べたようにケネスの左腕は力なくダリと肩にぶらさがっているのだ。先ほどの特殊弾を射出した時に強力な反動でストックを固定していた左肩が脱臼してしまったのだ。

「あつ、これでつか？ ちょっと反動が強すぎて外してしまっただけですわ。いやあゝ、やはりまだまだ改良の余地がありますな。まっ、見た目とは違って全然たいしたことありまへんので大丈夫ですかな」

強がってはいるものの脱臼した左腕はブラブラと力なくゆれており、またその表情は笑ってはいるものの苦痛で歪んでいる。

「まったく、何が大丈夫だ。苦痛で顔が歪んでいるぞ。ほら、ちょっと肩を見せてみる」

ケネスはそれでも大丈夫と笑いながら強がったものの、最終的にはアルマンの気迫に負け、しぶしぶ肩をアルマンに見せた。

「んー、内出血により青あざができてはいるものの、骨事態は折れていないようだな。よし、ちょっと痛いが我慢しろ。よっとっ！」

ゴツキン！ という鈍い音とともにケネスは悲痛な叫びを挙げながらゴロゴロと地面を転がっている。しかし、気がつくやうにケネスの左肩は見事にはまっていた。

「おおー、隊長ってこんなこともできるんですね！」

「こらケン、わいが思いっきり苦しんだのにそれはないやろー！」

ケネスの悲痛の叫びよりケンにとってはアルマンの荒技の方が興味を抱いたようだ。さすがのケネスもケンの前ではかなわないようだ…。

「まっ、とりあえず一段落ついたことですし、副隊長達を加勢にいきましよう！」

そんなケネスのつつ込みをさも無かったかのようにケンはアルマンに次の行動に移ることを提案した。

そんなケンにケネスは心底あきれた様子で額に手を当てるとともにある意味尊敬の念を感じていた。

二人の様子をクスクスと笑っていたアルマンではあったが任務遂行中であることを忘れてはおらず気を引き締めなおすとケンたちに

レイナたちの援護に向かうことを告げようとした。

その時、アルマンの通信機がコール音を響かせる。一瞬、何事かと驚いたアルマンではあったがその相手が作戦中滅多にコールしてこない司令からであったので益々驚いた。驚きを隠せないアルマンではあったが出ないわけにもいかなないのでいったいどういう用件だろうと思いつながら通信に出た。

「はい、こちらアルマン。司令、作戦中にこちらから連絡をよこすとはどういったご用件ですか？」

「ん、その声から察するにどうやら無事のような。いや、あまりに作戦時間予定をオーバーしているので今こちらから出向いてやっているのですそれを伝えただけだ」

司令から発せられた言葉はあまりに驚愕なものだった。司令塔である戦艦オルフィスがわざわざ危険を承知で任務現場にやってくるというのだ。あまりの事実アルマンは冷静さを失いそうになった。

「！？ 司令自らこちらへ向かっているのですか？ そんなの自殺行為ですよ！？ …確かに救援に来てくださるのありがたいかぎりではありますが、確実に的になるようなものですのでそう長くは続けられませんよ？」

アルマンの問いにノリスは高々に笑うと、全くそのような心配は微塵もしていないかのような自信に満ちた返事を返してきた。

「それくらい分かつとる。心配するな、策は考えておる。これから五分後、今から指定されたポイントに降り立つのでお前たちは先にそこに集合しておけ。そうすれば数秒で離陸することができる」

司令の返答にアルマンはもはや呆れ返っていた。例え、自分たちが数秒で乗り込めたとしても降りるまでと離陸するまでで数分掛かるのは目に見えていることであり、オルフィスを危険に晒すことに何ら変わりはないのだ。

しかし、あまりの司令の自信に満ちた声にアルマンは【戦場と稲妻】と呼ばれた司令ならば、その無謀とも呼べる行動でも何とかしてくれるという根拠のない安心感を感じていた。

「何て無茶な考えなんですか…。まあ、司令らしいといえば司令らしいですけどね…」

「ま、そういうことだ。くれぐれも遅れることがないよう他の隊員にも伝えておくように。ではまた会おう！」

通信を終えるとアルマンは覚悟を決めた顔でケンたちのほうを向いた。そして司令自らが救援に来ることと、そのポイントに今から五分後に向かわなければならぬことをケンたちにそして通信でレイナたちに伝えた。

ケネスはその司令の行動に完全に苦笑していたがケンは何故か体から何かが湧き出ているかのような熱い目で司令の行動に感動している。

「何でそんな顔が出来るんだケン？ …まあそれは良いとして、問題はこのポイントに五分以内に行くためにはレイナたちを援護しに行くことはあきらめなければならないということだ。まあ、あいつらも大丈夫とは言っていたのでおそらく大丈夫ではあるだろうが…。とにかくおれたちはレイナたちを信じ、救援ポイントに向かうぞ！」

アルマンの答えにケンたちは賛同したようで、三人はすぐさまそのポイントへと向かいだした。ただケンはどこか嫌な感じを覚えて

いた。それがいったい何なのかはよく分からなかったがとにかくはつきりとした悪寒を感じていた。

それがまさか近い未来で起きる惨劇を暗示しているとも知らずに……。

潜入【七】

——レイナ班——

ケンたちが一段落ついた頃、レイナたちは相変わらず、ユーファングに追われていた。……訂正しよう。正しくはマツク一人がユーファングに追い回され、レイナはその様子を物陰から覗いていた。レイナはちょうど先ほどかかってきた通信を取るために囹役をマツク一人に任じたのだった。

「そうそつちは片付いたのね。…分かったわ、こつちは大丈夫だからアルたちは先にポイントに向かって」

通信を終えたレイナは先ほどアルマンに自信満々に大丈夫と言いつ切った時とは打って変わって、深くため息をついた。どうやら内心では彼に余計な心配をかけなくなかったため無理をしていたようだ。

「っということだから二人とも急いでこいつを何とかするわよ。レオンあとどれくらいかかりそう？」

「…はあ、はあ……、あと…二、三分待つてください……。それまでは何とか持ちこたえてください……」

通信から伝って聞こえるレオンの声は彼の疲労が極限まで来ていることを明示していた。だがレイナはあえて彼に余計な言葉をかけないようにした。確かにレオンはまだ十代の子供であるが列記とした軍人である。軍人である以上、彼は十代にして自らの命を国に捧げることになる。ここで彼に大丈夫、と声をかけることは軍人であ

る彼を侮辱することになるのだ。

「分かったわ、レオン。ワタシたちのことは気にせず、詠唱に専念しなさい。つということだからがんばるわよ、マック！」

『それならそんなところに隠れてないでこっちを手伝ってっ…ぬおおおおおおっ！』

レイナが物陰から顔を出すとマックが大柄な体格に似合わず、ユーファングの攻撃を機敏に回避している姿が目映った。

右から左へ、左から前へ、前から右斜め前…と見せかけて左へ。その絶妙な回避テクニクを披露するマックであったがその表情はこれっぽっちも余裕が見えない。むしろ、鬼の形相のような顔で自分の体にムチを打っているようだ。

「ほれ、どうした。そんなんじゃ踏み潰されるぞ！」

「くそ、てめえ絶対〴〵にぶつ殺す！ 何が何でもだこんちくしょう〴〵！ いいか、見てろ！ 俺様の根性見せてやる〴〵！」

ユーファングの搭乗者に弄ばれていることに当等堪忍袋の尾が切れたマックはいつたいどこにそのような余力が残っていたのか、肉体の限界を超えて急加速した。

「なっ、加速しただっ！？ あいついつたいどこにそんな体力が？ ええい、ふざけたやつめ！ ——っ！！ 何だ！？」

目の前で起きたマックのガッツある行動に意識を持っていかなかった敵兵はいつのまに後ろに立っていたのか、レイナから不意の一発を食らってしまった。

実際は機体にダメージを与えたわけではないので意味はないのだが不適に笑う彼女の表情に敵搭乗者は一種の恐怖を感じた。

相手はこちらに決定的なダメージを与えることは出来ない。そのうえ生身である。どう考えても向こうに勝機はないはずである。そのことはユーファングの搭乗者もよく分かっていたはずである。だが、今日の前にいる女兵士は機動戦車を目の前にしても恐怖に支配されることはなく、直立して狙撃銃を構え、その銃口をこちらに向け動こうとしない。モニター越しから見えるその彼女の眼は完全に獲物を狙う狩人の目であり、敵兵は一瞬、蛇に睨まれて動けなくなつた小動物のような感覚に陥ってしまった。

「うち、ちょこざいことを。そんなことをしてもこのユーファングに傷一つ付けられるものか！」

どこからともなくあふれ出す焦りによつて搭乗者に先ほどまで存在した余裕はどこにもなく、いち早くこの恐怖を生み出すレイナを始末するため一心不乱に彼女にアームの矛先をぶつけた。

だが何度攻撃しても彼女に攻撃は当たらない。アームの矛先が彼女に当たる前に一足早く彼女がふわりと回避してしまうのだ。敵兵はますます彼女の恐怖に飲み込まれていた。

「ダメージを与えられなくても感情的になつた人間の動きを読むことなんて造作もないことよ。そんな単調な攻撃でワタシを仕留めようなんて百年早いわ！」

レイナの言葉に余計に焦りを感じた搭乗者は搭載されている全弾丸を彼女に放とうとした。

突如、またしても背後から強い衝撃が彼を襲つた。何事かとユーファングの機体ごと振り返るとそこには先ほどまで自分が弄んでいた大男が背中に背負っていたガトリング砲をこちらに向けているで

はないか。

「てめえ、姐さんを仕留めようなんざ良い度胸してんじゃねえか！　だがな、例え御天と様が許そうが、神獣様が許そうが、この俺様がいるかぎり姐さんには指一本触れさせやあしねえ！」

ここぞとばかりに決めるマツク。一見冷静に見ればその姿は単なるバカでしかないのだが、敵兵は完全に彼の迫力に押されていた。そんなマツクに半ば呆れながらもどこか関心を覚えたレイナは敵兵に気づかれないように彼にハンドサインを送った。

サインを受け取ったマツクは了解の意味のアイコンタクトを送るとすぐさまユーファングの股をぐりぬけ彼女のほうへと回った。そして一斉にユーファングに向けて砲撃すると残りの余力で敵兵に背を向ける形で駆け出した。

砲撃の衝撃でわれに返った搭乗者はすぐさま機体の向きを転回させるとレイナたちの追跡を開始した。まさかそれが陽動であるなどとはその時の彼は微塵も思っていなかった。

レイナたちがレオンの下へユーファングを誘導していた時、銀眼の青年は方膝を地面につけ、崩れ落ちていた。

「……はあ、はあ……。やっと結界詠唱を詠み終えた……。あとは……降臨詠唱を詠むだけ……——っ！　ぐっ……こんな……ところで……倒れてなるものか……。僕のために……困らなくてくれる……副隊長や、マツクのためにも……僕は……やらなくちゃいけないんだ……」

必死に上体を起こし立ち上がったレオンは最後の力を振り絞り意識を集中させた。結界詠唱を終えた彼の周りには無数の光の粒子が彼を囲んでいた。光の正体は大気中に存在するフェインであり、いつにもまして妖々しく輝いているのは上級魔法が大量のフェインを

使用するため、より多くのフェインが彼の詠唱に呼応しているためである。

夕焼けによって赤く照らされる中、レオンの周りには更に多くのフェインが彼の詠唱に誘われ集まってきている。フェインの光の柱に包まれる中、彼は最後の仕上げへと乗り出した。

ちょうどその頃、レイナたちも既に限界を超している脚にムチを打ちながら着々とレオンの下へユーファングをおびき寄せていた。

敵搭乗者は未だに彼女らの策に気づいておらず、ただ彼らを始末することで頭がいっぱいだった。

そしてレイナたちは夕日を背に佇む光を纏う人影をその目に捉えた。

「レオン、約束どおり連れてきたわよ。最後の仕上げ頼むわよ！」

「頼むぜ、レオン！」 上級魔法の発動準備、終わらせておいてくれよ！」

各々、銀眼の魔術士に自分たちの想いを託すとユーファングの不意をつき、それぞれ左右に散開した。

敵搭乗者も一瞬、どちらを追跡するか迷ったが目の前に佇むレオンに気づき、考えるまでもなく、彼にターゲットを合わせた。

ユーファングがこちらに向かってくることなど気にもせず、レオンは残りの詠唱を一気に詠み始めた。

「…その身に消えることなき灼熱の炎を宿し獄炎の精霊よ、汝のその全てを焼き尽くす炎を持って我に仇なす愚者を焼き滅ぼさん、ゴウエンフレイム！」

レオンが最後の一字を読み終わると、彼を包んでいたフェインの光柱は燃え盛るように激しく閃光を放つと彼の周りから消え失せ

た。その刹那、ユーファングの周りにこの世のものとは思えないまがましい炎が現れた。紅く燃え盛る炎は機体を包み込むと、更に勢いを増し、巨大な火炎柱へと変化した。

灼熱の炎に包まれたユーファングは数秒も経たぬうちに、その頑丈な装甲を溶かされ、自らも火を放ち、巨大な火炎柱の一部となった。

敵搭乗者は断絶魔も放つことなく、まがましき炎に跡形もなく喰われてしまった。そして獄炎はユーファングを跡形もなく喰い尽くすと勢いよく、天へと向かい再び無数の粒子となりほのかに光を放ちながらやがて消えていった。

先ほどまでユーファングが存在した場所にはその残骸どころか消し炭一つすら残っていないかった。まるで本当にユーファングを自らの炎の一部にしたかのように。

「何て威力なの…。これが上級魔法…」

「鋼鉄でできた機動戦車が跡形もなく燃えてやがった！　すげえぜこりゃ！　——！？　おい、レオン！」

レイナたちが目の前で起きた衝撃的な出来事の余韻に浸っていた時、突如レオンが力なく地面へと崩れ落ちた。

間一髪のところマックが彼の体を支え、地面に激突することを防ぐことができたがレオンの表情は青ざめ、意識はない。マックは慌てふためきながらレオンの肩を揺さると必死に彼の名前を呼び続けた。

そんなマックの肩にレイナは軽く手を置くと彼にとりあえず落ち着くように促した。

「大丈夫よマック、ただ疲れて眠っているだけだわ。それにしてもここまでして上級魔法を発動させるなんて大したものだわ、レオン」

マックはレオンに命の別状がないことを知るとその場に崩れ落ちて安堵した。そして気持ちを落ち着かせると深い眠りに落ちたレオンの両腕を自分の肩に通し、自分の背中に乗せた。

「よつこらつしよつと、へ、よく頑張ったなレオン。安心して俺の背中で眠りな。それじゃ姐さん、急ぎましょう。隊長たちが待ちくたびれてますぜ！」

一段落付いたことでマックの表情にはいつもの笑顔が戻っていた。ところがレイナは両手の手のひらを上に向け、やれやれといった様子で彼に首を振って見せた。

「どうやら、ここの主はワタシたちをそう簡単には帰してくれないみたいよ？」

レイナの視線の方向を振り向いてみると何と多くの武装した兵士と数機のディーベルクペリルの現主力機動戦車がこちらへと向かってきているではないか！？

「全く、本当にしつこいんだから。まあ、いいわ。こうなったら四の五の言わず走るわよ！」

レイナの先導の下、マックたちは急いでオルフィスの着陸ポイントへと駆け出した。もはや彼らの体力は当の昔に限界を超えているわけであったが、時間がない今そのようなことは言っていられない。今ここに彼らと、彼らを追跡する敵勢力との最後の鬼ごっここの火蓋が切って落とされるのであった……。

男は一人ほのぐらい部屋の中でモニターに映る信じられない現実に驚きを隠せないでいた。

「ば、ばかな…、私のユーファングが二機ともやられるとは！？
ええい、こうなれば我が基地の全戦力をやつらにぶつけてくれる！」

「ずいぶんと楽しそうだな…」

男は突如、発せられた声に心臓が止まるかと思った。今この部屋にいるのは自分一人のはずであり、誰かが入ってきていたのなら音で気づくはずである。いったい誰が…？ 男は恐る恐る体を声の発せられた方向へと向けた。

「！！ あ、あなたは…黒騎士？！」

そこにいたのは全身鎧のような形状の黒いバトルスーツを身に纏い、その上からこれまた黒のマントを、そして極め付けに漆黒の虎を模した仮面で素顔を隠した、頭の前から足のつま先まで黒で固めた男こと、通称“黒騎士”が張り詰めた空気を纏いながら仮面越しにこちらも見つめていた。

「ふっ、この基地で何やらやましいものが造られているというから来てみたものの、何だこの有様は…。無様にもほどがあるぞ」

「はっ、申し訳ありません！ これも我が部下の不始末、誠に申し訳ありません。ですがご安心を我が基地の威信にかけてもやつらの

首を挙げて見せま——っ！！！！」

突如、男の口が彼の意思に反して言葉を出さなくなった。その上、男はわずかに宙を浮いていた。よく見ると男の口は暗闇でも目立つ黒い手で覆われている。

「……部下の不始末？ それは違うな……、これは貴様の不始末だ。貴様の身勝手さが多くの同士の命と、この有様を引き起こしたのだ。……それと貴様が上層部に無断で製作していた兵器、あれは完全なる大量殺戮兵器だ。そのような兵器、我がディーベルクの誇りを傷つけるだけだ！ ……貴様はまたしても我らの誇りに泥を塗りつけるか？ 貴様のようないかな私利私欲で動く男などディーベルクには必要ない。これらの責任、貴様の命で払ってもらおうぞ……」

「？！ ま、まっふえ——っ！！！！……」

男が言い終わる前に黒騎士は彼の口をふさいでいた手を離し、彼に背を向けていた。直後、男の体から勢いよく血しぶきが舞い上がった。よくみると男の肩から腰にかけて一本の刀傷が付けられているのではないか。消えかかる意識の中、男は自分の身にいたい何が起きたのか全く分からなかった。そして男は地面に倒れて息を引き取る最期まで自分が黒騎士に斬られたことに気づくかなかった。

「ふん、最期の最期まで哀れな男……。安心しろ、貴様が丹精を込めて築き上げたこの兵器の情報も一緒に送ってやる……」

黒騎士は刀身についた男の血を振り払ってから不気味に輝く刀を鞘に収めると、管制室のコンピューターからユーファンングに関する全ての情報を消去した。そして立ち去ろうとした時、ふと足を止め何かを考えたかと思うと刹那の速さで振り返り、そして既にその手

には刀が抜かれていた。

「特務隊か……。ふっ、おもしろい。次会うときはせいぜい楽しませてもらうでしょう」

そう言って黒騎士は再び刀を鞘に収めると何食わぬ顔で部屋を後にした。

扉がしまった直後、管制室のコンピューターは真つ二つに割れ無残に崩れ落ちた……。

潜入【八】（前書き）

これで潜入は終わりです。次回は本編ではなく外伝編のほうを更新しますのでお楽しみ下さい。^^

潜入【八】

——アルマン班——

「どうやら間に合ったようだな」

ユーファングとの戦闘後、司令からの通信を受け取ったアルマンたちはレイナたちより先に合流ポイントにたどり着いた。たどり着くまでの道のりの間、彼らは何人かの兵士を倒したが、その数は自分たち侵入者がいると分かっておきながらということを見ると幾分、少なすぎる気がした。

「みなさん、急いで乗ってください！　！？　副隊長たちはどうしたんですか？」

ケンたちの姿が目視できる前から暴れる気持ちを抑えることができなかった彼女は一足先に彼らの到着を乗艦口で待っていた。ケンの顔を見た彼女は歓喜の心で胸がはちきれんばかりになったが、すぐにレイナたちの姿がないことに不安を募らせた。

そんな彼女をアルマンはいたって落ち着いた声色で落ち着かせた。

そして彼女に詳細は艦橋で話すことを約束すると急いで三人は艦橋まで続く直通エレベーターに乗り込み、司令の下へと向かった。

エレベーターが艦橋にたどり着くと、彼らは扉が完全に開く前に半ば強引に飛び出した。そして焦る気持ちを抑えながらアルマンは自分たちの身に起きたことと、レイナたちの現状を伝え、離陸を遅らせるようオルフィスの艦長に願った。

「良いだろう。やつらを置いていくわけにもいかんからな。とにかく

く無事でなによりだ。とにかく後のことはワシに任せておけ」

アルマンたちの報告を聞き終えてまもなく、甲高い音を響かせながらオルフィスのレーダーは敵部隊が接近していることを艦員に警告した。

「どうやら敵も気づいたようだな……。よし、ステルス・フィールドの展開を解除！ 戦闘準備急げ！ バリア・フィールドの展開！ 同時に砲撃準備に取り掛かれ！」

レーダーが示す敵の数、位置を下にヒッターは各員に素早く、そして的確に指示を出し始めた。その姿は正に彼がどのような修羅場をくぐってきたのかを鮮明に示すかのごとく、威風堂々としたものであった。

敵はまだ目視で捉えるほど接近はしていなかったものの、やはりこちらには動かない巨大なもののようなもの。敵機動戦車の中には長距離射撃砲を装備しているものがあるようで何度か、オルフィスのバリアに直撃した。

オルフィスはアルフォードの最新技術を詰め込んだ戦艦であったが乗組員のほとんどが戦闘を経験していないものばかりであった。敵の砲撃はバリアには直撃し、その衝撃は艦全体に走るものの砲弾はバリアを貫いていないため、オルフィスは無傷である。しかし、これが初戦闘になる者はその衝撃に恐怖し、冷静さを失っていた。その中には弱々しく悲鳴を上げる者さえいた。

「うるたえるな！ フィールドの出力が低下しようとも気合で何とかしろ！ 砲撃の手を緩めるな！ 撃って撃って撃ちまくるのだ！」

怯えるクルーにノリスは心の内まで響くような大声で指示を出した。その声色は確かに迫力のあるものであったが怒りは込められておら

ず、先ほどまで脅えていた者たちも冷静さを取り戻していた。

「九時の方向に新たな反応を確認！ これは…、副隊長たちです！
！？ 更に後方より複数の敵反応確認！ 内、三機は機動戦車で
す。このままでは敵に追いつかれてしまいます！！」

「任しとき、リリスちゃん♪ ここはわいに任して格納庫のハッチ
開いてくれや♪」

レイナたちの生存に心から安堵したリリスではあったが彼女らを追跡している敵部隊を見て再び不安で胸が一杯になってしまった。そんな彼女に救いの手を差し伸べたのは、意外にもケネスであった。しかし彼の姿はどこにも見当たらない。それもそのはず、彼の声は通信機を通して聞こえているのだ。モニターに移る映像を見るかぎり、それは機動戦車の中であつた。

オルフィスの格納庫には特戦の幅広い任務内容を想定して三機の機動戦車が配備されている。配備された機動戦車はアルフォード軍の次世代機として開発中の最新機動戦車で名を《ウォーリス》という。試作機ではあるものの、既に量産化が決定しておりそのスペックは旧世代機とは比べものにならないほど向上している。

「えっ？ いったい何をするつもりなんですか？」

「なぐに、ちよいと姐さんたちを向かえに行ってくるだけや。あ、ちなみに拒否権はないで♪」

リリスはケネスが何を考えているのかさっぱり分からなかった。現状から考えて、彼が向かったところで何かができるわけではないと思っただからだ。しかし、リリスはモニター越しに映る彼の表情がいつもより少し違うような気がした。確かにその表情はいつものよう

にヘラヘラと笑っているのだがその眼は笑っておらず、迫力があつたのだ。

彼女はどのようにいにか分からず、すかさず司令に助けを求めた。するとこれまた意外に司令は彼のこの身勝手な行動を承認する意志を示したのであつた。

『ほな、ケネス行きまっせ〜!』

格納庫のハッチが開くとケネスは待ちわびていたかのように搭載されたブースターの出力を全開で流星の如く滑走した。

——レイナ班——

「くそ、もうオルフィスは見えているってのに……このままじゃやつらに追いつかれちまう!」

敵部隊の追跡から逃亡すること数十分。限界を当に過ぎている脚部は既に痛みすら感じなくなり、もはや彼らは自分たちが走っているのかさえ分からないほど衰弱しきっていた。それでもここまで敵の追跡を逃れたのも彼らの精神力の賜物といえるだろう。

しかし、オルフィスまであとわずかというところで当等彼らの気力でもどうしようもないくらい体が動かなくなった。特にマックは巨体でありその上、五十キロもするガトリング砲―バルスト―抱えながらレオンを背負っているため、その疲労は深刻なものであつた。

「!? マック、見て! オルフィスから何かが向かってくるわ!」

彼女らが半ばあきらめかけていた時、レイナはソレが忽然とやってくるのをその眼に捉えた。

最初はうつすらとしか見てとることができなかったが徐々に近づいてくるにつれてその蒼く輝く輪郭をはっきりと捉えた。

「くく、どうやら限界のようだな。ここまでがんばった褒美だ。楽に逝かせてやる。各員、俺の合図と共にいっせい——っ!!」

敵機動戦車ベリルの搭乗者がレイナたちに標準を合わせようとした時、突如視界が真っ白になってしまった。彼は自分の身に何が起きたのか分からず次の瞬間、彼のベリルは大爆発を起こし黒煙を上げた。

目の前で爆発した機動戦車に他の敵兵は啞然としてしまう。そして黒煙の向こう側から蒼き機動戦車がさながら蒼天を華麗に飛び交う鷹の如き風格で滑走してくることに気づく。

「姐さん、レオン、あんまり遅いんで向かいにきましたかな」
「」

「ケネス！　ありがとう、助かったわ」

「おいこらケネス！　俺様を忘れるんじゃないやねえ？！」

どんなに緊迫した状況であれ、この男はシャレを忘れることはない。だからこそ頼もしくもある。いつものようにマックをイジるケネスを見てレイナは彼の底知れぬ精神力に感服していた。吐きゼリフは余裕がなくても述べることはできるがシャレは余裕がなければ不可能だ。それなのに彼は単身機動戦車一機で敵部隊に突っ込んでくるという無謀なことをしているのに、その声色はいつものように軽くそしてシャレまで平然と放った。いくらいつもこのような調子だか

らといってこのような命の危険性の高い場所で言えるのは命の危険性も察知できない馬鹿か、それほどまでに余裕をもてるほどの自信があるということだ。レイナはこれまで彼と接してきた経験から間違いない彼は後者であると断言し、感服しているのだ。

「文句は後で聞いてやるさかい、はよ乗りなはれ」

そのように思われているなどケネスは知る由もなく、機動戦車の左マニピレーターを開き、地面につけると彼女らをその上に乗せた。最もいつもの調子でマックだけを置いていこうとしたわけだが……。

「敵機動戦車が逃げるぞ！ 撃て、撃て――！！」

突然、現れたケネスが扱う機動戦車に敵兵は驚愕しながらも必死に破壊しようと砲撃し続けたが放たれた無数の砲弾のうち、一つとしてウォーリスに当てることはできなかった。

「甘い、甘い―― そげな腕でよう機動戦車乗りが勤まるな」

皮肉を述べるケネスの機体はまるで決められた道を進むかのように動きに無駄がなく、あっという間にオルフィスにたどり着いてしまった。

「三名の収容を確認しました。離陸スタンバイ、ケネスも早く帰還を」

「いや、どうもそうはいかんようや……」

レイナたち三人を直接艦橋に下ろしたケネスはリリスの指示に従うことなく、機体を反転させると背部にマウントされていたガトリン

グ砲を正面に向け、肩部に固定した。

「このままやったらオルフィスは狙い撃ちされてしまう。わいがここでやつらを食い止めるき、はよ離陸しなはれ！」

ケネスから放たれた言葉に一同は騒然とした。

「そんな！ それじゃケネスを置き去りにすることになります！！」

「バカなことしないで早く戻りなさい、ケネス！」

「姐さんの言うとおりだぜ！ 文句を言わずさっさと戻りやがれこの馬鹿野郎！！」

彼の言葉にリリス、レイナ、マツク三人が三人とも同じく彼の言葉に反論を返した。しかし、そのような返答ははなから分かっていたかのようにケネスはそのまま機体を前進させた。

「わいのことは気にせんでええ。なぐに、別に今生の別れというわけやないんや。ほんじゃ運がよければまた会いましょー」

そしてケネスはそのまま振り返ることもなく一直線に、追跡してくる敵部隊目掛けて滑走した。

「メインエンジン点火……。総員、離陸時の衝撃に備えよ。オルフィス発進！！」

その言葉は唐突に放たれた。ヒッターは、いつもと変わらぬ堂々とした態度で艦員に離陸命令を出した。まるでケネスという隊員がはなから存在しなかったかのように、その声色に迷いはなかった。

「そんな！ 本当にケネスを見捨てるんですか！？ 彼は自分たちの仲間ですよ！？ そんな彼を平気で置き去りにするなんてどうかしていますよ！？ 司令は所詮自分たちを単なるコマとしか——っ
！！！」

その一言にケンは当等押し殺していた内なる思いをヒッターにぶつけた。何故、助けようと思わないのか？ 何故、そうも簡単に仲間を見捨てられるのか？ 何故、仲間を見捨ててもそのように平然としていられるのか？ 彼には到底理解できなかった。

だがそんな理性の爆発したケンに司令は軽いため息をつくとそのままの状態で彼の顔面に思いつき裏拳を放った。その硬い拳は完全にケンの不意をつき、見事にクリーンヒットした。突然、自分の顔面に襲った衝撃にケンは何が起きたか分からず無残にもその場に崩れ落ちた。

「目が覚めたか、ケン。お前は何か大切なことを忘れているぞ」

「司令の言うとおりだ、ケン。ケネスはおれ達のことを考えて自ら残ることを決めたんだ。このままお前の言うとおりおれ達が戻れば、それはケネスの意思を無駄にすることになる」

司令の言葉に続き、アルマンがケンに問いかけるように司令の考えを代弁した。その内容はケンも分かっていることであつた。だがケンは理屈で動く人間ではない。彼はいつも己が信じる義の下に動いてきた。その中に仲間を見捨てるというものは存在しない。だからこそケンはどうしても食い下がることができないでいた。

「……それは、それは分かっています！ でもオレは、オレはもう、誰も失いたくないんです！！」

「ケン、あなたの言うことはよく分かるわ。その想いはワタシたちも一緒よ。でも時としてワタシたちは苦渋の選択をしなければならぬ。例えばそれが仲間を見捨てることになっても、ワタシたちは任務遂行を優先させなければならぬわ。それが国に忠誠を誓ったワタシたち軍人というものよ」

レイナから放たれた言葉は非常に柔らかい声色していたがその内容はケンにとって一言言っただけで欲しくないものであった。自分はケンという一人の“人間”である前に、アルフォードの“軍人”である。そして軍人が何よりも優先させなければならないのが任務。それは軍人になると決意した時に重々理解していたつもりであった。だが所詮、“つもりだった”ということを経験した紅髪の剣士は彼女の言葉が耳に入ってきたときに痛感した。

何も反論することができない自分に悔しいのか、ケンは唇を血が出るまで噛み続けている。そんな様子の彼を見てマックが頭を掻きながらそっと近づくとケンの両肩をぐっとつかみ、彼の眼を見つめながら“軍人”としてではなく、“男”としての意見を述べ始めた。

「おめえの気持ちはよく分かるぜ。俺だってあいつを置き去りなんかにしたくねえ。だがな、ケン。男だったらここはあいつの気持ちを受け止めるべきだぜ！　へっ、それにしても何一人でかつこつてやがるんだかケネスの野郎め。ま、あの野郎のこつた、案外すんなり俺たちの目の前に現れたり……」

突如、バベル基地の方角から衝撃波と共に激しい爆発音が響き渡った。啞然とするケンたちが見たものは、先ほどまでバベル基地があった場所から巨大な黒煙がもくもくと昇っている光景であった。

「ウォーリスの反応……ロストしました……」

リリスは自分でも言っていることがよく理解できなかった。だが目の前のモニターに映るケネスの登場するウォーリスの反応が忽然と消えたのだ。

彼女の発言に誰しもが言葉を失った。頭で理解できても心がその事実を拒絶する。時が止まるとは正にこのことだと艦橋にいた全ての人間が思った。

司令のヒッターでさえ、一瞬自分の目と耳を疑った。

事実を次第に受け止めた彼らはその場に立ち尽くし、下を向くしかなかった。沈黙が艦橋を多い尽くしていた。

ケンは目を見開いて必死で目の前に映し出される光景と先ほどリリスの述べた事実を拒絶しようとした。だが何度拒絶しようとしてもそれらの情報が何度も自分の心に入り込もうとする。そしてようやく事実を受け止めた時、彼の内側から表現しようのない感情がこみ上げてきた。そしてそれはあっさりとケンの理性を貫くと一気に外側へと溢れ出した。

「あ、あ、っ！！ うああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

ケンの悲痛の叫びは一気に艦橋の沈黙を吹き飛ばした。その勢いは治まることをしらず、どこまでも、どこまでも響き渡るのであった

……………。

潜入【八】（後書き）

第一部主な登場人物の紹介

くアルフォード王国く

―特殊戦略部隊―

ケン・シュナイダー：第一部の主人公：16歳：男性：紅色の短髪：
黒色の瞳：アルフォード王国の機動歩兵として前線でその自慢の剣
術を巧みに使って活躍していた。その腕が買われアルフォード国王
直属の部隊で特殊戦略部隊、通称『特戦』に配属される。彼が軍に
入隊したのには悲しい過去が関わっている。彼が使用する剣術は天
魔無双流と呼ばれるものでそのあまりに巨大な力のために神にも魔
にもなれると言われている。またその所持する剣もこの世界で流通
している両刃の剣ではなく、片刃の剣、刀である。情に熱い男でこ
の情こそが彼の長所でもあり短所でもある。新たな刀、《グラディ
ス》を手に入れる。

アルマン・ギルガネス：隊長：26歳：男性：黒色の中髪：茶色の
瞳：人柄がよく誰にでも好かれる人物。任務のために冷酷になろう
と努力しているがいざとなると人命を優先してしまう。ギルガネス
家の人間で超人的な運動能力を持つ。その運動能力は発射された弾
丸を簡単に避けられるほど。刃物から銃までありとあらゆる武器
を使いこなすエキスパートでもある。【アルフォードの戦神】（も
しくは戦神）という二つ名でディーベルクの兵士から恐れられてい
る。以前、リースというレギオスの妹と恋人関係にあったが任務中
誤って彼女を殺害。これによってレギオスの恨みを買ひ、親友から

敵へと変わってしまう。レイナに特別な感情を抱き始めている。

レイナ・フランク：副隊長：25歳：女性：紫色の長髪：緑色の瞳：隊の中では頼れるお姐さんの存在。狙撃の名手でその集中力は三日間、同じ射撃体勢でいられるらしい。アルマンに特別な感情を抱き始めている。

マック・エイガー：ムードメーカー：20歳：男性：茶色の短髪：青色の瞳。大柄で長身。細かいことは気にしない豪快な性格。基本的にバルカン砲などの重火器を使用して戦うが他にも白兵戦用に大雑刀を使用する。ケネスによく振り回される悲しい人。今回、倒れたレオンを背負うという優しい一面を見せた。

レオン・マッケイン：天才：17歳：男性：水色の中髪：銀色の瞳：IQ200を超える超天才。言葉数が少なく、無愛想。その頭と魔法で数々の戦いを勝利へと導いてきた。また、ハッキングを得意とし、セキュリティ解除や、情報の奪取なども行う。いつも読んでいる古文書は唯一自分の記憶を辿る手ばかり。今回、初の上級魔法を披露した。しかし、発動後、疲労により気絶してしまう。

ケネス・フロイド：曲者：20歳：男性：黄土色の中髪：黒色の瞳：妙な言葉遣いをするお調子者だが任務の時には隠れた冷酷さを見せることがある。爆弾に関しては確かな腕を持つ。特戦の曲者的存在。新兵器の開発に成功。マックをからかうのが得意。今回、新兵器、《グラディス》により大活躍をみせた。しかし、その後一人、機動戦車で基地に残り、生死不明となる。

リリス・クラフト：オペレーター：16歳：女性：朱色の中髪：水色の瞳：性格は非常に明るく、特戦のマスコットの存在。彼女の存在が隊員の戦場で受けた心の傷を癒しているのは疑いようがないだろう。オペレーターとしての腕も確かなものを持っている。ケンに対して特別な感情を抱き始めている。

ノリス・ヒッター：司令官：56歳：男性：灰色の短髪：茶色の瞳：若かりし頃は【戦場の稲妻】という二つ名で恐れられていた。今でもそのたくましい体つきは衰えておらず、また歳を取ったことでより一層その風格は増している。人としても戦士としても隊員達に影響を与える人物。ちなみに【戦場の稲妻】という二つ名は彼が使用するガントレットが電撃を流すことが由来。国王とはフィルスをやるほど親しい仲。今回、司令としての本領を発揮した。

くディーベルク王国く

???：黒騎士：???歳：男性：???：???：今回チラツと登場したディーベルク最強の戦士。とにかく謎！とにかく黒い！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6357a/>

TSUWAMONO ~ 第一部 ~ 友との絆・互いの思い

2010年10月14日23時45分発行